

公益社団法人日本地球惑星科学連合  
平成 29 年度 第 4 回理事会

開催日時 平成 29 年 11 月 28 日 (火)  
15 時 00 分から 18 時 00 分

開催場所 東京大学理学部 3 号館 320 号室  
(東京都文京区本郷 7-3-1)



# 平成 29 年度第 4 回理事会議事次第

## 1. 開 会

### 議事内容

## 2. 審 議 事 項

- 第 1 号議案 新入会員承認の件
- 第 2 号議案 委員会委員承認の件
- 第 3 号議案 リソスフェア・マントルのダイナミクスに関する第 2 回アジア・太平洋域  
ワークショップ共催申請承認の件
- 第 4 号議案 日本地球惑星科学連合学術賞(三宅賞)候補者募集要項承認の件
- 第 5 号議案 その他(ハラスメントアンケート実施について)

## 3. 報 告 事 項

- 1. 川幡穂高 代表理事職務報告
- 2. 田近英一 理事(広報担当)職務報告
- 3. 中村正人 理事(顕彰担当)職務報告
- 4. 古村孝志 理事(総務担当)職務報告
- 5. 北和之 理事(財務担当)職務報告
- 6. 倉本圭 理事(ジャーナル担当)職務報告
- 7. 浜野洋三 理事(大会運営担当)職務報告
- 8. グローバル戦略委員会活動報告 木村学 理事
- 9. 教育検討委員会活動報告 西弘嗣 理事
- 10. 環境災害対応委員会活動報告 高橋幸弘 先生
- 11. 情報システム委員会活動報告 村山泰啓 先生
- 12. ユニオンサイエンスボード報告 川幡穂高 代表理事
- 13. その他

## 4. 閉 会

(資 料)

前回議事録

平成 29 年度第 3 回理事会議事録 . . . . .	P.1- P.5
-------------------------------	----------

審議事項

第 1 号議案 新入会員承認の件	P.6-9
第 2 号議案 委員会委員承認の件	P.10
第 3 号議案 リソスフェア・マンツルのダイナミクスに関する第 2 回アジア・太平洋域ワークショップ共催申請承認の件	P.11-15
第 4 号議案 日本地球惑星科学連合学術賞(三宅賞)候補者募集要項承の件	P.16-19
第 5 号議案 その他(ハラスメントアンケート実施について)	P.20-25

報告事項

1.川幡代表理事職務報告	P.26-30
2.田近理事(広報担当)職務報告	P.31
3.中村正人理事(顕彰担当)職務報告	
4.古村理事(総務担当)職務報告	P.32-40
5.北理事(財務担当)職務報告	別添
6.倉本理事(ジャーナル担当)職務報告	P.41-52
7.浜野理事(大会運営担当)職務報告	P.53-61
8.グローバル戦略委員会活動報告	P.62-68
9.教育検討委員会活動報告	P.69-73
10.環境災害対応委員会活動報告	P.74-76
11.情報システム委員会活動報告	P.77-84
12.ユニオンサイエンスボード報告	P.85-87
13.その他	

その他の資料

規則 . . . . .	別添
--------------	----

公益社団法人日本地球惑星科学連合

平成 29 年度第 3 回理事会議事録

1. 開催日時 平成 29 年 9 月 29 日 (金)

15 時 10 分から 18 時 10 分

2. 開催場所 東京大学理学部 1 号館 331 号室

(東京都文京区本郷 7-3-1)

3. 出席者 理事数 19 名

出席理事 14 名 (定足数 10 名 会議成立)

出席監事 0 名

オブザーバー 5 名

4. 議長 理事 川幡 穂高

5. 出席役員

理事 川幡 穂高

理事 田近 英一

理事 古村 孝志

理事 井出 哲

理事 小口 千明

理事 北 和之

理事 木村 学

理事 倉本 圭 (ZOOM 出席)

理事 瀧上 豊

理事 西 弘嗣

理事 浜野 洋三

理事 原田 尚美

理事 日比谷 紀之

理事 道林 克禎

6. 出席オブザーバー

宇宙惑星科学セッションボードプレジデント 高橋 幸弘

大気水圏科学セッションプレジデント 蒲生 俊敬

大気水圏科学セッション幹事 川合 義美

学協会長会議幹事会 (議長・日本第四紀学会) 齋藤 文紀

学協会長会議幹事会 (日本地質学会) 渡部 芳夫

15時10分、理事の定数に足る出席を確認後、会長川幡穂高は理事会が成立することを宣言し、第3回理事会を開始した。インターネット電話 ZOOM を利用し、遠隔地から参加する倉本圭理事が審議に参加できることを確認した。

#### 【前回議事録確認】

第2回理事会議事録について、確認し、了承された。

### 7. 審議事項

#### 第1号議案 新入会員承認の件

定款第8条2項の会員の入会の定めに従い、新規入会者の入会を承認した。

今回承認された2017年9月28日17時時点の新入会員を含む正会員をもって、次回のセクションプレジデント選挙の選挙人とすることを確認した。

#### 第2号議案 委員会委員承認の件

ジャーナル編集委員会委員、フェロー審査委員会委員を承認した。

#### 第3号議案 パブリックセッション小委員会設置の件

広報普及委員会の小委員会としてパブリックセッション小委員会の設置を審議し、これを承認した。パブリックセッション小委員会を設置し、広報普及委員会の規則を改訂した。なお小委員会委員の任期開始と終了時期は広報普及委員会のものに準じることを確認した。

#### 第4号議案 地球科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の提案書提出の件

地球科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の申請について検討した。科学研究費補助金(国際情報発信強化)に関し、日本地球惑星科学連合としては PEPS も EPS も両方とも、これまでの活動が評価され、次の科学研究費補助金を頂けるよう協力して提案書をまとめるべく議論を重ねてきた。9月初旬に科学研究費補助金提案書のフォーマットが公開されたが、記載の部分が前回と比較すると非常にコンパクトになった。そこで、①PEPS については JpGU が、EPS については EPS を代表する学会が代表提案者となり、申請書を提出することとなった。②提案できる金額なども考慮し、PEPS と EPS の両方ともカテゴリーA で申請することとなった。今後、地球惑星科学の研究コミュニティが支えて、EPS が発展できるよう、EPS の提案機関として JpGU も加わることとなった。③EPS の出版に関し、JpGU は現在オブザーバーとして関与しているが、科学研究費補助金の4年目から JpGU は関連学会と協力し、EPS を共同出版する予定である。以上の三点を審議し、これらが承認された。

#### 第5号議案 公益社団法人日本地球惑星科学連合学術賞三宅賞規則承認の件

公益社団法人日本地球惑星科学連合学術賞三宅賞の規則ならびに審査委員会規則の設置および審査委員会委員の選任について審議し、これを承認した。同賞の審査・授与は、2018年度より行う。

#### 第6号議案 2021年連合大会開催会場の件

2021年連合大会をパシフィコ横浜の新施設にて、2021年5月30日より6月3日に開催することを審議し、これを承認した。

## 8. 報告事項

### (1) 川幡穂高代表理事職務報告

地球科学研究費補助金申請、三宅賞設置の準備について詳細の報告があった。

### (2) 田近英一理事（広報普及担当）職務報告

広報普及委員会の活動について報告があった。

パブリックセッション小委員会が承認されたため、パブリックセッションについては今後小委員会が対応する。現在、連合ホームページのリニューアル作業中である。

次号 JGL は 11 月 1 日付で発行の予定である。公開講演の開催は現時点では未定である。

### (3) 中村正人理事（顕彰担当）職務報告

中村正人理事の代理で、事務局より本年度のフェロー募集について報告があった。10月6日より推薦受付を開始する12月31日までの推薦受付期間となる。

### (4) 古村孝志理事（総務担当）職務報告

前回理事会以降に連合が承認した協賛・後援、発行したサポートレターについて報告があった。

選挙の進行状況について報告があった。現在代議員選挙の投票を受け付け中である。

また、ウォリス・サイモン理事から会長宛に辞任届が提出されたため、法務局に登記し、正式に退任手続きを終えた旨報告があった。

就業規則については事務局職員との面談を終え検討中である。来年度予算などを踏まえ、後ほど理事会に提出予定である。

### (5) 北和之理事報告（財務担当）職務報告

2017年度（平成29年度）決算予想作成について報告があった。各セクション・委員会に、9月30日現在の予算執行状況の確認と年度末までの予算執行見通しについて、依頼メールを送るので、協力して欲しい旨の要請があった。決算見通し（案）については、11月の理事会に提出予定である。

2018年度（平成30年度）予算書作成について、10月後半に、次年度予算書作成の為に各セクション・委員会に予算提出依頼をする予定であることが報告された。

### (6) 倉本圭理事（ジャーナル担当）職務報告

論文投稿・出版状況について報告があった。昨年を上回るペースで順調に投稿受付・出版を行っている。委員会開催状況と議論の内容についても報告があった。Data paper の出版について、既存のものとの差別化を明確にするため、名称を” Paper with full data attached” と変更した。連合大会の予稿の引用を認めることとしたが、連合大会の予稿に doi 番号を付与することについては調査中である。

#### (7) 浜野洋三理事（大会運営担当）職務報告

2018年連合大会の準備状況について報告があった。現在セッション提案の募集中であり、現段階でのセッション提案の受付状況の報告があった。セッションに、セッション提案を推進していただくよう要請があった。

2018年、2019年、2020年、2021年の会場について報告があった。2018年から2020年は幕張メッセ、2021年はパシフィコ横浜の新施設を会場とする。

#### (8) グローバル戦略委員会活動報告

7月30日から8月4日にかけて神戸で開催されたIAG-IASPEI2017および8月6日から8月11日にシンガポールで開催されたAOGS2017へブース出展をした旨報告があった。AOGSではEGUとAOGSを交えてミーティングを開催した。AGUは不参加であった。

また、参加学協会のアジアにおける展開の現状を調査するために、10月12日に開催される学協会長会議において「アジア太平洋地域における学協会との協力関係に関するアンケート」への協力を得たい旨アジア太平洋作業部会より提案があった。学協会レベルでの交流は回答が少ないことが予想されるので、学協会を通じて交流のある個人レベルの回答が得られるような工夫が必要ではないかという意見があった。

#### (9) ダイバーシティ推進委員会報告

5月25・26日に開催された「Gender Summit 10」へポスター発表をした旨の参加報告があった。また、8月5日から7日に開催された「女子高生夏の学校2017～科学・技術・人との出会い～」へ参加した旨報告があった。関連学会からの参加は増加し、参加者への認知度も上がっている。

#### (10) 教育検討委員会活動報告

教育課程小委員会、教育国際対応小委員会の活動について報告があった。文部科学省への提言の提出、地球惑星科学実習手帳の配布、地学教育研究集会プログラム、AGIとの協議について報告があった。

教員免許状更新講習の開催報告があった。本年は4講習を開催し、無事終了した。次回の理事会までに報告書を提出する。次年度の講習の開催の有無については、2017年度の活動を評価した上で検討する。

地学オリンピック、地理オリンピックの開催報告があった。2017年の国際地学オリンピックは日本が同率2位（金メダル3、銀メダル1）、国際地理オリンピックでは個人部門では銀メダル1と銅メダル1の成績で、団体部門ポスターセッションでは第1位であった。地学・地理いずれも、9月1日より次期大会の参加受付が開始となる。

日本学術会議の地球惑星科学委員会人材育成分科会の地学地理用語検討小委員会で、用語の統一についての報告がまとまったので、間もなく公開される見通しである。

議長は以上をもってすべての議事を終了した旨を述べ、閉会を宣した。（18時10分）

以上の議事の要領及び結果を明確にするため、本議事録を作成し、出席役員は次に記名・押



印する。(捺印欄配布時省略)

平成 29 年 9 月 29 日

公益社団法人日本地球惑星科学連合 第 3 回理事会

出席理事 川幡 穂高 印

出席理事 田近 英一 印

出席理事 古村 孝志 印

出席理事 井出 哲 印

出席理事 小口 千明 印

出席理事 北 和之 印

出席理事 木村 学 印

出席理事 倉本 圭 印

出席理事 瀧上 豊 印

出席理事 西 弘嗣 印

出席理事 浜野 洋三 印

出席理事 原田 尚美 印

出席理事 日比谷 紀之 印

出席理事 道林 克禎 印

平成 29 年 10 月～平成 29 年 11 月度 入会会員

個人情報<sub>の</sub>為非公開とする

平成29年度会員数推移

	正会員						准会員						大会員						AGU会員					
	入会	変更(+)	退会(-)	喪失(-)	削除(-)	現会員数	入会	変更(-)	退会(-)	喪失(-)	削除(-)	現会員数	入会	退会(-)	削除(-)	現会員数	入会	退会(-)	削除(-)	現会員数	入会	退会(-)	削除(-)	現会員数
3月末						8115						663				703								1238
4月	126	49			1	8289	65	49		2	677	70				773	16							1254
5月	226	43		2	7	8549	310	43			944	400				1173	42							1296
6月	5	3			4	7743	1	3		6	936	0				1173	2							1298
7月	4			6		7741	1		2		935	0				1173	4							1302
8月	3			4		7737	0				935			1164		9	15		1					1316
9月	2					7739	0				935	10			2	17	11		3					1324
10月	16	1		2	3	7751	2	1		3	932	18			2	33	22		2					1344
11月	2			3		7750	2				934	0				33	9							1353
12月																								
1月																								
2月																								
3月																								
	384	96	17	810	18	7750	381	96	3	0	934	498	0	1168	33	121	0	6						1353

正会員 7750名  
2017/11/27

准会員 934名

大会員 33名

AGU会員 1353名

変更  
准会員から正会員へ

	団体会員		賛助会員		現会員数
	入会	退会	入会	退会	
3月末					6
4月			50		6
5月			50		6
6月			50		6
7月			50		6
8月			50		6
9月			50		6
10月			50		6
11月			50		6
12月					
1月					
2月					
3月					
	0	0	50	0	6

全会員

3月末	10,719名
4月	10,993名
5月	11,962名
6月	11,150名
7月	11,151名
8月	9,997名
9月	10,015名
10月	10,060名
11月	10,070名
12月	名
1月	名
2月	名
3月	名

# 環境災害対応委員会名簿

任期:平成30年5月末まで

2017年11月28日現在

No.	役職	選出学協会	氏名	所属
1	委員長	環境・災害担当理事	奥村 晃史	広島大学大学院文学研究科
2	理事副担当		井出 哲	東京大学
3	副委員長	日本地質学会	川畑 大作	産業技術総合研究所地質情報研究部門
4		日本地理学会	青木 賢人	金沢大学 人間社会学域地域創造学類環境共生コース
5		理事/大気化学会	北 和之	茨城大学理学部
6		先期委員長	田中 賢治	京都大学防災研究所
7		日本応用地質学会	竹村 貴人	日本大学文理学部地球科学科
8		日本応用地質学会	井口 隆	防災科学技術研究所
9		日本火山学会	山里 平	気象研究所
10		日本火山学会	三浦 大助	電力中央研究所 地球工学研究所 地圏科学領域
11		日本気象学会	塩竈 秀夫	国立環境研究所地球環境研究センター
12		日本気象学会	小司 禎教	気象研究所気象衛星・観測システム研究部
13		水文・水資源学会	葛葉 泰久	三重大学大学院生物資源学研究科
14		日本雪氷学会	河島 克久	新潟大学災害・復興科学研究所
15		日本堆積学会	松本 弾	産業技術総合研究所
16		地学団体研究会	宮地 良典	産業技術総合研究所
19		日本地質学会	小荒井 衛	茨城大学理学部理学科
20		日本地熱学会	柳澤 教雄	産業技術総合研究所 再生可能エネルギー研究センター
21		日本地圏学会	宇根 寛	国土地理院
22		地理科学学会	浅野 敏久	広島大学大学院総合科学研究科
23		地理情報システム学会	後藤 真太郎	立正大学地球環境科学部
24		東北地理学会	村山 良之	山形大学大学院教育実践研究科
25		東北地理学会	大月 義徳	東北大学大学院理学研究科
26		日本リモートセンシング学会	作野 裕司	広島大学大学院工学研究院
27		日本陸水学会	知北 和久	北海道大学大学院理学研究院
28		日本第四紀学会	卜部 厚志	新潟大学災害・復興科学研究所
29		日本鉱物科学会	鈴木 正哉	産業技術総合研究所地質調査総合センター
30		日本活断層学会	小俣 雅志	株式会社パスコ
31		日本地震学会	松島 信一	京都大学防災研究所
32		日本水文学会/日本地下水学会	林 武司	秋田大学教育文化学部
33		日本地理教育学会	青木 久	東京学芸大学教育学部地理学分野
34		日本古生物学会/地球環境史学会	北村 晃寿	静岡大学理学部
36		日本地球化学会	益田 晴恵	大阪市立大学理学院理学研究科
37		日本粘土学会	小口 千明	埼玉大学地圏科学研究センター
以下、今回承認新委員				
17	新委員	地球電磁気・地球惑星圏学会	山本 裕二	高知大学海洋コア総合研究センター
18	新委員	地球電磁気・地球惑星圏学会	松嶋 政貴	東京工業大学理学院地球惑星科学系
35	新委員	東京地学協会	小荒井 衛	茨城大学理学部理学科
17	交代の為退任	地球電磁気・地球惑星圏学会	小嶋 浩嗣	京都大学生存圏研究所
18	交代の為退任	地球電磁気・地球惑星圏学会	岡田 雅樹	国立極地研究所
35	交代の為退任	東京地学協会	山下 亜紀郎	筑波大学生命環境系

2017年 10月 20日

公益社団法人日本地球惑星科学連合 会長 御中

共催・協賛・後援承認申請書

申請団体名：AGMT2018 実行委員会

申請者住所：愛媛県松山市文京町2-5

申請者名：亀山 真典（AGMT2018 実行委員会委員長）

行事名（英訳名）	リソスフェア・マンツルのダイナミクスに関する第2回アジア・太平洋域ワークショップ （英文公式名がある場合：The 2 <sup>nd</sup> Asia-Pacific Workshop on Lithosphere and Mantle Dynamics 会議の種類：（ <input type="checkbox"/> 国内会議 <input checked="" type="checkbox"/> 国際会議 ）
主催者名	国立研究開発法人海洋研究開発機構ならびにAGMT2018実行委員会
開催日	2018年8月6日（月）～2018年8月9日（木）
開催場所、所在地	場所：国立研究開発法人海洋研究開発機構 横浜研究所 所在地：〒236-0001神奈川県横浜市金沢区昭和町3173-25
申請の種類	<input checked="" type="checkbox"/> 共催 （企画又は運営に参画し共同で開催する） <input type="checkbox"/> 協賛 （趣旨に賛同し、必要に応じて金銭的・人的支援をする） <input type="checkbox"/> 後援 （趣旨に賛同し、必要に応じて人的支援をする） <input type="checkbox"/> その他 （ ）
金銭・人的援助の有無	無・ <input checked="" type="checkbox"/> （具体的に：基調講演者2名の旅費一部援助：200000円x2；基調講演者5名分の参加費30000円x5）
行事趣旨	本ワークショップはアジア・太平洋地域のリソスフェア・マンツルのダイナミクスに関する研究者を結集し、研究成果の共有や、新たな共同研究の契機となることを意図している。2016年9月に台湾で開催された第1回目続く第2回目のものである。
共催、協賛、後援等団体名(申請中も含む)	
希望する共催・協賛・後援の名称	<input checked="" type="checkbox"/> 公益社団法人日本地球惑星科学連合 その他（ ）

連絡先 (受理通知等送付先)	所在地：〒790-8577 愛媛県松山市文京町2-5 団体名：愛媛大学 地球深部ダイナミクス研究センター 担当者名： 亀山 真典 TEL：089-927-9652 FAX：089-927-8167 E-mail：kameyama@sci.ehime-u.ac.jp
参加費等	( <input type="checkbox"/> 無料 <input checked="" type="checkbox"/> 有料 ) 参加予定人数 60 人 会員 団体 円 個人 30000円 学生 15000円 非会員 団体 円 個人 円 学生 円
会議のホームページ	<a href="http://agmt2018.html.xdomain.jp/">http://agmt2018.html.xdomain.jp/</a>

\*選択する項目については囲むか、チェックをお入れ下さい。

\*会議・行事の趣旨のわかる、開催案内、プログラム、組織委員会名簿、会議全体の予算、開催案内、プログラム等を添付して申し込み下さい。

\*原則として、経費や人的負担はいたしかねますが、必要あれば妥当性を判断しますので希望をお知らせください。

\*公益社団法人地球惑星科学連合の名称のほか、同セッション名や委員会名での共催・協賛・後援ができますので、ご希望をお知らせ下さい。

\*2013年12月19日理事会書式改正

## 会議の趣旨と実施要領

名称 2<sup>nd</sup> Asia-Pacific workshop on lithosphere and mantle dynamics

期間 2018年8月6日から9日（受付は5日から）

場所 国立研究開発法人海洋研究開発機構横浜研究所

### 趣旨

本ワークショップは、ヨーロッパにおけるマントルダイナミクスならびにリソスフェアダイナミクスモデリングに関するワークショップ（International workshop on modelling of mantle and lithosphere dynamics）の趣旨を基本にして、アジア-太平洋域のマントルダイナミクス及びリソスフェアダイナミクスの最新研究成果を議論・情報交換する場を提供し、関連研究者のアジア-太平洋域レベルだけではなく全世界的な国際的なネットワークを形成することを目的としている。ワークショップ自体は、2年ごとに開催している。

### 主催

国立研究開発法人海洋研究開発機構

### 運営母体

研究者有志（SSC＝科学コミッティー間の議論で運営がなされている）

### SSC名簿

Frédéric Deschamps (Academia Sinica, Taiwan, Associate Research Scientist)

Eh Tan (Academia Sinica, Taiwan, Assistant Research Scientist)

Fabio Capitanio (Monash University, Australia, Associate Professor)

Dao-Yuan Sun (University of Science and Technology of China, Professor)

Changyeol Lee (Chonnam National University, South Korea, Associate Professor)

中川貴司（海洋研究開発機構・主任研究員）

### LOC名簿

委員長 亀山真典（愛媛大学・教授）

利根川貴志（海洋研究開発機構・研究員）

中川貴司（海洋研究開発機構・主任研究員）

## LOC アドバイザー名簿

小平秀一（海洋研究開発機構・研究担当理事補佐・センター長）

田中聡（海洋研究開発機構・分野長代理）

堀高峰（海洋研究開発機構・グループリーダー）

参加費（予定） 一般 30,000 円、学生 15,000 円

参加者数（見込） 一般 40 名、学生 20 名、合計 60 名（招待講演者を含む）

## プログラム概要（予定）

8 月 5 日午後 受付開始

同夕刻 アイスブレイカー

8 月 6 日午前 セッション 1（海洋底掘削科学）

同午後 セッション 2（地震発生物理）

8 月 7 日午前 セッション 3（沈み込み帯のイメージング）

同午後 セッション 4（表層から深部に至る地球ダイナミクスモデリング）

同夕刻 懇親会

8 月 8 日午前 セッション 5（地球化学・鉱物物理学）

同午後 セッション 6（惑星ダイナミクス）

8 月 9 日 エクスカーション

各セッションの構成は、基本的に基調講演 1 つと 2 つの研究講演で構成される。一般の参加者はポスター発表を行う。ポスター発表は約 30 件程度見込まれ、開催期間全日掲示により、参加者同士の自由な議論を促進する。

## 招待講演予定者（決定分のみ；順不同）

平朝彦（海洋研究開発機構・理事長；日程調整中）

木村純一（海洋研究開発機構・分野長代理）

中島淳一（東京工業大学・教授）

寺川寿子（名古屋大学・講師）

田阪美樹（島根大学・講師）

鎌田俊一（北海道大学・特任助教）

Sylvain Barbot (NTU, Singapore, Assistant Professor)

Sung-Joon Chang (Kangwon National University, South Korea, Assistant



Professor)

Nicolas Flamant (University of Wollongong, Australia, ARC DECRA Fellow and Lecturer)

Yoshihiro Kaneko (GNS, New Zealand, Researcher)

Ban-Yuan Kuo (Academia Sinica, Taiwan, Research Fellow)

Wei Leng (USTC, China, Professor)

Eric Mittelsteadt (Univ. Idaho, Assistant Professor)

Kenny Viella (Academia Sinica, Taiwan, Postdoctoral Researcher)

Discussion Leader (決定分のみ；順不同)

Paul Tackley (ETH, Zurich, Switzerland, Planetary geodynamics)

Rhodri Davies (ANU, Australia, Geodynamics modeling)

収支概算について (単位は日本円) :

1. 収入

参加登録 : 1,500,000 (一般 : 30,000x40+学生 : 15,000x20)

文部科学省委託経理金 (ポスト京重点領域研究費) : 400,000 (旅費援助)

JAMSTEC 運営費交付金 : 300,000 (旅費援助、記念品、リフレッシュメント+雑費の一部)

計 : 2,200,000

2. 支出

旅費補助 : 200,000x2=400,000 (文部科学省委託経理金)、200,000x1 (JAMSTEC 運営費交付金)

懇親会費 : 300,000

ice breaker : 400,000

記念品 (エコバッグ、ノート、ボールペン) : 200,000

エクスカージョン (バス代 : 横浜駅-清水港往復) : 400,000

リフレッシュメント+雑費 : 300,000

計 : 2,200,000

収支差額 : 0

## 2018 年度公益社団法人日本地球惑星科学連合学術賞（三宅賞）

### 候補者募集について

公益社団法人日本地球惑星科学連合は 2018 年度公益社団法人日本地球惑星科学連合学術賞（三宅賞）の候補者を募集いたします。本賞の名称は三宅泰雄博士のご提案と寄付金で設立された公益信託地球化学研究基金が事業として実施してきた地球化学研究協会学術賞「三宅賞」に由来します。

受賞者は自薦あるいは推薦者により推薦され、会長の諮問委員会である審査委員会において推挙された方で、理事会において承認された方とします。

#### 1. 受賞者の条件

受賞者は、地球惑星科学に関わる物質科学の分野において新しい発想によって優れた研究成果を挙げ、国際的に高い評価を得ている個人

#### 2. 受賞者数

1 名

#### 3. 推薦

i. 選考対象は他薦または自薦による候補者とします。候補者は会員・非会員を問いません。他薦の場合、正会員のみが推薦者となることができます。選考対象は推薦によるものとし、自薦および正会員による他薦を認めます。ただし他薦の場合には本人に受賞の意思があることを事前に確認することが必要です。

ii. 推薦に必要な書類は以下の通りです。日本語か英語にて作成して下さい。両言語の混在は可とします。

・ 候補者の名前、連絡先（所属機関、住所、電話番号、メールアドレスなど）

・ 候補者の経歴、受賞歴

・ 全査読付き論文リストおよび主要な論文 5 編の別刷り

・ 推薦理由書（A4 で 4 ページ以内）

自薦の場合は本人が、他薦の場合は推薦者が作成して下さい。

・ 自薦の場合は 2 通のサポートレター、他薦の場合は推薦者以外の 2 名のサポートレター

自薦の場合は本人以外の 2 名が作成して下さい。自薦の場合も他薦の場合もサポートレターを作成する 2 名については会員・非会員を問いません。

・ 他薦の場合は推薦者の氏名と連絡先（住所、電話番号、メールアドレスなど）

iii. 提出はワードファイル、およびその PDF 版を当該年度の推薦期間内に公益社団法人日本地球惑星科学連合学術賞（三宅賞）事務局(\*\*@icloud.com) にメールにて送付して下さい。但し論文別刷り、およびサポートレターは PDF のみで結構です。

受領の確認メールが一週間以内に届かない場合は電話にてお問い合わせ下さい。受領の確認メールが届いていない場合、推薦が受付されない恐れがあります。

#### 4. 審査委員会

会長より委嘱された委員で構成します。委員の名簿は審査段階では非公開とし、受賞者決定後に公開する事といたします。

#### 5. スケジュール

2017年1月1日～2018年2月15日：推薦期間

2018年2月15日～3月理事会前日まで：審査期間

2018年3月理事会：審査委員長は結果を理事会へ報告、承認後すみやかに受賞者をホームページなどで発表します

2018年5月受賞者を2018年の連合大会で表彰いたします。

#### 6. 顕彰方法

表彰式にて賞状およびメダルを贈ります

賞の規則及び審査委員会規則は以下に掲示されています。

<http://www.jpгу.org/organization/files/miyakeshou.pdf>

[http://www.jpгу.org/organization/files/miyakeshou\\_shinsa.pdf](http://www.jpгу.org/organization/files/miyakeshou_shinsa.pdf)

★応募書類送付期限：2018年2月15日（木）

★応募書類送付先アドレス：顕彰担当理事 \*\*\* (a t)icloud.com

★賞に関するお問い合わせ：顕彰担当理事

電話番号 03-6914-2080（日本地球惑星科学連合事務局）

平成29年1月1日

公益社団法人日本地球惑星科学連合

顕彰担当理事

日本地球惑星科学連合学術長（三宅賞）審査委員会議事録  
審査前につき非公開

日本地球惑星科学連合学術長（三宅賞）審査委員会議事録  
審査前につき非公開

平成 29 年 11 月 28 日 (火)

日本地球惑星科学連合ダイバーシティ推進委員会で議論された  
「ハラスメント」に関する進め方について

文責：ダイバーシティ推進委員会委員長 原田尚美  
副委員長 小口千明、若狭幸、井岡聖一郎

当委員会で実施しましたメールによる議論の結果、「ハラスメント」に関して 1-1 から 1-3 に記載の進め方で活動を行っていくことを決定いたしました。ご報告するとともに、この進め方でよろしいか理事会にてご議論いただきたくお願い申し上げます。

1-1 選択肢形式のシンプルなアンケート調査（別紙参照）を実施。主に数の実態把握を目的として実施する。

1-2 1-1 のアンケート結果に基づき、JpGU ではこの問題に対して厳しく対応していく旨の宣言文の案を作成する

1-3 年度後半を目安にアンケート調査を実施し、次年度に宣言文案の作成を行う。宣言文案は理事会に計り、改訂をお願いした後、正式な宣言文とし、執行部（会長）から会員に発信してもらう。

## 2. 1 のアクション以降の課題

すぐに取り入れることは難しいが引き続き議論が必要とされた内容には以下の 2 点がある。

### 2-1 Ethics Committee

AGU では、研究不正などを含め倫理問題としてハラスメント課題を扱う組織がある。ハラスメントは、会員に望まれる倫理観や望ましい行動規範に照らして、排除されるべきものである。一方で、倫理観や行動規範については、研究や論文の不正など議論すべき課題は多岐にわたり、ダイバーシティ推進委員会の範疇を超えているとの多くの意見があった。従って、JpGU 理事会として具体的に対応していくならば、別途「倫理委員会」あるいは倫理に関するタスクフォースなどを作って、JpGU 会員としての行動規範（望ましい会員像）について理事会全体を巻き込んで議論する必要がある

のではないかと（参考例：一般社団法人日本物理学会では2007年に「会員の行動規範」が制定されている）。

## 2-2 相談窓口

まずは、所属先の相談窓口に対応してもらうことが先決であるという意見が多数であったが、学会期間中や JpGU に関連した活動中のハラスメント全般に関して、相談窓口を設けることも検討課題に挙げられた。しかし、抜き差しならない個別事情の相談には、心のケアも含めた適切な対応が不可欠であるため、専門性をもつ専属のスタッフが必要になる。これらのことを鑑みると、仮にパートタイマーであっても、相談対応には専門人材のほうが望ましく、マンパワーや予算に限りがある JpGU の現状で、どのような方法をとるのが良いのか、継続的な議論が必要である。

## ハラスメントに関する取組実施前の実態把握アンケート（事前調査）

日本地球惑星科学連合

日本地球惑星科学連合（JpGU）は、ダイバーシティ推進委員会を中心として、ジェンダー、世代、国籍の均衡をはかりながら地球惑星科学に携わる人材の多様性を高めるとともに、その個性と能力を障害なく十分発揮できる環境作りとネットワークづくりを行い、地球惑星科学の発展に資することを目的として活動しております。多様性を積極的に推進するためには、誰にとっても心身ともに健全かつ建設的に取り組める学業・職場環境の維持が重要と捉えています。それを妨げる要因のひとつである「ハラスメント」に関しては、「社会の縮小」「格差の拡大」「若手研究者の雇用問題（ポストドク問題）」といった社会情勢が人間関係にも影響を与えていると考えられる昨今の状況において、改めて最大限の注意を払うべきと考えます。

そこで、JpGUとして取り組む方策を検討するために、皆さんの日頃の研究環境の実態を把握する目的で、無記名でのアンケート調査を行うこととなりました。内容を知り得るのはアンケート集計担当者限りとなり、回答者名等の個人名や部署名が行為者や学校や職場の仲間等に伝わることはなく、アンケートの回答内容を理由に回答者自身が不利益な扱いを受けることは一切ありません。ダイバーシティ推進委員会およびJpGU理事会での検討に際しては、個人が特定できないよう集計された結果のみを用います。また、目的外には使用しません。安心して御回答いただき、忌憚のない御意見をぜひお寄せください。なお、このアンケートは厚生労働省の「職場のパワーハラスメント対策取組実施前の実態把握/取組実施後の効果把握のためのアンケート」を参考にJpGUダイバーシティ推進委員会にて改訂したものです。

この調査で用いるハラスメントの定義を最後のページに解説しました。職務上の立場が上の者から下の者に対して行われる行為だけでなく、先輩と後輩、同僚同士などの間において、地位や経験や人数など様々な優位性を背景に行われる行為を含んでいます。また、学業や業務上必要な注意や指導は含まず、学業や業務上不要又は過剰で適正でないと思われる範囲で行われたものがハラスメントになります。御回答に当たって参考にしてください。

### まず、ハラスメントの経験についてお伺いします

この調査で用いるハラスメントの定義を注2に解説しました。職務上の立場が上の者から下の者に対して行われる行為だけでなく、先輩と後輩、同僚同士などの間において、地位や経験や人数など様々な優位性を背景に行われる行為を含んでいます。また、学業や業務上必要な注意や指導は含まず、学業や業務上不要又は過剰で適正でないと思われる範囲で行われたものがハラスメントになります。御回答に当たって参考にしてください。



Q1. あなたは所属先の学校や職場、野外調査において、ハラスメントを受けたと感じたことはありますか。(〇は1つだけ)

- |                                |
|--------------------------------|
| 1. あなた自身がハラスメントを受けたことがある→Q2に進む |
| 2. ハラスメントを受けたことはない→Q6に進む       |

Q2. あなたが受けたハラスメントは以下の6つのタイプのどれに該当するかお教えてください。(〇はいくつでも)

- |   |
|---|
| 1. 暴行・傷害(身体的な攻撃)  |
| 2. 脅迫・名誉毀損・侮辱・ひどい暴言(精神的な攻撃)                               |
| 3. 隔離・仲間外し・無視・退職勧告(人間関係からの切り離し及びそれに向けた行動)                 |
| 4. 学業・業務上明らかに不要なこと、遂行不可能なことの強制、研究の妨害(過大な要求)               |
| 5. 学業・業務上の合理性なく、能力や経験とかけ離れた程度の低い仕事を命じることや仕事を与えないこと(過小な要求) |
| 6. 私的なことに過度に立ち入ること(個の侵害)                                  |
| 7. その他(具体的に )   |

Q3. Q2で回答いただいたハラスメントは具体的にどのようなものでしたか。(自由記述)

--

Q4. Q2で回答いただいたハラスメントについて、行為をした人とあなたとの関係として当てはまるものをすべてお教えてください。(〇はいくつでも。4と8には同級学生を含む。JSPSのポスドクは任期付き職員を含む)

- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| 1. 上司から部下へ        | 6. 後輩から先輩へ(学生含む)  |
| 2. 先輩から後輩へ(学生含む)  | 7. 任期付き職員から定年制職員へ |
| 3. 定年制職員から任期付き職員へ | 8. 任期付き職員の同僚同士    |
| 4. 定年制職員の同僚同士     | 9. その他(具体的に)      |
| 5. 部下から上司へ        | ( )               |

Q5. Q2で回答いただいたハラスメントを受けてどのような行動をしましたか。(〇はいくつでも)

- |                              |                                    |
|------------------------------|------------------------------------|
| 1. 学校や職場の担当部署(相談窓口を除く)に相談した  | 7. 学校や職場とは関係のない医師やカウンセラーなど専門家に相談した |
| 2. 学校や職場の相談窓口で相談した           | 8. 弁護士に相談した                        |
| 3. 学校や職場の仲間に相談した             | 9. 公的な機関(労働基準監督署や都道府県労働局など)に相談した   |
| 4. 学校や職場の上司に相談した             | 10. しばらく学校や職場を休んだ                  |
| 5. 労働組合に相談した                 | 11. その他(具体的に)                      |
| 6. 学校や職場が設置している相談窓口・産業医に相談した | ( )                                |
|                              | 12. 何もしなかった                        |

Q6. あなたは学校や職場において、あなた以外の方がハラスメントを受けているのを見たり、他の人から相談を受けたりしたことはありますか。(〇は1つだけ)

- |                                 |
|---------------------------------|
| 1. ハラスメントを見たり相談を受けたことがある→Q7に進む  |
| 2. ハラスメントを見たり相談を受けたことはない→Q10に進む |

Q7. あなたが見たり、相談を受けたハラスメントは以下の6つのタイプのどれに当てはま

るかお教えてください。(〇はいくつでも)

1. 暴行・傷害(身体的な攻撃)
2. 脅迫・名誉毀損・侮辱・ひどい暴言(精神的な攻撃)
3. 隔離・仲間外し・無視(人間関係からの切り離し)
4. 学業・業務上明らかに不要なこと、遂行不可能なことの強制、仕事の妨害(過大な要求)
5. 学業・業務上の合理性なく、能力や経験とかけ離れた程度の低い仕事を命じることや仕事を与えないこと(過小な要求)
6. 私的なことに過度に立ち入ること(個の侵害)
7. その他(具体的に )

Q8. Q7 で回答いただいた、あなたが見たり、相談を受けたハラスメントは具体的にどのようなものでしたか。(自由記述)

Q9. Q7 で回答いただいた、あなたが見たり、相談を受けたハラスメントについて、ハラスメントをした人と被害者との関係として当てはまるものをお教えてください。(〇はいくつでも。4 と 8 には同級学生を含む。JSPS のポスドクは任期付き職員を含む)

1. 上司から部下へ
2. 先輩から後輩へ(学生含む)
3. 定年制職員から任期付き職員へ
4. 定年制職員の同僚同士
5. 部下から上司へ
6. 後輩から先輩へ(学生含む)
7. 任期付き職員から定年制職員へ
8. 任期付き職員の同僚同士
9. その他(具体的に )

Q10. ハラスメント、いじめ・嫌がらせへの取組に関し、JpGU への要望があれば御記入ください。(自由記述)

以上でアンケートは終了です。ご協力いただき、まことにありがとうございました。

注 1 ハラスメントの言葉の定義(厚生労働省、国立研究開発法人のハラスメント防止ハンドブックより)

ハラスメントとは、セクシュアルハラスメント、妊娠・出産・育児休業等に関するハラスメント、パワーハラスメント、アカデミックハラスメント及びその他のハラスメントを言う。

### 1) セクシュアルハラスメント

他の学生、同僚、職員等の就業環境を不快なものとし、能力の発揮に重大な悪影響を与えるなど、本人等が学業、研究、仕事をする上で看過できない支障を生ずる言動もしくはその環境等について不利益を与えることを示唆する性的言動。

### 2) 妊娠・出産・育児休業等に関するハラスメント

下記のいずれかに該当する行為により環境を悪化させ、本人等が学業、研究、仕事をする上で看過できない支障を生ずる言動を指す。

2-1 本人等が妊娠、出産、育児、介護に関する制度等の利用請求を行うことや、制度等を利用したことにより行われる嫌がらせ等の言動で下記の 2-1-1 から 2-1-4 のいずれかに該当する言動を行うこと。

2-1-1 本人等に対し、立場（職務）上の地位、権限により優位性を有する者が退学、解雇、その他不利益な取り扱いを示唆すること。

2-1-2 本人等に対し、立場（職務）上の地位、権限により優位性を有する者が制度等の利用の請求等または制度等の利用を阻害すること。

2-1-3 本人等に対し、立場（職務）上の地位、権限により優位性を有する者以外の者が繰り返しまたは継続的に制度上の利用の請求等または制度等の利用を阻害すること。ただし、本人等が意に反することを伝えているにもかかわらず、さらに制度等の利用の請求等やまたは制度等の利用を阻害する言動が行われる場合を含み、この場合は、さらに繰り返しまたは継続的であることを要しない。

2-1-4 本人等に対し、制度等を利用したことにより、繰り返しまたは継続的に嫌がらせ等の言動を行うこと。ただし、本人等が意に反することを伝えているにもかかわらず、さらに制度等の利用の請求等または制度等の利用を阻害する言動が行われる場合を含み、この場合は、さらに繰り返しまたは継続的であることを要しない。

2-2 本人等が妊娠または出産したことにより行われる嫌がらせ等の言動で、下記の 2-2-1、2-2-2 に該当する行為を行うこと。

2-2-1 本人等に対し、立場（職務）上の地位、権限により優位性を有する者が退学、解雇、その他不利益な取り扱いを示唆すること。

2-2-2 本人等に対し、繰り返しまたは継続的に嫌がらせ等の言動を行うこと。ただし、本人等が意に反することを伝えているにもかかわらず、さらに制度等の利用の請求等または制度等の利用を阻害する言動が行われる場合を含み、この場合は、さらに繰り返しまたは継続的であることを要しない。

### 3 パワーハラスメント

立場（職務）上の地位、権限、情報等なんらかの優位性を発揮出来る力を用いて、本来の学業、研究、業務の範疇を超えて、継続的に人格及び尊厳を侵害し、環境を悪化させ、あるいは雇用の不安を与える言動を言う。ただし、行為の悪質性、結果の重大性等によっては継続的でない言動についてもハラスメントとなることがある。

### 4 アカデミックハラスメント

研究の場において継続的に行われる研究妨害、暴言、指導の放棄等の地位や権限を利用した嫌がらせ及び地位や権限にかかわらず他の者を誹謗中傷する行為等人格及び尊厳を侵害する言動を言う。ただし、行為の悪質性、結果の重大性等によっては継続的でない言動についてもハラスメントとなることがある。

### 5 その他のハラスメント

上記 1～4 に該当しない繰り返し行う精神的ないじめや嫌がらせ、差別的な言動により人格及び尊厳を侵害し、環境を悪化させ、研究、職務遂行を阻害する言動を言う。ただし、行為の悪質性、結果の重大性等によっては継続的でない言動についてもハラスメントとなることがある。

## 公益社団法人日本地球惑星科学連合 第 17 回学協会長会議議事録

開催日時 :平成 29 年 10 月 12 日(木)15 時から 17 時

開催場所 :東京大学地震研究所 2 号館 5 階 第一会議室  
東京都文京区弥生 1-1-1

出席者 :

[学協会] 齋藤 文紀(日本第四紀学会,議長), 高橋 昭久(一般社団法人 日本宇宙生物科学会), 井上 源喜(一般社団法人 日本温泉科学会), 日比谷 紀之(日本海洋学会), 井口 正人(特定非営利活動法人 日本火山学会), 宮本 潔(形の科学会), 佐竹 健治(日本活断層学会), 大谷 栄治(日本鉱物科学会), 森田 喬(日本地図学会), 北村 晃寿(日本古生物学会), 吉川 賢(日本沙漠学会), 林 歳彦(資源地質学会), 山岡 耕春(公益社団法人 日本地震学会), 古宇田 亮一(日本情報地質学会), 樋口 篤志(一般社団法人 水文・水資源学会), 島田 秋彦(生命の起原および進化学会), 浜田 康史(石油技術協会), 兒玉 裕二(公益社団法人 日本雪氷学会), 日置 幸介(日本測地学会), 谷本 浩志(日本大気化学会), 高野 修(日本堆積学会), 竹之内 耕(地学団体研究会), 川幡 穂高(日本地球化学会), 渡部 重十(地球電磁気・地球惑星圏学会), 藁谷 哲也(日本地形学連合), 渡部 芳夫(一般社団法人 日本地質学会), 由井 義通(地理科学学会), 村山 祐司(公益社団法人 日本地理学会), 海東 達也(地理教育研究会), 玉川 英則(一般社団法人 地理情報システム学会), 春山 成子(公益社団法人 東京地学協会), 西城 潔(東北地理学会), 濱本 昌一郎(土壌物理学会), 篠原 也寸志(一般社団法人 日本粘土学会), 北野 雅治(日本農業気象学会), 粟屋 善雄(一般社団法人 日本リモートセンシング学会), 中本 泰史(日本惑星科学会), 原田 尚美(地球環境史学会), 芳原 容英(日本大気電気学会),

[日本学術会議] 藤井 良一(日本学術会議地球惑星科学委員会委員長), 田近 英一(日本学術会議地球惑星科学委員会副委員長), 木村 学(日本学術会議地球惑星科学委員会幹事)

[連合] 川幡 穂高(会長), 田近 英一(副会長), 中村 正人(副会長),  
(敬称略)

議事内容 :

### 1. 前回議事録確認

前回会議議事録を確認した。

### 2. 日本地球惑星科学連合活動報告

#### (1) 2018 年大会準備状況報告(川幡会長)

会期中の日程やスケジュール、開催会場について説明があった。

本会議開催日はセッション提案受付の最終日である。本会議直前段階の速報では 220 以上のセッションがあり、見通しを超える提案が集まった旨報告があった。

#### (2) 2019 年以降の連合大会について

2019年以降の連合大会について、日程、開催場所などの報告があった。2020年はAGUとのジョイントミーティングとなる。2021年はパシフィコ横浜に隣接する横浜みなとみらいの新施設を利用するが、開催時期は例年より1週間ほど後(5月30日～6月3日)になる。

### (3)2017年度選挙に関する報告

本年は連合の代議員、セクションプレジデント、理事候補者の選挙を開催している。現在は代議員選挙の投票受付中である。多くの方に立候補・推薦をいただき、全区分で定数を超えたため投票を開催する。

### (4)2018年度三宅賞についての報告

2018年度より公益社団法人日本地球惑星科学連合学術賞(三宅賞)の表彰事業を行うことについて報告があった。

### (5)2018年度日本地球惑星科学連合フェロー候補者推薦募集について

10月より、2018年度日本地球惑星科学連合フェロー候補者の推薦を募集している旨報告があった。

### (6)理事の退任に関する報告(P13)

平成29年8月24日をもって、サイモン・ウォリス理事が退任届を提出し、理事を退任したため、理事の数は19名となったとの報告があった。

### (7)PEPS ジャーナルの出版状況報告

PEPS(Progress in Earth and Planetary Science)の編集・出版状況について川幡会長より報告があった。ジャーナルは現在、順調な編集・出版を進めている。

科学研究費補助金(国際情報発信強化)の申請について資料を提示し、「PEPSは連合と参加50学協会での共同出版」であることを確認した。さらに、提案書の内容について、特に新規性について報告した。

### (8)「アジア太平洋地域における学協会との協力関係に関するアンケート」へのご協力をお願い

グローバル戦略委員会アジア太平洋作業部会より、学協会に向けて「アジア太平洋地域における学協会との協力関係に関するアンケート」へのご協力の依頼があった。

### (9)川幡会長より、日本陸水学会から退会届が提出された旨報告があった。

連合の活動報告に対して、以下の質疑応答があった。

2020年のAGUとのジョイントミーティングの運営方法、また今後のジョイント開催の予定についての質問があり、川幡会長よりセッションやプログラムの編成については2017年とほぼ同じ方式でなされるとの報告があった。なお、費用負担などについては、特別な体制をとることなく平常通りの体制で運営ができるように計画していることが報告された、また今後の予定については決定していないがAGU側からも2017年の成功に対して前向きな反応があったため2020年大会があるとの回答があった。

横浜会場での大会運営について、定期開催の有無などについて質問があった。川幡会長より、横浜会場での開催は費用面で負担が大きい恐れもあるが、会員や参加者の意向を踏まえて検討していきたいと回答があった。

三宅賞関連の進歩賞について質問があった。川幡会長より、連合には西田賞(年齢制限は45歳以下)があるので、進歩賞は設けず三宅賞のみとする、との説明があった。

### 3. 日本学術会議の近況報告(日本学術会議地球惑星科学委員会 藤井委員長)

藤井委員長より、日本学術会議の活動報告があった。

前回の報告以降の第23期学術会議の活動報告として、重点大型計画の採択状況、提言「我が国の地球衛星観測のあり方について」の発出、公開シンポジウム「我が国の衛星地球観測計画」、学術フォーラム「放射性物質の移動・拡散の計画と予測」について報告があった。

第24期の体制と活動計画について報告があった。各分科会の立ち上げの準備をしており、地球惑星圏分科会、地球人間圏分科会、国際連携分科会、人材育成分科会、社会貢献分科会が予定されている。11月には小委員会と合わせて承認の予定である。また、マスタープラン策定、夢ロードマップの改訂およびそれに関連するユニオンセッションの予定について報告があった。

委員の選任時期についての学協会から質問があり、藤井委員長より、可能な限り小委員会設置と同時に選任できるように進めていきたいとの説明があった。

日本の長期的研究力の衰退に関する問題提起があり、この問題に対して連合、学協会、学術会議地球惑星科学委員会が連携することについて提案があった。川幡会長より、まずはタスク・フォースを連合の中に設置し、対応していくことを検討する旨回答があった。

### 4. 日本地球惑星科学連合理事会への意見とその集約について

齋藤議長より、連合の体制変更や学協会長会議幹事会設置の経緯について再確認があり、諮問機関として学協会長会議が連合理事会に対して意見を述べるができることの説明があった。その集約方法や幹事会の進め方について、学協会に意見が求められた。

学協会から、会員の意見を集約する連合の体制が万全ではないため、学協会長や連合代議員が会員の意見分布を把握できるとよいのではないかという意見があった。川幡会長より、意見集約の重要性を認識している旨回答があり、学協会長会議幹事会にも個別の事案について意見集約を依頼したい旨依頼があった。また、連合には他の学協会と比べて学生や若手会員の割合が高いので、そうした方の意見を尊重することも必要であるとの説明があった。

齋藤議長より、本会議後も各学協会でも意見集約を行っていただきたいとの依頼があった。意見や要望などのある場合は2018年2月末を目途に各学協会から連合事務局に提出することになった。

### 5. その他

日本大気化学会谷本 浩志会長より、日本大気化学会が共催するiCACGP-IGAC2018の開催準備報告があった。2018年9月、香川にて開催する。誘致の際には連合からのサポートレターを発出しており、また連合は本会の協賛団体でもある。

以上

連合会員登録における団体会員以外の学協会参加人数調査(2015.6月データ) 但し、学会連絡先及び、会長名は2017年11月現在データ

No.	Name	count	郵便番号	所在地住所	電話番号	メールアドレス	会長名
1	公益社団法人 日本天文学会	272	〒181-8588	東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内	0422-31-1359(事務局)	総務担当(代表):jimu@asi.or.jp	会長 柴田 一成
2	公益社団法人 土木学会	166	〒160-0004	東京都新宿区四谷一丁目 外濠公園内	03-3355-3441(代)、事務局総務課 03-3355-3442	office@isce.or.jp	会長 大石 久和
3	一般社団法人 日本物理学会	161	〒113-0034	東京都文京区湯島2-31-22 湯島アーバンビル5階	03-3816-6201	ips-office@jps.or.jp	会長 川村 光
4	日本高圧力学会	107	〒530-0001	大阪市北区梅田1-11-4大阪駅前第4ビル9階 923-674号 (株)ポラリス・セクレタリーズ・オフィス内)	070-5545-3188	kouatsu_office@highpressure.jp	会長 谷口 尚
5	一般社団法人 日本生態学会	86	〒603-0902	京都市北区小山西花池町1-8	075-384-0250	office@mail.esj.ne.jp	会長 可知 直毅
6	公益社団法人 地盤工学会	79	〒112-0011	東京都文京区千石4丁目38番2号	03-3946-8677	igshp@iban.or.jp	会長 村上 章
7	一般社団法人 日本建築学会	63	〒108-8414	東京都港区芝5丁目26番20号	03-3456-2051	info@ai.or.jp	会長 古谷 誠章
8	公益社団法人 日本地すべり学会	54	〒105-0004	東京都港区新橋5-26-8 新橋加藤ビル	03-3432-1878	office@landslide-soc.org	会長 落合 博貴
9	日本サンゴ礁学会	50	〒783-8505	高知県南国市岡豊町小蓮185-1 高知大学岡豊キャンパス内	088-880-2284	info@jcrs.sakura.ne.jp	会長 日高 道雄
10	一般社団法人 日本森林学会	46	〒102-0085	東京都千代田区六番町7 日林協会館内	03-3261-2766	office@forestry.jp	会長 中村 太士
11	公益社団法人 砂防学会	44	〒102-0093	東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館内	03-3222-0747	jimu@jsece.or.jp	会長 丸谷 知己
12	一般社団法人 日本土壌肥料学会	40	〒113-0033	東京都文京区本郷5丁目23番13号タムラビル10階	03-3815-2085	sfooffice@jsspn.jp	会長 犬伏 和之
13	電子情報通信学会	38	〒105-0011	東京都港区芝公園3-5-8 機械振興会館内 1F 101号室	03-3433-6691	office@ieice.org	会長 篠原 弘道
14	公益社団法人 日本地震工学会	37	〒108-0014	東京都港区芝5-26-20 建築会館 4F	03-5730-2831	office@general.jae.ee.jp	会長 福和 伸夫
15	一般社団法人 日本流体力学会	36	〒152-0011	東京都目黒区原町 1-16-5	03-3714-0427	info@nagare.or.jp	会長 田村 哲郎
16	公益社団法人 日本分析化学会	33	〒141-0031	東京都品川区西五反田1-26-2 五反田サンハイツ304	03-3490-3351	tama1026@	会長 岡田 哲男
17	一般社団法人 資源・素材学会	32	〒107-0052	東京都港区赤坂9丁目6-41	03-3402-0541	info@mmj.or.jp	会長 大和田 秀二
18	公益社団法人 日本化学会	32	〒101-8307	東京都千代田区神田駿河台1-5	03-3292-6161	info@chemistry.or.jp	会長 山本 尚
19	一般社団法人 日本原子力学会	32	〒105-0004	東京都港区新橋2-3-7 新橋第二中ビル3階	03-3508-1266	soumu@aesi.or.jp	会長 上坂 充
20	一般社団法人 日本写真測量学会	30	〒113-0001	東京都文京区白山1-33-18 白山NTビル3階	03-5840-6806	office-jsprs@isprs.jp	会長 近津 博文
21	社団法人 大気環境学会	28	〒160-0022	東京都新宿区新宿1-29-8 公衛ビル4階	03-3341-5632	isae@msf.biglobe.ne.jp	会長 大原 利真
22	日本微生物生態学会	27	〒305-8566	茨城県つくば市東 1-1-1 中央第6-10 産業技術総合研究所 生物プロセス研究部門 生物資源情報基盤研究グループ内	Web掲載なし	jsme.office@gmail.com	会長 鎌形 洋一
23	公益社団法人 応用物理学会	25	〒113-0031	東京都文京区根津1-21-5 応物会館	03-3828-7721(代表)	general-matters@isap.or.jp	会長 保立 和夫
24	海洋調査技術学会	25	〒100-0003	東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル9F 株式会社学術フォーラム内	03-6267-4550	ismst@mynavi.jp	会長 徳山 英一
25	一般社団法人 日本航空宇宙学会	25	〒103-0022	東京都中央区日本橋室町4-1-21 近三ビルディング4階	03-6262-5313	お問い合わせフォーム	会長 渡辺 紀徳
26	日本自然災害学会	24	〒611-0011	京都府宇治市五ヶ庄 京都大学防災研究所	0774-38-4278	sai@isnds.org	会長 寶 馨
27	日本エアロゾル学会	21	〒602-8048	京都市上京区下立売通小川東入ル西大路町146 中西印刷(株)学会部内	075-415-3661	jaast@nacos.com	会長 大谷 吉生
28	一般社団法人 日本機械学会	21	〒160-0016	東京都新宿区信濃町35番地 信濃町煉瓦館5階	03-5360-3500(代表)	お問い合わせフォーム	会長 大島 まり
29	日本災害情報学会	20	〒162-0825	東京都新宿区神楽坂2-12-1-205	03-3268-2400	tokio@jasdis.gr.jp	会長 田中 淳
30	公益社団法人 農業農村工学会	19	〒105-0004	東京都港区新橋5-34-4 農業土木会館3F	03-3436-3418	suido@jisidre.or.jp	会長 久保 成隆
31	一般社団法人 電気学会	17	〒102-0076	東京都千代田区五番町6-2 HOMAT HORIZONビル8階	03-3221-7312	kanri@ee.or.jp	会長 横山 明彦
32	公益社団法人 日本水環境学会	17	〒135-0006	東京都江東区常盤2-9-7 グリーンプラザ深川常盤201	03-3632-5351	お問い合わせフォーム(原稿の受付メールアドレスのみ掲載 あり→ kaikoku@jsw.ee.or.jp)	会長 小野 芳朗
33	一般社団法人 水産海洋学会	16	〒162-0801	東京都新宿区山吹町358-5	03-5389-6285	isfo-post@bunken.co.jp	会長 大関 芳沖
34	一般社団法人 人文地理学会	15	〒606-8305	京都市左京区吉田河原町14 近畿地方発明センター合同ビル内	075-751-7887	jimchi48@yahoo.co.jp	会長 石川 義孝
35	日本結晶成長学会	14	〒530-0001	大阪市北区梅田1丁目11番4号 大阪駅前第4ビル9階923-1125号 株式会社ポラリス・セクレタリーズ・オフィス内	070-5047-3339	jimukyoku@jacp.jp	会長 柿本 浩一
36	日本有機地球化学会	13	〒107-6332	東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー	03-5572-0263	office@ogeochem.jp	会長 鈴木 徳行
37	日本珪藻学会	12	〒951-8580	新潟県新潟市中央区浜浦町1-8 日本歯科大学 新潟生命歯学部 生物学教室 長田敬五 宛	Web掲載なし	treasurer@diatomology.org	会長 南雲 保
38	一般社団法人 日本結晶学会	12	〒162-0801	東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター	03-5389-6372	crsi-post@bunken.co.jp	会長 佐々木 聡
39	日本放射化学会	12	〒590-0494	大阪府泉南郡熊取町朝代西2丁目1010番地 京都大学原子炉実験所 柴田誠一研究室気付	FAX: 072-451-2632	inrs.office2013@radiochem.org	会長 中西 友子
40	公益社団法人 環境科学会	11	〒162-0801	東京都新宿区山吹町358番地5	03-5389-6291	office@ses.or.jp	会長 柳 憲一郎
41	一般社団法人 情報処理学会	11	〒101-0062	東京都千代田区神田駿河台1-5 化学会館4F	03-3518-8374	soumu@ipsj.or.jp	会長 西尾 章治郎
42	公益社団法人 日本造園学会	11	〒150-0041	東京都渋谷区神南1-20-11 造園会館0階	03-5459-0515	office@jila-zouen.org	会長 横張 真
43	歴史地震研究会	11	〒143-0027	東京都大田区中馬込2-2-12日本物理探検株式会社 内田 篤貴様方	FAX: 03-3772-3484	auchida@n-buturi.co.jp	会長 松浦 律子
44	日本応用数理学会	10	〒113-0032	東京都文京区弥生 2-4-16	03-5684-8649	office@mi.isiam.org	会長 佐古 和恵
45	日本文化財科学会	10	〒631-8502	奈良市山陵町1500 奈良大学文化財学科気付	Fax: 0742-41-9548	issccp-@daibutsu.nara-u.ac.jp	会長 長友 恒人
46	一般社団法人地域安全学会	9	〒102-0085	東京都千代田区六番町13-7 中島ビル2階 株式会社サイエンスクラフト内	03-3261-6199	iss2008@iss.info	会長 糸井川 栄一
47	日本進化学会	9	〒102-0074	東京都千代田区飯田橋3-11-15 UEDAビル6F(株)クバプロ内	03-3238-1689	shinka@kuba.jp	会長 田村 浩一郎
48	一般社団法人プラズマ核融合学会	8	〒464-0075	名古屋市中千区区内山3-1-1 桜通内山ビル4階	052-735-3185	plasma@jsof.or.jp	会長 吉田 善章
49	日本植生史学会	8	〒206-0033	東京都多摩市落合1-14-2 東京都埋蔵文化財センター	042-374-8044	hbm@hisbot.jp	会長 高原 光
50	日本藻類学会	8	〒780-8520	高知市曙町2-5-1 高知大学理学部1号館 峯 一朗 様	088-844-8309	mine@kochi-u.ac.jp(峯一朗 様)	会長 奥田 一雄
51	一般社団法人日本理科教育学会	8	〒657-8501	神戸市灘区鶴甲3-11 神戸大学大学院人間発達環境学研究科内 (準備中)		sist@sist.jp	会長 稲垣 成哲
52	一般社団法人人工知能学会	7	〒162-0821	東京都 新宿区 津久戸町 4-7 OSビル402号室	03-5261-3401	info@ai-gakkai.or.jp	会長 山田 誠二
53	一般社団法人日本考古学協会	7	〒132-0035	東京都江戸川区平井5-15-5(有)平井駅前協同ビル4階	Web掲載なし	メールアドレス掲載なし	会長 谷川 章雄

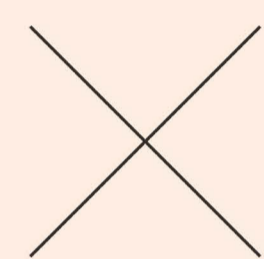
54	公益社団法人日本都市計画学会	7	〒102-0082	東京都千代田区一番町10番地 一番町ウエストビル6F	03-3261-5407	<a href="http://www-contact@cpji.or.jp">www-contact@cpji.or.jp</a>	会長	横張 真
55	応用生態工学会	6	〒102-0083	東京都千代田区麹町4-7-5 麹町ロイヤルビル405号室	03-5216-8401	<a href="mailto:eces-manager@ecesi.com">eces-manager@ecesi.com</a>	会長	江崎 保男
56	日本自然災害学会	6	〒611-0011	京都府宇治市五ヶ庄 京都大学防災研究所	0774-38-4278	<a href="http://sai@isnds.org">sai@isnds.org</a>	会長	寶 馨
57	社会地質学会	6	〒261-0005	千葉県千葉市美浜区稲毛海岸3-5-1 千葉県環境研究センター 地質環境研究室 気付	Web掲載なし	<a href="mailto:office@ismug.org">office@ismug.org</a>	会長	村尾 智
58	日本アフリカ学会	6	〒603-8148	京都市北区小山西花池町1-8 (株)土倉事務所 日本アフリカ学会係	075-451-4844	<a href="mailto:info@african-studies.com">info@african-studies.com</a>	会長	太田 至
59	日本プランクトン学会	6	〒277-8564	千葉県柏市柏の葉5-1-5 東京大学大気海洋研究所浮遊生物分野内 代表幹事 平井博也	04-7136-6172	<a href="mailto:plankton.society.japan@gmail.com">plankton.society.japan@gmail.com</a>	会長	津田 敦
60	日本ペドロジー学会	6	〒305-0051	茨城県つくば市二の宮4-4-21 佐藤印刷株式会社つくば営業所内 日本ペドロ ジー学会係	029-861-1081	<a href="mailto:pedology@sato.email.ne.jp">pedology@sato.email.ne.jp</a>	会長	櫻井 克年
61	一般社団法人日本科学教育学会	6	〒602-8048	京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社 学会部内	075-415-3661	<a href="mailto:isse@nacos.com">isse@nacos.com</a>	会長	中山 迅
62	公益社団法人日本水産学会	6	〒108-8477	東京都港区港南4丁目5番7号 東京海洋大学 内	03-3471-2165	<a href="mailto:fishsci@d1.dion.ne.jp">fishsci@d1.dion.ne.jp</a>	会長	塚本 勝巳
63	一般社団法人日本統計学会	6	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5F (公財)統計情報研究開発センター内	03-3234-7738	<a href="mailto:shom@iss.gr.jp">shom@iss.gr.jp</a>	会長	赤平 昌文
64	日本洞窟学会	6	〒805-0071	福岡県北九州市八幡東区東田2-4-1 北九州 市立自然史・歴史博物館内	Web掲載なし	<a href="mailto:info@speleology.jp">info@speleology.jp</a>	会長	染谷 孝
65	北海道地理学会	6	〒060-0810	北海道札幌市北区北10条西7丁目 北海道大 学大学院文学研究科 橋本雄一研究室内口	011-706-4019	メールアドレス掲載なし	会長	山下 克彦
66	歴史地理学会	6	〒184-8501	東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学 地理学分野内	042-329-7314	<a href="mailto:hist-geo@u-gakugei.ac.jp">hist-geo@u-gakugei.ac.jp</a>		
67	経済地理学会	5	〒180-8633	東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1	0422-37-3579	<a href="mailto:iimukyoku@economicgeography.jp">iimukyoku@economicgeography.jp</a>	会長	山本 健児
68	日本ヒートアイランド学会	5	〒305-8577	茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学 計算科学研究センター 日下博幸 気付	029-853-6481	<a href="mailto:info@heat-island.jp">info@heat-island.jp</a>	会長	平野 聡
69	日本顕微鏡学会	5	〒162-0814	東京都新宿区新小川町4-21 光風ビル401	03-6457-5156	<a href="mailto:ism-post@microscopy.or.jp">ism-post@microscopy.or.jp</a>	会長	田中 信夫
70	日本質量分析学会	5	〒162-0801	新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター	03-5389-6076	<a href="mailto:mssi-post@bunken.co.jp">mssi-post@bunken.co.jp</a>	会長	高山 光男
71	日本人類学会	5	〒602-8048	京都市上京区下立売通小川東入西大路町 146	075-415-3661	<a href="mailto:asn@nacos.com">asn@nacos.com</a>	会長	篠田 謙一
72	日本生化学会	5	〒113-0033	東京都文京区本郷5-25-16 石川ビル3階	03-3815-1913	<a href="mailto:ibs-ho@bsoc.or.jp">ibs-ho@bsoc.or.jp</a>	会長	水島 昇
73	公益社団法人日本動物学会	5	〒113-0033	東京都文京区本郷7-2-2 本郷MTビル4階	03-3814-5461	<a href="mailto:zsj-society@zoology.or.jp">zsj-society@zoology.or.jp</a>	会長	武田 洋幸
74	公益社団法人日本農芸化学会	5	〒113-0032	東京都文京区弥生2丁目4番16号 学会センター ビル2階	03-3811-8789	<a href="mailto:soumu@isbba.or.jp">soumu@isbba.or.jp</a>	会長	佐藤 隆一郎
75	一般社団法人日本風工学会	5	〒100-0003	東京都千代田区一ツ橋1-1-1 ハレスサイドビ ル 株式会社毎日学術フォーラム内北川 徹哉 (法政大学人間環境学部)さま	03-6267-4550	<a href="mailto:secretary_general@jawe.jp">secretary_general@jawe.jp</a>	会長	野村 卓史
76	日本放射光学会	5	〒530-0001	大阪市北区梅田1丁目11番4号 大阪駅前第4 ビル9階923-1121号 株式会社ボラリス・セクレタリーズ・オフィス内	070-5564-1963	<a href="mailto:issrr@issrr.jp">issrr@issrr.jp</a>	会長	小杉 信博
77	公益社団法人日本水環境学会	不明	〒135-0006	東京都江東区常盤2-9-7 グリーンプラザ深川 常盤201	03-3632-5351	メールアドレス掲載なし	会長	小野 芳朗



日本地球惑星科学連合

# 高校生のための冬休み講座 2017

# 高校生



# 地球惑星科学

## 一緒に地球惑星科学の未来をつくりませんか？



**玄田 英典**  
東京工業大学 地球生命研究所 特任准教授

### ジャイアントインパクト

隕石衝突に代表されるように、太陽系では大小様々な天体の衝突が起こっている。本講義では、その中でも、惑星が作られる際に起こった巨大天体衝突(ジャイアント・インパクト)に焦点をあて、このような極めて激しい出来事が惑星の様々な特徴を決定づけてきたことを紹介する。

#### プロフィール

2004年東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻博士課程修了。  
日本学術振興会特別研究員、東京工業大学特任助教、東京大学特任助教を経て、2013年より現職。博士(理学)。



**高橋 聡**  
東京大学 理学系研究科 地球惑星科学専攻 助教

### 地層はタイムカプセル

海や川・湖でできた地層は、過去の地球のできごとを記録した重要な研究対象である。本講義では、地層に記録された地球史上の事件の中でも最も大きな大量絶滅事件に焦点をあて、研究の過程や成果を紹介する。

#### プロフィール

2011年東北大学大学院理学研究科地学専攻博士課程修了。  
2011年より現職。博士(理学)。

2017年 **12/28** 木 13:00 ~ 16:00

東京大学本郷キャンパス 理学部4号館2階 1220教室  
参加費：無料 対象：高校生 ※中学生も参加可能 定員：180名 (事前申込制・先着順)  
お申込みはこちらをご覧ください。 <http://www.jpгу.org/public/20171228/>



■主催・問合せ先：公益社団法人日本地球惑星科学連合 事務局 Tel：03-6914-2080 Email：office@jpгу.org  
■後援：東京大学大学院理学系研究科



共催・協賛・後援等一覧

2017/11/24 15:13

申請日	承認日	種別	金銭的援助の有無	対象	会合名等	主催者	開催期間	会場
10月20日	2017/11/28 理事会で承認予定	共催	有り	連合	リソフフェア・マントルのダイナミクスに関する第2回アジア・太平洋域ワークショップ (英文公式名がある場合: The 2nd Asia-Pacific Workshop on Lithosphere and Mantle Dynamics)	国立研究開発法人海洋研究開発機構ならびにAGMT2018実行委員会	2018年8月6日(月)～2018年8月9日(木)	場所:国立研究開発法人海洋研究開発機構 横浜研究所 所在地:〒236-0001神奈川県横浜市金沢区昭和町3173-25
11月1日	11月8日	協賛	無し	連合	2017年度量子ビーム・サイエンスフェスタ	J-PARCセンター、高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所、総合科学研究所機構(CROSS)、PF-エーリアンション、J-PARC MLF利用者懇談会	2018年3月2日(金)～2018年3月4日(日)	場所:茨城県立県民文化センター 所在地:〒310-0851茨城県水戸市千波町東久保697番地

2017年度選挙スケジュール(案)

	月日	曜	進行
	7/21	(金)	理事会(選挙委員会立ち上げ)
代議員 選挙	7/31	(月)	定数確定
	8/1	(火)	選挙公示
	8/10~9/11		候補者受付期間
	9/13~9/20		第1回選挙管理委員会 : 候補者確定
	9/22	(金)	候補者リスト公開
	10/2~11/1		投票期間
	11/2	(木)	第2回選挙管理委員会 : 開票、当選者確定
	11/6	(月)	開票結果公開
	セクション プレジデント 選挙	11/6	(月)
11/7~16			候補者受付期間
11/17		(金)	第3回選挙管理委員会(メール会議)
11/20		(月)	当選者リスト公開(各セクション候補者1名ずつのため)
理事候補者 選挙	12/13	(水)	選挙公示
	12/21~2018/1/11		候補者受付期間
	1/12~15	(金)	選挙管理委員会 : 候補者確定
	1/16	(火)	候補者リスト公開
	1/31~2/15		理事候補者選挙投票期間
	2/16~2/22		選挙管理委員会 : 開票
	2/23~3/2		役員候補者推薦委員会 : 候補者リスト確定

# 役員候補者推薦委員会規則

(目的)

**第1条** この規則は、本法人の法人運営基本規程に基づき役員候補者推薦委員会の設置及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(設置及び任務)

**第2条** この法人の理事及び監事（以下「役員」という。）の選任を円滑に行うため、役員候補者推薦委員会（以下「推薦委員会」という。）を設置する。

2 推薦委員会は、役員候補者を選出し、社員総会に提出することを任務とする。

(構成)

**第3条** 推薦委員会は、会長、学協会長会議の代表者（学協会長会議議長）、役員任期開始時において各セクションの代表者（セクションプレジデント）である者の7名で構成する。

2 推薦委員会の委員長には、会長が就任する。

(招集及び決議)

**第4条** 委員長は、役員を選任を行う社員総会の開催に先立ち委員会を招集する。

2 推薦委員会の決議は、全委員が出席し、その過半数の賛成を持って行う。

(理事候補者の選出)

**第5条** 推薦委員会は、理事会の決議により別に定める規則に基づき実施する理事候補者選挙の結果を踏まえて、研究分野や所属機関等のバランス等について審議し、理事候補者を選出する。

(監事候補者の選出)

**第6条** 推薦委員会は、学識経験、組織運営経験、法律の専門知識、会計の専門知識等の観点から審議し、監事候補者を選出する。

(情報提供)

**第7条** 前2条の審議にあたり、理事会は議長の要請に応じて理事及び監事候補者に関する情報を提供しなければならない。

(推薦候補者名簿及び議事録)

**第8条** 推薦委員会は、議事終了後速やかに役員候補者名簿、理事候補者選挙の結果及び議事録を作成し、社員総会に提出しなければならない。

(任期)

**第9条** 推薦委員会の委員の任期は、就任後始めて開催される社員総会の終結の時までとする。

2 推薦委員会の委員は、辞任又は任期満了後においても、第3条第1項に定める定員に足りなくなるときは、新たに選任された者が就任するまでは、その職務を行わなければならない。

(報酬)

**第10条** 推薦委員会の委員は、無報酬とする。

2 推薦委員会の委員には、その職務を行うために要する費用を支払うことができる。

附則

平成23年12月22日 一部改正（平成24年5月23日追認）

平成27年5月7日 一部改正

役員候補者推薦委員会  
2017 年度選挙 (2018 年)

会長	川幡 穂高	(東京大学)
学協会長会議議長	齋藤 文紀	(島根大学)
セクションプレジデント		
宇宙惑星科学	高橋 幸弘	(北海道大学)
大気水圏科学	蒲生 俊敬	(東京大学)
地球人間圏科学	奥村 晃史	(広島大学)
固体地球科学	大谷 栄治	(東北大学)
地球生命科学	遠藤 一佳	(東京大学)

# セクションプレジデント選挙実施細則

2013年12月19日制定

(趣旨)

**第1条** この細則は、公益社団法人日本地球惑星科学連合セクションプレジデント選挙規則に基づき、セクションプレジデント選挙の実施に関する事項を定めるものとする。

(立候補届出書)

**第2条** 立候補届出書には次の事項を記載する。

- (1) 立候補するセクション名
- (2) 候補者の氏名
- (3) 候補者の連合 I D
- (4) 候補者の所属機関
- (5) 候補者の所属機関住所
- (6) 候補者の連絡先
- (7) 候補者の生年月日
- (8) 候補者の抱負

(推薦届出書)

**第3条** 推薦届出書には次の事項を記載する。

- (1) 候補者が立候補するセクション名
- (2) 候補者の氏名
- (3) 候補者の連合 I D
- (4) 候補者の所属機関
- (5) 候補者の所属機関住所
- (6) 候補者の連絡先(電話番号、メールアドレス)
- (7) 推薦者(正会員1名以上)の氏名
- (8) 推薦者(1名以上の場合は筆頭推薦者)の連合 I D
- (9) 推薦者(1名以上の場合は筆頭推薦者)の連絡先
- (10) 推薦文

(推薦承諾書)

**第4条** 推薦承諾書には次の事項を記載する。

- (1) 候補者が立候補するセクション名
- (2) 候補者の氏名
- (3) 候補者の連合 I D
- (4) 候補者が推薦を承諾した旨の明示
- (5) 候補者の所属機関

- (6) 候補者の所属機関住所
- (7) 候補者の連絡先（電話番号、メールアドレス）
- (8) 候補者の生年月日
- (9) 推薦者（正会員1名以上）の氏名

（候補者名簿）

**第5条** 選挙管理委員会は、投票期間初日の前日から起算して7日前までに、候補者名簿を作成し、本連合ホームページに掲載する。

2 候補者名簿には次の事項を記載する。

- (1) 立候補するセクション名
- (2) 候補者の氏名
- (3) 候補者の所属機関
- (4) 立候補者の所信（推薦の場合にあつては筆頭推薦者名を添えた推薦文）

（投票無効）

**第6条** 次に掲げる投票は、無効とする。

- (1) 所定の投票方法によらないもの
- (2) 候補者でない者の氏名を記載したもの
- (3) 所定の人数以上の候補者の氏名を記載したもの
- (4) 職業、身分、住所又は敬称以外の事項を記載したもの
- (5) 被投票者を確認できないもの

（当選者の決定）

**第7条** 得票の多い者を当選者とし、得票が同数の場合は、年齢の若い者を当選者と定める。

- 2 当選者が当選の日から任期開始後60日までの間に、死亡、退会若しくは正当の事由により辞退又は辞任したときは、次点の者を繰上げ当選者とする。
- 3 前項の期間を越える場合、あるいは次点の者がいない場合には補欠選挙を行ない、任期は前任者の残存任期と同一とする。
- 4 セクションプレジデント候補者の数とその定員を超えないときは、投票を行わず、候補者受付期間経過と同時に、その候補者を当選者とする。
- 5 各セクション区分において候補者が定員に満たないときは、正規のプレジデント選挙終了後直ちに当該のセクションプレジデントの補欠選挙を行う。

# 公益社団法人日本地球惑星科学連合フェロー審査委員会規則

2013年10月11日 理事会制定

(趣旨)

第1条 この細則は、公益社団法人日本地球惑星科学連合フェロー制度規則に基づき、フェロー審査委員会に関し必要な事項を定めるものとする。

(任務)

第2条 フェロー審査委員会は、理事会の要請に基づき、フェロー被推薦者の中からフェローを選考する。

(委員会の組織)

第3条 委員は役員及びセクションプレジデントを除く正会員の中から理事会の議を経て会長が委嘱する5名の委員により構成する。

2. 委員長は、理事会の議を経て会長が指名する。

(委員会の運営)

第4条 委員長は、必要があると認めるときは委員会を招集し、その議長となる。

2. 委員会の決議は、委員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。可否同数のときは議長の採決するところによる。

3. 前項の場合において、議長は委員として評決に加わることはできない。

(委員の任期)

第5条 委員の任期は2年とし、1年毎に半数を改選する。

(委員名の公表)

第6条 委員名は、当該年度の全委員が改選された時点でこれを公表する。

(委員の制約)

第7条 委員は、被推薦者および推薦者になることはできない。

(秘守守秘義務)

第8条 委員は、被推薦者および推薦者に関する情報を委員会の外に出してはならない。

附則

(1) この規則は、2013年10月11日から施行する。

(2) 第5条の定めにかかわらず、本規則で最初に専任される委員のうち2名は3年の任期とする。

2014年8月23日 理事会改正



# 地球惑星科学振興西田賞審査委員会設置規則

2014年4月28日 理事会制定

(趣旨)

第1条 この細則は、地球惑星科学振興西田賞規則に基づき、地球惑星科学振興西田賞審査委員会（以下、「審査委員会」と言う。）に関し必要な事項を定めるものとする。

(任務)

第2条 審査委員会は、理事会の要請に基づき、地球惑星科学振興西田賞被推薦者の中から受賞者を選考する。

(委員会の組織)

第3条 委員は、各セクションから当該分野の現状に通じた経験豊かな正会員を一名以上複数名選出するものとする。委員会全体で15名程度とし、その構成比率はセクションの規模を考慮して決める。

2. 委員は理事会の議を経て会長が委嘱する。

3. 委員長は互選とし、理事会の議を経て会長が指名する。

(委員会の運営)

第4条 委員長は、必要があると認めるときは委員会を招集し、その議長となる。

2. 委員会の決議は、委員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。可否同数のときは議長の採決するところによる。

3. 前項の場合において、議長は委員として評決に加わることはできない。

(委員の任期)

第5条 委員の任期は審査年度の10月から3月までとし、再任は最初の審査開始から最大4年までとする。

(委員名の公表)

第6条 委員名は、受賞者が決定した時点でこれを公表する。

(委員の制約)

第7条 被推薦者および推薦者は委員になることはできない。

(秘守守秘義務)

第8条 委員は、被推薦者および推薦者に関する情報を委員会の外に出してはならない。

附則

(1) この規則は、2014年4月28日から施行する。

# 公益社団法人日本地球惑星科学連合学術賞（三宅賞） 審査委員会設置規則

2017年9月29日 理事会制定

## （趣旨）

第1条 この細則は、公益社団法人日本地球惑星科学連合学術賞（三宅賞）規則に基づき、公益社団法人日本地球惑星科学連合学術賞（三宅賞）規則審査委員会（以下、「審査委員会」と言う。）に関し必要な事項を定めるものとする。

## （任務）

第2条 審査委員会は、理事会の要請に基づき、公益社団法人日本地球惑星科学連合学術賞（三宅賞）被推薦者の中から受賞者を選考する。

## （委員会の組織）

第3条 委員は、委員会全体で10名以下とする。  
2. 委員は理事会の議を経て会長が委嘱する。  
3. 委員長は互選とし、理事会の議を経て会長が指名する。

## （委員会の運営）

第4条 委員長は、必要があると認めるときは委員会を招集し、その議長となる。  
（ア）委員会の決議は、委員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。可否同数のときは議長の採決するところによる。  
（イ）前項の場合において、議長は委員として評決に加わることはできない。

## （委員の任期）

第5条 委員の任期は審査年度を含む2年間とし、再任は最初の審査開始から最大4年までとする。

## （委員名の公表）

第6条 委員名は、受賞者が決定した時点でこれを公表する。

## （委員の制約）

第7条 委員は推薦者になることはできない。

## （~~秘~~守秘義務）

第8条 委員は、被推薦者および推薦者に関する情報を委員会の外に出してはならない。

## 附則

この規則は、2017年10月1日から施行する。

## H29/11/28 理事会資料(ジャーナル関連)

### 1. インパクトファクター、SCOPUS 取得決定

2106 年夏に申請した Crivate Analytics(旧トムソン・ロイター)の WOS\*/SCIE と Elsevier の Scopus への登録受理の内示があり、ジャーナルの評価指標である IF は 2018 年に最初の値が付与、CiteScore も 2018 年に仮数値が付与される予定。

WOS\*:PEPS は 2015 年 11 月より Web of Science Core collection の IF が付与されない ESCI(Emerging Sources Citation Index)に収録されていたが、今回 IF が付与される SCIE(Science Citation Index Expanded)への収録が受理された。

### 2. PEPS 論文投稿・出版状況(2017/11/20 現在)(資料 J\_1)

#### ・論文投稿数(Total:307)

～2014 年: 71 (Editorial-3,Correction-1, Review-21,Research-45,Methodology-1)

2015 年: 75 (Review-21,Research-50、Methodology-3, Editorial-1)

2016 年: 61 (Review-6, Research-50, Methodology/Preface/Datapaper-4)

2017 年: 100 (Review-10, Research-85 Methodology/Preface/Datapaper-5)

#### ・出版論文数(Total:146 Review 論文 25.7%)

～2014 年: 29 (editorial-3, Correction-1, Review-7, Research -18)

2015 年: 46 (Review-15, Research-31)

2016 年: 38 (Review-10, Research-22, Methodology-1, Preface-3,Editorial-1,correction-1)

2017 年: 33 (Review-4, Research-28, Methodology-1)

#### ・査読中 : 63 (Review-6, Research-55, Methodology/Datapaper-2)

#### ・出版校正中: 6 (Review-1, Research-5)

#### ・reject/withdrawn 済: 91 (30.2%)

### 3. H29 年度第 4 回編集長会議報告 (2017/11/15) :

査読者が 1 名しか見つからない場合の対応について確認した。原則 2 名とし、状況によって編集長判断により、編集者が査読者を兼ねるケースを認める。Springer の制作部門のミスで図を取り違えて論文が出版されたが、出版論理委員会(COPE)のルールに従い Erratum を発行し、修正した正しい論文を update する Springer の対応を確認した。前回の全体編集委員会の合意に基づき、編集委員に活動報告を実施する。また、創刊 4 年を前に年明けに Editorial を出版する。

### 4. H30 年度科研費申請提出報告(最終版計画調書)

ジャーナル関係新規委員候補：

○編集委員候補

担当分野：地球人間圏科学

齋藤 文紀 教授（島根大学 研究・学術情報機構エスチュアリー研究センター所長）

外国人：選考中

○ジャーナル企画経営委員（タスクフォース：地震学会論文賞選考委員）

地震学会論文賞対象ジャーナルに PEPS が含まれており、PEPS 論文の品質の高さを PR する広報活動の一環として、推薦論文の選考を行う。

選考委員候補：

吉岡 祥一 教授（神戸大学都市安全センター）、

加藤 照之 教授（東京大学地震研究所）、

川勝 均 教授（東京大学地震研究所）、

三ヶ田 均 教授（京都大学大学院工学研究科）、

八木 勇治 教授（筑波大学生命環境系）、

Toshiro Tanimoto 教授（University of California, Santa Barbara）

PEPS編集委員(2017/11/28) 70名:日本人編集委員 40名、外国人編集委員 30名(\*新委員 外国人編集委員については打診中)

General	Chief Editor	Affiliation	Section	Science Society
	井龍 康文	東北大学大学院理学研究科地学専攻	5. Biogeoscience	地球生命科学

Section	Chief Editors	Affiliation	Section	Science Society
	川種 穂高	東京大学大気海洋研究所	5. Biogeoscience	日本地球化学会
	吉岡 祥一	神戸大学 都市安全研究センター	4. Solid earth sciences	日本地震学会
	佐藤 正樹	東京大学大気海洋研究所	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	大気水圏科学
	多田 隆治	東京大学大学院理学系研究科	6. Interdisciplinary sciences	大気水圏科学
	松本 淳	首都大学東京大学院都市環境科学研究科	3. Human geosciences	地球人間圏科学
	倉本 圭	北海道大学大学院理学院宇宙理学専攻	1. Space and planetary sciences	宇宙惑星科学

Editors	Name	Affiliation	Section	Science Society
	Lin-Ni Hau	Institute of Space Science, Department of Physics, National Central University, Taiwan	1. Space and planetary sciences	Space and Planetary Sciences
	Noriko Kita	Department of Geoscience, University of Wisconsin-Madison, USA	1. Space and planetary sciences	Space and Planetary Sciences
	Patrick Michel	Observatoire de la Cote D'Azur, France	1. Space and planetary sciences	Space and Planetary Sciences
	大竹 真紀子	宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部	1. Space and planetary sciences	日本惑星科学会
	長妻 努	情報通信研究機構	1. Space and planetary sciences	地球電磁気・地球惑星圏学会
	山本 衛	京都大学 生存圏研究所	1. Space and planetary sciences	地球電磁気・地球惑星圏学会
	Chung-Hsiung Sui	Department of Atmospheric Sciences, National Taiwan University	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	Atmospheric and Hydrospheric Sciences
	John P. Burrows	Institute of Environmental Physics and Remote Sensing IUP/IFE, University of Bremen, Germany	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	Atmospheric and Hydrospheric Sciences
	Kevin Hamilton	Department of Meteorology and International Pacific Research Center, University of Hawaii, USA	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	Atmospheric and Hydrospheric Sciences
	Mark Green	Center for the Environment, Plymouth State University, USA	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	Atmospheric and Hydrospheric Sciences
	池原 研	産業技術総合研究所地質情報研究部門	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	日本第四紀学会
	井上 源喜	大妻女子大学社会情報学部	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	日本温泉科学会
	大手 信人	京都大学大学院情報学研究科社会情報学専攻	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	水文・水資源学会
	金谷 有剛	海洋研究開発機構地球環境変動領域	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	大気化学研究会
	兒玉 裕二	国立極地研究所	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	日本雪氷学会
	竹内 真司	日本大学文理学部地球科学科	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	
	早坂 忠裕	東北大学大気海洋変動観測研究センター	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	大気水圏科学
	日比谷 紀之	東京大学大学院理学系研究科	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	日本海洋学会
	三浦 裕亮	東京大学大学院理学系研究科	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	大気水圏科学
	芳村 圭	東京大学生産技術研究所	2. Atmospheric and hydrospheric sciences	日本水文水資源学会
	Eduardo de Mulder	Earth Science Matters Foundation	3. Human geosciences	Human Geosciences
	Junko Habu	Anthropology Department, University of California, Berkeley, USA	3. Human geosciences	Cross-section
	Mike Meadows	Department of Environmental & Geographical Science, South Lane, University of Cape Town, South Africa	3. Human geosciences	Human Geosciences
	Nigel Tapper	School of Geography and Environmental Sciences, Monash University, Australia	3. Human geosciences	Human Geosciences
	R.B.Singh	Department of Geography, University of Delhi, India	3. Human geosciences	Human Geosciences
	Yuei-An Liou	Center for Space and Remote Sensing Research, National Central University, Taiwan	3. Human geosciences	Human Geosciences
	菊地 俊夫	首都大学東京都市環境科学研究科	3. Human geosciences	東京地学協会
	* 齋藤 文紀	鳥根大学 研究・学術情報機構エスチュアリー研究センター	3. Human geosciences	
	* 外国人委員打診中		3. Human geosciences	
	千木良 雅弘	京都大学防災研究所	3. Human geosciences	地球人間圏科学
	早川 裕弐	東京大学 空間情報科学研究センター	3. Human geosciences	
	村山 祐司	筑波大学大学院生命環境科学研究科	3. Human geosciences	地理情報システム学会

	Bjorn Mysen	Geophysical Laboratory, Carnegie Institute of Washington, USA	4. Solid earth sciences	Solid Earth Sciences
	Chen Ji	Department of Earth Science, University of California, Santa Barbara, USA	4. Solid earth sciences	Solid Earth Sciences
	Colin J.N. Wilson	School of Geography, Environment and Earth Sciences, Victoria University, Australia	4. Solid earth sciences	Solid Earth Sciences
	Craig R. Bina	Dept. of Earth and Planetary Sciences, Weinberg College of Arts and Sciences, Northwestern University, USA	4. Solid earth sciences	Solid Earth Sciences
	Fenglinlin Niu	Department of Earth Science, Rice University	4. Solid earth sciences	Solid Earth Sciences
	Frances Cooper	School of Earth Sciences, University of Bristol, United Kingdom	4. Solid earth sciences	Solid Earth Sciences
	J. Casey Moore	University of California, Santa Cruz, USA	4. Solid earth sciences	Solid Earth Sciences
	James B. Gill	Environmental Studies Department, University of California Santa Cruz, USA	4. Solid earth sciences	Solid Earth Sciences
	Mike Coffin	University of Tasmania, Australia	4. Solid earth sciences	
	Paul Tackley	Department of Earth Sciences, ETH Zurich Institute fuer Geophysik, Switzerland	4. Solid earth sciences	Solid Earth Sciences
	Peter Van Keken	Department of Terrestrial Magnetism Carnegie Institution of Washington, USA	4. Solid earth sciences	Solid Earth Sciences
	Shun-ichiro Karato	Department of Geology & Geophysics, Yale University, USA	4. Solid earth sciences	Solid Earth Sciences
	Toshiro Tanimoto	Department of Earth Science, University of California, Santa Barbara, USA	4. Solid earth sciences	Solid Earth Sciences
	大谷 栄治	東北大学大学院理学研究科地球学専攻	4. Solid earth sciences	日本鉱物科学会
	加藤 照之	東京大学地震研究所	4. Solid earth sciences	日本測地学会
	川勝 均	東京大学地震研究所	4. Solid earth sciences	日本地震学会
	サイモン・ウォリス	名古屋大学大学院環境学研究科	4. Solid earth sciences	日本地質学会
	渋谷 和雄	国立極地研究所	4. Solid earth sciences	日本測地学会
	清水 久芳	東京大学地震研究所	4. Solid earth sciences	地球電磁気・地球惑星圏学会
	中田 節也	東京大学地震研究所	4. Solid earth sciences	日本火山学会
	平島 崇男	京都大学大学院理学研究科	4. Solid earth sciences	日本鉱物科学会
	三ヶ田 均	京都大学	4. Solid earth sciences	物理探査学会
	宮内 崇裕	千葉大学大学院理学研究科	4. Solid earth sciences	日本活断層学会
	八木 勇治	筑波大学生命環境系	4. Solid earth sciences	日本地震学会
	渡辺 寧	秋田大学 国際資源学部	4. Solid earth sciences	資源地質学会
	Heiko Paliike	Centre for Marine Environmental Sciences, Bremen University, Germany	5. Biogeoscience	Cross-section
	Joseph Kirschvink	California Technology University, USA	5. Biogeoscience	Biogeosciences
	Mark Lever	Department of Environmental Systems Science, Institute of Biogeochemistry and Pollutant Dynamics, ETH Zürich	5. Biogeoscience	
	遠藤 一佳	東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻	5. Biogeoscience	日本古生物学会
	掛川 武	東北大学大学院理学研究科地球学専攻	5. Biogeoscience	
	小林 憲正	横浜国立大学大学院工学研究院	5. Biogeoscience	日本宇宙生物科学会
	高野 淑識	海洋研究開発機構	5. Biogeoscience	

資料J1 Progress in Earth and Planetary Science 出版・投稿状況

(2017/11/20)

	2014			2015			2016			2017			Total		
	Review	Research	Methodology /Data	Review	Research	Methodology /Data	Review	Research	Methodology /Data	Review	Research	Methodology /Data	Review	Research	Methodology /Data
1. Space and planetary sciences	2	1	0	3	5	0	11	2	1	0	3	4	11	10	0
2. Atmospheric and hydrologic	2	5	0	7	10.9%	0.0%	23.9%	5.6%	2.8%	0.0%	8.3%	12.1%	3.0%	9.1%	0.0%
3. Human geosciences	0	2	0	2	6.5%	0.0%	10.9%	5.6%	8.3%	0.0%	13.9%	27.3%	5.0%	13.6%	0.0%
4. Solid earth sciences	2	9	0	11	4.3%	0.0%	4.3%	0.0%	2.8%	0.0%	2.8%	18.2%	0.0%	7.1%	0.7%
5. Biogeosciences	1	0	0	1	34.8%	0.0%	43.5%	8.3%	36.1%	8.3%	52.8%	27.3%	7.9%	32.1%	2.1%
6. Interdisciplinary research	0	1	0	1	2.2%	0.0%	8.7%	0.0%	8.3%	0.0%	8.3%	12.1%	1.4%	7.1%	0.0%
<b>Subtotal</b>	<b>7</b>	<b>18</b>	<b>0</b>	<b>25</b>	<b>31</b>	<b>0</b>	<b>46</b>	<b>10</b>	<b>22</b>	<b>4</b>	<b>36</b>	<b>33</b>	<b>36</b>	<b>99</b>	<b>5</b>
<b>Total</b>	<b>28.0%</b>	<b>72.0%</b>	<b>0.0%</b>	<b>100%</b>	<b>67.4%</b>	<b>0.0%</b>	<b>100%</b>	<b>27.8%</b>	<b>61.1%</b>	<b>11.1%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>12.1%</b>	<b>84.8%</b>	<b>3.0%</b>
Editorial/Correction	-	-	-	3	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-
<b>Total</b>				<b>29</b>			<b>46</b>					<b>33</b>			

(2017/11/20)

	2014			2015			2016			2017			Total		
	Review	Research	Methodology /Data	Review	Research	Methodology /Data	Review	Research	Methodology /Data	Review	Research	Methodology /Data	Review	Research	Methodology /Data
1. Space and planetary sciences	8	9	0	17	3	8	1	12	0	6	0	25	19	40	1
2. Atmospheric and hydrologic	5	7	0	12	4.1%	1.4%	16.2%	1.7%	8.3%	0.0%	10.0%	25.0%	6.3%	13.3%	0.3%
3. Human geosciences	1	4	0	5	4.1%	0.0%	14.9%	1.7%	15.0%	0.0%	16.7%	28.0%	3.3%	16.6%	0.3%
4. Solid earth sciences	3	17	1	21	0.0%	0.0%	5.4%	0.0%	11.7%	0.0%	11.7%	8.0%	0.3%	7.6%	0.0%
5. Biogeosciences	2	3	0	5	13.5%	2.7%	47.3%	5.0%	33.3%	3.3%	41.7%	19.0%	5.6%	25.2%	2.3%
6. Interdisciplinary research	2	5	0	7	0.0%	0.0%	4.1%	0.0%	8.3%	0.0%	8.3%	8.0%	0.7%	6.0%	0.3%
<b>Subtotal</b>	<b>21</b>	<b>45</b>	<b>1</b>	<b>67</b>	<b>21</b>	<b>50</b>	<b>3</b>	<b>74</b>	<b>6</b>	<b>50</b>	<b>4</b>	<b>60</b>	<b>10</b>	<b>85</b>	<b>5</b>
<b>Total</b>	<b>31.3%</b>	<b>67.2%</b>	<b>1.5%</b>	<b>100%</b>	<b>28.4%</b>	<b>67.6%</b>	<b>4.1%</b>	<b>100%</b>	<b>10.0%</b>	<b>83.3%</b>	<b>6.7%</b>	<b>100%</b>	<b>10.0%</b>	<b>85.0%</b>	<b>5.0%</b>
Editorial/Correction	-	-	-	3	-	-	1	-	-	-	-	0	-	-	-
<b>Total</b>				<b>71</b>			<b>75</b>					<b>61</b>			

注: 2016年の総投稿数には、投稿システム内で投稿番号が付与されないErratum原稿1件も含むため、実際の投稿受付番号60よりも1件多い。

(2017/11/20)

	2014			2015			2016			2017			Total		
	Review	Research	Methodology /Data	Review	Research	Methodology /Data	Review	Research	Methodology /Data	Review	Research	Methodology /Data	Review	Research	Methodology /Data
Published	37	98	5	140	6	146									
Accepted including Provisionally-accepted	1	5	0	6	0	6									
Under review	6	56	2	64	0	64									
Rejected/Withdrawn	12	72	7	91	0	91									
<b>Total</b>	<b>56</b>	<b>231</b>	<b>14</b>	<b>301</b>	<b>6</b>	<b>307</b>									
	18.6%	76.7%	4.7%	100.0%	-	-									

■編集状況

## Google ScholarおよびWoS Core Collection調査に基づく、PEPS論文被引用状況

	論文数	2017/1/1～2017/12/31の被引用回数				
		Google Scholar調査			WoS Core Collection調査	
		ジャーナルから (うちWoS採録誌から)	書籍、学会発表、 学位論文等から	合計		
2015/1/1～2015/12/31に出版された論文 (Editorial/Preface 2編を含む)	46	111 (98)	12	123	92	
2016/1/1～2016/12/31に出版された論文 (Erratum/Preface 5編を含む)	38	67 (59)	5	72	42	
合計 (Editorial/Erratum/Preface 7編を含む)	84	178 (157)	17	195	134	
2017/12/31の予想被引用率		2.543	2.243	0.243	2.786	1.914
		2.774	2.447	0.265	3.039	2.088

(2017/11/13現在) (2017/11/09現在)

(Editorial/Erratum/Preface 7  
編を含む場合)  
(Editorial/Erratum/Preface 7  
編を除く場合)

\*被引用率：2015年および2016年に出版された論文が2017年に引用された回数を、2015年と2016年に出版された論文合計数で割った値



# 1 国際情報発信強化の取組の概要

本欄には、取組内容の特徴と目的、意義及び方法について、今回の取組における新たな点を、これまで行ってきた取組を踏まえつつ具体的に記述してください。図表を用いる等して記述しても構いません。前年度以前に採択された実績がある場合には、当該補助事業においてどのような取組をしたか及び今回の取組との相違点について併せて具体的かつ明確に記述してください。

公益社団法人日本地球惑星科学連合(JpGU)は、地学系 50 学協会と合同で例年 5 月に学術大会を開催し、2017 年の全参加人数は 8,450 名、科学発表は 5,645、学生参加者が 33%を占め若手の成長促進も含めて健全に発展してきた。27 周年の今年の大会は会員 ID 数が1万人を超え、本分野では AGU(米国地球物理連合)、EGU(ヨーロッパ地球科学連合)に次ぐ規模となっている。

JpGU は 50 学協会と共同で、Springer-Nature 社を出版者として、オープン・アクセス(OA)英文電子ジャーナル「Progress in Earth and Planetary Science(PEPS)」を 2014 年 4 月に創刊し、2017 年 9 月までに 130 論文を出版、世界の一極雑誌を目指して活動してきた。ルンド大学の権威ある OA 文献 DB の Directory of Open Access Journals, JST 文献 DB に既に登録された。また、Thomson Reuter 社(現 Clarivate Analytics 社)の Emerging Source Citation Index に 2015 年登録され、次段階のインパクトファクター(IF)が付与される Web of Science (WOS) に 2016 年 8 月採録申請した。同年 11 月に米国本社を訪問して直接アピールしたが、WOS 部門買収の影響で審査が遅れ、現在結果待ちの状況である。同時に Elsevier 社の SCOPUS への登録申請も行い、登録が受理された。

JpGU は AGU, EGU と MOU 協定を結び、協力関係を発展させてきたが、JpGU が世界の科学情報発信の重要なプレーヤーを務めるには、「PEPS」を一流のジャーナルとして確立することが必須である。JpGU の活動の一環として、EGU, AGU 年会時などに広報・投稿促進活動を実施し「PEPS」を世界に紹介してきた。国際情報発信の強化のために、AGU とは毎年共同セッションを開催し、2017 年には JpGU-AGU 共同大会の開催により 1,000 人以上の海外からの研究発表があり、「PEPS」の認知度向上に効果があった。出版事業は、JpGU 理事会の活動とも密接にリンクし、ジャーナル経営企画委員会と編集委員会により公正に運営されている。

「PEPS」は、地球惑星科学における世界の一極を担える OA 電子英文ジャーナルで、質の高い原稿の投稿を促進するため、①連合大会に参加する海外からの基調講演者、著名講演者の招聘支援を行うジャーナル国際特別セッション、②連合大会コンビ

		IF	経営	出版	年会とのリンク	共同発行
2022年度 H34年度	2023年	IF目標 >3.5	APCの改定による 経営基盤 拡充	新規「Paper with Full Data Attached」の出版 レビュー論文の推進(20-30%)、残りは一般論文 新規「VIRTUAL教科書の制作」	年間 150編出版 著者50ヶ国	*レター重視の EPSとの共同出版 に向けた行動
2021年度 H33年度	2022年		継続的な Royalty収入		*海外学会とのシン ポジウム共同開催	
2020年度 H32年度	2021年	IF取得 2.7-3.0	新APCによる 出版		*JpGU-AGU, EGU 共同セッション	*EPSとの共同出 版開始 ★新体制Start
2019年度 H31年度	2020年	SCOPUS 採択	出版契約更新		アクセス数 増加	*プロジェクト等 の活動をEPS論文 +PEPS論文のリン クにより共同で 成果発表
2018年度 H30年度	2019年	WOS 採択 ★新規	現行APCによる 出版		総編集長の一人は 海外の研究者による Advisoryボードの拡充	
	2018年			海外からの編 集委員の増強	*JpGU-AGU, EGU 共同セッション	*EPSと海外年 会ブースで共同 広報活動
				PDFダウン ロード増加	*第2回 JpGU-AGU共同開催	
					年間 100編出版	
					*ジャーナル・大会 をリンクさせた海外 への情報発信	
					*JpGU-AGU, EGU 共同セッション	

ナー推薦を通じた優れた論文の投稿促進、③JpGU の中堅研究者表彰制度の受賞者への投稿依頼、④SPEPS(開放型特集号)の企画推進等を実施してきた。

学協会連合体である JpGU がジャーナルを発刊する意義は、「日本のコミュニティとして学問の自由・独立を確立すること」で、コミュニティの評価と直結する影響力のあるジャーナルの発行は重要である。(IF)などジャーナル評価指標の採択が決まり次第、新たな宣伝戦略を講じるとともに、編集体制の強化。APC(論文出版料)の改訂と出版経費の見直しを行い、最終的に日本学術振興会の補助なしに「独り立ち」できるまで成長したいと計画している。今後の数値目標については、① Review article のさらなる充実(目標を 20~30%)、②地球惑星科学分野の一流誌のレベルである IF 3.5 以上の獲得、③分野別トップ 15%以内の評価、④オープンサイエンスにも対応した、「Paper with Full Data Attached」の投稿カテゴリーの創出、⑤年間総出版数 200 以上の目標をクリアし、この分野で世界のトップクラスのジャーナルの一角を担う予定である。

## 2 国際情報発信強化の取組の目標・評価指標

本欄には、国際情報発信強化に係る取組の全体構想及び具体的な目標設定について、冒頭に10行程度でその概要を簡潔にまとめて記述してください。特に次の点については、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。

① 応募時点での学会の国際情報発信の現状。

② 助成期間内に何をどこまで強化しようとするのか。

上記について、助成期間の3年目の中間評価時、終了時のそれぞれの評価指標を含め具体的な目標を設定し、数値等で表わせるものについてはその数値も併せて記述してください。

### (概要)

オープンアクセス(OA)英文電子ジャーナル「Progress in Earth and Planetary Science(PEPS)」をさらに発展させるため、一流誌のレベルに達している発表論文へのアクセス総数や PDF ダウンロード総数をさらに増やすとともに、インパクトファクター(IF)の早期取得に全力を挙げる。5年後にはAGU, EGUの一流ジャーナルと同等のIF3.0~3.5を目標とする。The best articleなど「PEPS」の論文に直接関連した顕彰制度を充実させる。「PEPS」の特徴であるレビュー(総論)論文の出版促進のみならず、海外からの投稿数を増加させるために海外の研究者を編集長に迎え、海外の編集委員の就任を促進する。オープンサイエンスにも対応するよう「Paper with Full Data Attached」を創設し、JpGU-AGU 共同開催など海外の学会との共同開催を通じて、国際情報発信強化を総合的に推進する。

### (詳細)

#### (1) 応募時点での学会の国際情報発信の現状

①OA 英文電子ジャーナル「PEPS」を2014年に創刊し、定期刊行している。②通常の論文とともにレビュー論文(>20%)にも重点を置いているのが特徴である。③現在登録申請をしているIFは未取得だが、論文ダウンロード総数約18万件は当分野の世界の一流誌のレベルに達している。④1論文あたりの被引用数の暫定的計算IF値は2.4で、現時点では数より質を重視したポリシーを貫いている。⑤IF取得後は、出版数を増加させ、さらに高い数値目標を達成させる。⑥年会や各種国際学会時に、国内外の著名研究者に「PEPS」への投稿を促進する施策を実施し、海外からの投稿も増加している。

#### (2) 助成期間内に何をどこまで強化しようとするのか

①OA 電子ジャーナル「PEPS」を継続的に発展させるためにも、IFの早期取得に全力を挙げる。②PEPSの特徴であるレビュー論文については、掲載論文数の20~30%という数値目標を継続する。大学のゼミの教材としても使用できるよう、普及に努める。③アクセス総数やPDFダウンロード総数を中間評価の時点で倍に、終了時には5倍程度に引き上げる。④IF取得時で2.7~3.0、5年後にAGU, EGUの一流ジャーナルに並ぶ3.0~3.5を目標とする。⑤IF取得後、出版を増加させ、中間評価時で年間100編、終了時で150編の出版を目指す。⑥IF取得後は、編集体制を改革し、外国人編集委員の20%以上増員を行い、海外研究者の編集長を迎え、海外からの投稿を促進する。⑦The best articleなど「PEPS」の論文に直接関連した顕彰制度を充実させる。⑧論文の関連データも出版できる論文カテゴリー「Paper with Full Data Attached」を創設し、次世代のオープンサイエンスにも対応する。⑨著者の出身国を中間評価の時点で40、終了時には50ヶ国を目標とし、「PEPS」が全世界から認知される雑誌となるよう広報・宣伝活動を強化する。⑩JpGU-AGU共同開催(2017, 2020年)など、海外の学会との年会の共同開催、シンポジウム共同開催などを通じて、年会と出版事業をリンクさせて、効率的に「海外への情報発信」を加速させる。⑪中間評価時までには東南アジアの学会連合とMOUを結び、シンポジウムの共同開催を行なう。アジア地域での経済発展の著しい地域での研究者は将来「PEPS」への潜在的投稿者として広報活動を行う。

### 3 国際情報発信強化の取組の実施計画・方法

本欄には、国際情報発信強化の目標を達成するための取組内容について、具体的に各年度の実施計画・方法を記述してください。図表を用いる等して記述しても構いません。

また、刊行体制を強化する等の取組を行う場合には、全体像を明らかにするため、組織図を用いて、必要に応じ役割や員数を記述する等、具体的に記述してください。

なお、複数の学術団体等で協力体制をとって国際情報発信強化を行うための取組を行う場合は、協力団体の数、それぞれの団体名、どのような協力体制をとって行うか役割等も含め、具体的に記述してください。

#### 【平成 30 年度/2018 年(1 年目)】

◎インパクトファクター(IF)の早期取得に全力を挙げる(2017 年には、2013 年申請ジャーナルが WOS に採用されている)。採用決定後-IF 取得までは「PEPS」が一流誌となるための最重要期間で、外国人編集委員を増員するなど編集体制を補強する。取得以前でも IF を計算できるので、その値を JpGU の HP に表示し、効果的に質の高い原稿の「PEPS」への投稿を促す。

<IF 取得雑誌に決定された後>◎出版数の顕著な増加を目指す。◎AGU, EGU などの海外向けニュースや国内学会誌に「PEPS の WOS 採択」を周知し、投稿呼びかけの大キャンペーンを行なう。◎海外の研究者も含む依頼原稿、JpGU 連合大会の優秀発表論文については掲載料の補助を継続する。◎「The best article」など「PEPS」に直接関連した顕彰制度を充実させる。◎「Paper with Full Data Attached」等、新規取り組みに挑戦する。これは「オープンサイエンス」ともリンクし、「面的、時系列データの効率的活用」を目指す。◎JpGU 参加5学会が共同で出版してきた Letter 重視の EPS 誌(Earth Planets Space)と広報、運営委員会などを協力して行う。

【平成 31 年度/2019 年(2 年目)】基本的に前年度の施策を継続する。

【平成 32 年度/2020 年(3 年目)】<IF 取得後>◎この段階で「PEPS」は、海外の一流雑誌と対等に競争できるステージに移行したと考える。◎編集体制を刷新し、総編集長の一人を海外研究者とするなど海外からの投稿を促進する。著者負担額の見直しを行ない、「独り立ちへの第一歩」を試みる。

◎2020 年には、JpGU-AGU 共同大会を開催予定で、1,000 人以上の海外からの研究者の参加が見込まれ、年会と出版事業をリンクさせ、効率的に海外への情報発信を行う。中間評価の段階では、論文のダウンロード総数が現在の倍となるよう広報を拡大し、年間 100 編の出版を目指す。

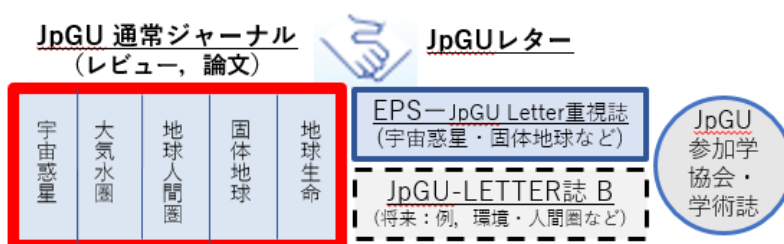
#### 【平成 33 年度/2021 年(4 年目)】

【複数の学術団体等による協力体制】EPS 誌とは、JpGU との出版プラットフォームを統一し、海外情報発信能力を強化するため、2022 年 1 月から JpGU レター重視誌として、コミュニティとしても発展を支えられるよう共同出版を開始する。JpGU 参加学協会の学術誌についても、積極的に後方支援を行う。

#### 【平成 34 年度/2022 年(5 年目)】

◎科研費による著者負担額の減額(補助)の最終年度となる。当該年度までに、この分野で世界に流通するジャーナルの中でもトップクラスの一極を担い、日本学術振興会の補助なしに「独り立ち」できる

よう、十分高い IF の取得できるレベルに「PEPS」の質を上げるとともに、引用度数と投稿論文数に基づき、著者負担額の見直しを行ない、「独り立ちへの第二歩」となるよう施策を実施する。◎本科研究費の終了時に、著者の出身国 50 ケ国を目標とし、論文のダウンロード総数が現在の 5 倍となるよう広報を拡大し、年間 200 編の出版を目指す。



## 4 新たな取組の準備状況

本欄には、新たな取組の準備状況を具体的に記述してください。  
複数の学術団体等で協力体制を新たにとって行う場合は、協力体制の準備状況も記述してください。

★**新規1** <IF 採用雑誌>【**早急なインパクトファクター(IF)取得**】現在、Thomson Reuter 社が 2015 年に新設した IF 取得候補のデータベースである Emerging Source Citation Index に即座に登録され、WOS 登録申請(IF 取得用)を 2016 年 8 月に行った。現在 IF 計算値は 2.4 となっている。

【**決定通知後の対策**】①採用決定後は、暫定 IF 値を自分達で計算し、その値を JpGU の HP に掲示し、効果的に「PEPS」への質の高い原稿の投稿を促す。②外国人編集委員を増員するなど編集体制を補強する。③ 特に、被引用数の多い研究者やグループに対し「PEPS」への投稿を強く依頼する方針で、すでにリストは作成済みである。④SCOPUS へも 2016 年 9 月に登録申請を行い、2017 年 10 月末に採択が決定したので、国際的な指標に登録される事を強力にアピールしていく。

★**新規2** <「Paper with Full Data Attached」の創設>これは、科学的な新発見と大量の関連データを併せて発表する論文形態である。公表されずに死蔵されている周辺データの活用と「贋作」や「盗用」の抑止機能がある。「PEPS」では、1) 広域、長時間の時系列など新たな科学的付加価値が高まるようなデータセット、2) SPEPS(開放型特集号)=SPecialcall for Excellent Papers on hot topicS、や大型プロジェクトの論文出版と並行した関連データを特に推奨して扱うことで、「PEPS」の科学的情報発信力を強化する。このような出版は、世界的な「現代的データペーパー」の思想に近く、G7 や NSF、EU Horizon2020 などでのオープンサイエンスの方向性と合致しており、JpGU のような連合体が率先して先進的な学術成果発信の取り組みを開始することはコミュニティとして重要であると考えられる。

★**新規3** <レビュー論文と virtual 冊子>「PEPS」の特徴であるレビュー論文の新たな用途の開拓を行う。大学のゼミなどで「BOOK より最新の体系的な知識」が期待できる分野別教材として、OA ジャーナルの特徴を活かし Key words 毎の「virtual 冊子」を HP に掲載する。

★**新規4** <特に海外の学会との協力を媒体とした年会とジャーナルのリンケージ>年会開催と出版事業は、JpGU の 2 つの中核的活動であるが、両者をリンクさせ、効率的な「海外への情報発信」を行う。特に、2020 年の 2 度目の JpGU-AGU 共同大会開催では、1,000 人以上の海外からの参加も期待できるので、成果発表の「PEPS」への投稿を促す。JpGU と MOU を結ぶ学会と海外でのシンポジウムの共同開催を行う予定である。特に、アジア地域での経済発展の著しい地域での研究者は、「PEPS」への潜在的投稿者なので、将来を見越して広報活動を行う。

★**新規5** <兄弟ジャーナルの効率的な出版促進>EPS は JpGU 参加 5 学会の LETTER 重視ジャーナルである。2021 年より JpGU も加わり共同出版に発展させる。例えば、巨大地震の速報は「EPS」で、その分野の全般的理解や新たな知見の位置づけなどはレビュー論文が特徴の「PEPS」で刊行するなど、地球惑星科学コミュニティ全体が、兄弟ジャーナルを効率よく支えられるような体制を構築する。EPS を、宇宙惑星科学・固体地球科学をカバーする、Letter 重視誌のパイロットケースとして発展させるとともに、大気水圏科学・地球人間圏科学・地球生命科学を扱う Letter 重視誌を関連学会と共同発行できるか、検討を始める。

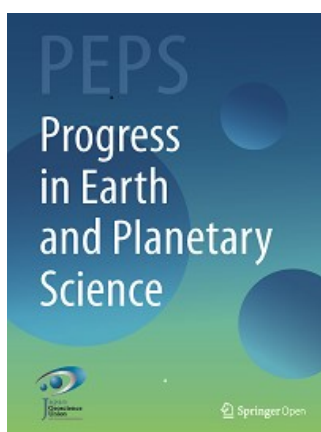
★**新規6** <自立への方策>高い IF が得られた段階では、経済的に自立した出版活動を行いたい。連合大会に参加し、成果を「PEPS」に出版する場合には APC の割引を行う。大会での「最先端」の発表を、文字媒体での「PEPS」への論文の発表を促す。一方、PEPS での論文出版のみで、連合大会に不参加の場合には、海外の同等の IF の OA 電子ジャーナルの APC に設定する。このビジネスモデルでは、当該分野における一流誌と同等の IF を確立することが必須となる。目的達成するため、あらゆる可能な方策を実施する。

## 5 重複応募をしている取組内容との相違点

本欄には、Web 入力画面の重複応募の有無で「有」を選択した場合、一つの学術団体等もしくは複数の学術団体等で協力体制をとる団体等として、本応募の取組内容が重複応募した取組内容とどのように違うのか、具体的かつ明確に記述してください。（公募要領15頁「(4) 重複応募の制限」参照）

また、「国際情報発信強化」の継続事業課題のある場合は、本応募の取組内容との関係を具体的かつ明確に記述してください。なお、該当しない場合（重複応募「無」の場合）は、「該当なし」と記述してください。

「該当なし」



# PEPS to be indexed in Scopus!

Dear Dr. Subscriber,

We are pleased to announce that Progress in Earth and Planetary Science (PEPS) will be included in Elsevier's abstract and citation database [Scopus](#).

We would like to thank everyone for supporting PEPS and contributing to this success in our continuing mission to play a major role in the future of global geosciences.

Sincerely,

PEPS Office, Japan Geoscience Union

## PEPS Highlights

- Check out [PEPS articles](#)
- [SPEPS article collections](#) on hot topics
- [Sign up for article alerts](#) for PEPS and never miss an update

## 2018 年大会 大会概要

タイトル	日本地球惑星科学連合 2018 大会 Japan Geoscience Union Meeting 2018 (JpGU 2018)
日時	2018 年 5 月 20 日(日)~24 日(木) 5 日間
会場	幕張メッセ 国際会議場(全館), 国際展示場 (Hall7) 東京ベイ幕張ホール (全館 ※日曜のみ 9 スパン目まで)
大会委員長	齋藤文紀 (学協会長会議議長・日本第四紀学会会長)

### ■□■ 2017 年大会 (JpGU-AGU Joint Meeting 2017) からの変更点 ■□■

#### 【大会全体】

- ・ ジョイントミーティングではありません
- ・ ジョイントセッションの開催を推奨します
- ・ 最終日に PM2 まで口頭セッションを入れます
- ・ 会期は 5 日間です (パブリックデーは日曜の 1 日のみです)
- ・ シニア会員の参加費無料は JpGU の正会員のみとなります  
(大会参加 ID, AGU ID のシニアは有料)
- ・ 大会翌日(25 日(金))に千葉県でのエクスカージョンを行います  
(チバニアンコースと, しらせ・千葉工大コースを予定)

#### 【プログラム関係】

- ・ ディスカッション枠を購入できます (コンビーナが一般投稿と同様に有料で投稿します)  
投稿したディスカッション枠は, コマ数配分確定用の投稿数にカウントします。
- ・ マージセッションに対しては, コンビーナ数, コマ数カウント, タイトル・スコープのリバイス等での優遇措置があります
- ・ 学協会セッションの採択管理を厳密にし, 公開セッション情報への明示も行います
- ・ ジョイントセッションの採択管理を厳密にし, 各ジョイント先団体とお互いに提携して  
コマーシャルを行います
- ・ 広報普及委員会内に「パブリックセッション小委員会」を設け, プログラム編成会議メンバーの一員として, パブリックセッションの採択・運営管理を行います
- ・ EE セッションの招待講演者の優遇(2017 は後から付け足しました)を正式に採用します  
(EE セッションに限り, 1 コマあたり口頭 2 名/ポスター 1 名の枠を, 口頭 3 名に使用可)
- ・ ホットピックの開催をサポート・推奨します
- ・ プログラム委員会権限での招待講演者枠の追加をガイドラインに加えました
- ・ セクション帯案の作成に期間を設けていますので, 帯案作成に必要な確認・交渉は, 各セクション委員の方にお任せします
- ・ セクション帯案作成に必要な会議旅費の用意が可能です
- ・ 最終日の最終コマまで使用しますので, できる限り大きなセッションを最終日から入れてください

今後の予定

仮コマ数発表	10/25	プログラム委員会より、採択会議で決定した仮配分のコマ数をお知らせします ※会議で決まった仮コマ数の変更は投稿終了後まで行いません
セッション情報再入力	10/25-10/28	コンビーナが、開催不可日や、採択された開催セッションの中に連続開催希望・同時開催回避希望がある場合に、情報を登録します
セクション帯案作成	10/30-11/12	セクションプログラム委員が、セクション毎にセッションの並びを検討します 複合領域セッションは、提案時に指定した母体セクションが担当します
編成会議	11/14-11/15	プログラム委員会にて、各セクションで作成した帯案（セクションの並び）を集め、コマ割を作成し、全体の重複状況などを確認・調整します
コマ割公開 （コンビーナのみ）	11/21	プログラム委員会より、編成会議で作成したコマ割をコンビーナ宛に公開します ※原則的に会議で決まったコマ割は変更いたしません
コマ割一般公開	12/1	一般向けにウェブ上でセッションリストとコマ割を公開します
投稿	1/10-2/19	コンビーナには積極的な投稿呼びかけをお願いします 投稿期間中は、投稿者の氏名・タイトルのみ確認できます ※早期 2/5 23:59
採択・移動	2/22-2/27	コンビーナが、論文の、採択／不採択、口頭／ポスター（予定、後から変更可）、招待講演の選出、他セッションへの移動を行います
コマ数確定	2/28	プログラム委員会にて、採択・移動の結果に基づき、投稿数を再計算し、コマ数を確定します 不採択→投稿元セッションにカウント、移動→移動先セッションにカウント
セッション編成	3/1-3/7	コンビーナが、採択した論文の発表順、発表時間（変更可能は招待講演のみ）の決定、座長の登録を行います
ホットトピック募集	3/1-3/7	ホットトピックの開催を希望するセッションを募ります
採択通知	3/13	投稿者に採択結果を通知します
プログラム公開	3/14	全発表プログラムの日時・会場を公開します
PDF 公開	5/11	予稿 PDF を公開します



Session ID	母体 Section	言語	タイトル(日)	代表コピナー	共同コピナー1	共同コピナー2	共同コピナー3	Joint Session	JpGU団体会員共催	その他の共催学会
U-01	A	EE	JpGU-AGU Great Debate: Role of Open Data and Open Science in Geoscience	樋口 篤志	Denis-Didier Rousseau			AGU		
U-02	S	EE	Pacific-type orogeny: From ocean to mantle	Inna Safonova	辻森 樹	磯崎 行雄	小宮 剛			
U-03	S	EE	Cryoseismology – a new proxy for detecting surface environmental variations of the Earth –	豊国 源知	金尾 政紀	坪井 誠司				
U-04	H	EE	国際的・分野横断的な視点からみた地球科学分野の女性研究者の雇用とワークライフバランス	原田 尚美	堀 利栄	小口 千明	宋 苑瑞	EGU		
U-05	S	JJ	地球惑星科学における学術出版の将来	川幡 穂高	小田 啓邦					
U-06	H	JJ	連合は環境・災害にどう向き合っていくのか？	奥村 晃史	川畑 大作	青木 賢人				
U-07	H	JJ	FutureEarth-GRPsによる地球環境変化研究の統合	石井 励一郎	安成 哲三	谷口 真人	Hein Mallee	AGU		
U-08	P	JJ	地球惑星科学の進むべき道 - 8: 地球惑星科学分野における将来計画とロードマップ【日本学術会議セッション】	藤井 良一	春山 成子	田近 英一	川幡 穂高			
O-01	G	JJ	これからの高校における地球惑星科学教育—「地理総合」と「地学基礎」—	秋本 弘章	田口 康博	小林 則彦	尾方 隆幸			
O-02	G	JJ	高校生によるポスター発表	原 辰彦	道林 克禎	久利 美和	山田 耕			
O-03	G	JJ	地球・惑星科学トップセミナー	原 辰彦	道林 克禎	成瀬 元	関根 康人			
O-04	G	JJ	研究者のためのメンタルケアとコミュニケーション術	宋 苑瑞						
O-05	S	JJ	キッチン地球科学 -手を動かして頭脳を刺激する実験-	熊谷 一郎	久利 美和	栗田 敬				
O-06	H	JJ	ジオパークがつなぐ地球科学と社会 -10年の成果と課題-	松原 典孝	市橋 弥生	小原 北士	大野 希一			
O-07	H	JJ	地球科学とアート -互いの創造を拡大する-	笹岡 美穂	船引 彩子	久保 貴志	白石 智子			
P-PS01	P	EE	Outer Solar System Exploration Today, and Tomorrow	木村 淳	笠羽 康正	Vance Steven	Kunio M. Sayanagi	AGU	地球電磁気・地球惑星圏学会	
P-PS02	P	EE	Regolith Science	和田 浩二	中村 昭子	Patrick Michel	Kevin John Walsh			
P-PS03	P	EE	太陽系小天体研究:現状の理解と将来の展望	石黒 正晃	中本 泰史	荒川 政彦	安部 正真			
P-PS04	P	EE	あかつきの成果と、金星科学の深化	佐藤 毅彦	堀之内 武	山本 勝	Kevin McGouldrick	AGU		
P-PS05	P	EJ	月の科学と探査	長岡 央	諸田 智克	西野 真木	鹿山 雅裕		地球電磁気・地球惑星圏学会	
P-PS06	P	EJ	太陽系物質進化	山口 亮	藤谷 涉	癸生川 陽子	鹿山 雅裕			
P-PS07	P	EJ	火星と火星圏の科学	宮本 英昭	臼井 寛裕	松岡 彩子	Sushil K Atreya			
P-PS08	P	JJ	惑星科学	岡本 尚也	黒崎 健二				日本惑星科学会	
P-PS09	P	JJ	宇宙における物質の形成と進化	橘 省吾	三浦 均	野村 英子	大坪 貴文			
P-EM10	P	EE	Coupling Processes in the Atmosphere-Ionosphere System	Liu Huixin	Chang Loren	大塚 雄一			地球電磁気・地球惑星圏学会	
P-EM11	P	EE	Effects of recurrent storms: from the heliosphere to the atmosphere	DMITRIEV ALEXEI	三好 由純			AOGS	地球電磁気・地球惑星圏学会	
P-EM12	P	EE	Space Weather, Space Climate, and VarSITI	片岡 龍峰	Antti A Pulkkinen	草野 完也	塩川 和夫	AGU	地球電磁気・地球惑星圏学会	
P-EM13	P	EE	太陽地球系結合過程の研究基盤形成	山本 衛	小川 泰信	野澤 悟徳	吉川 顕正		地球電磁気・地球惑星圏学会	
P-EM14	P	EE	Recent Advances in Ionosphere Observation and Modeling for Monitoring and Forecast	Lin Charles	Yang-Yi Sun					
P-EM15	P	EE	Dynamics in magnetosphere and ionosphere	田中 良昌	堀 智昭	中溝 葵	尾崎 光紀		地球電磁気・地球惑星圏学会	
P-EM16	P	EE	Dynamics of Earth's Inner Magnetosphere and Initial Results from Arase	Danny Summers	三好 由純	細川 敬祐	海老原 祐輔		地球電磁気・地球惑星圏学会	
P-EM17	P	JJ	宇宙プラズマ理論・シミュレーション	梅田 隆行	三宅 洋平	成行 泰裕	中村 匡		地球電磁気・地球惑星圏学会	
P-EM18	P	JJ	大気圏・電離圏	大塚 雄一	津川 卓也	川村 誠治			地球電磁気・地球惑星圏学会	
P-EM19	P	JJ	太陽圏・惑星間空間	坪内 健	西野 真木	成行 泰裕			地球電磁気・地球惑星圏学会	
P-AE20	P	JJ	系外惑星	生駒 大洋	成田 憲保					
P-CG21	P	EE	宇宙・惑星探査の将来計画と関連する機器開発の展望	亀田 真吾	笠原 慧	尾崎 光紀	吉岡 和夫		地球電磁気・地球惑星圏学会	
P-CG22	P	JJ	アルマによる惑星科学の新展開	武藤 恭之	百瀬 宗武	佐川 英夫	下条 圭美			
P-CG23	P	JJ	惑星大気圏・電磁圏	関 華奈子	今村 剛	寺田 直樹	前澤 裕之		地球電磁気・地球惑星圏学会	
A-AS01	A	EE	高性能スーパーコンピュータを用いた最新の大気科学	瀬古 弘	小玉 知央	滝川 雅之	三好 建正		日本気象学会	
A-AS02	A	EE	大規模な水蒸気場と組織化した雲システム	三浦 裕亮	濱田 篤	横井 覚	佐藤 正樹		日本気象学会	
A-AS03	A	EE	最新の気象科学:台風研究の新展開～過去・現在・未来	中野 満寿男	和田 章義	金田 幸恵	伊藤 耕介	AGU, AOGS	日本気象学会	
A-AS04	A	EE	雲降水過程の統合的理解に向けて	鈴木 健太郎	高藪 縁	Hirohiko Masunaga			日本気象学会	
A-AS05	A	EE	Precipitation Extreme	谷田貝 亜紀代						
A-AS06	A	EJ	大気化学	岩本 洋子	中山 智喜	豊田 栄	江口 菜穂		日本大気化学会	
A-AS07	A	JJ	成層圏・対流圏過程とその気候への影響	渡辺 真吾	河谷 芳雄	関谷 高志	佐藤 薫		日本気象学会, 日本大気化学会	
A-OS08	A	EE	季節から十年規模の気候変動と予測可能性	望月 崇	V Ramaswamy	森岡 優志		AGU	日本海洋学会, 日本気象学会	

A-OS09	A	EE	Marine ecosystems and biogeochemical cycles: theory, observation and modeling	伊藤 進一	平田 貴文	Eileen E Hofmann	Enrique N Curchitser	AGU	日本海洋学会	
A-OS10	A	EE	Atlantic climate variability, and its global impacts and predictability	Ingo Richter	Noel S Keenlyside	Carlos R Mechoso	Yoshimitsu Chikamoto		日本海洋学会	
A-OS11	A	EE	What we have learned about ocean mixing in the last decade	日比谷 紀之	Louis St Laurent	Ren-Chieh Lien		AGU	日本海洋学会	
A-OS12	A	EE	陸域海洋相互作用	山敷 庸亮	升本 順夫	佐々木 貴教			日本海洋学会, 水文・水資源学会	
A-OS13	A	EJ	インド洋域の物理・生物地球化学・生態系と相互連関	升本 順夫	齊藤 宏明	植木 巖			日本海洋学会	
A-OS14	A	EJ	陸域と海洋をつなぐ水循環の素過程	木田 新一郎	山崎 大	三寺 史夫	山敷 庸亮		日本海洋学会, 水文・水資源学会	
A-OS15	A	JJ	海洋と大気の変動・渦・循環力学	古恵 亮	田中 祐希	久木 幸治	杉本 憲彦		日本海洋学会, 日本気象学会	
A-OS16	A	JJ	地球温暖化・海洋酸性化に対する沿岸・近海域の海洋応答	小笠 恒夫	藤井 賢彦	芳村 毅			日本海洋学会	
A-OS17	A	JJ	沿岸域の海洋循環と物質循環	森本 昭彦	田中 潔	速水 祐一	一見 和彦		日本海洋学会	
A-OS18	A	JJ	海洋物理学一般	岡 英太郎	川合 義美	東塚 知己			日本海洋学会	
A-OS19	A	JJ	海洋化学・海洋生物学	小笠 恒夫	山田 奈海葉	齊藤 宏明	伊藤 進一		日本海洋学会	
A-HW20	A	EE	流域の物質輸送と栄養塩循環—人間活動および気候変動の影響—	齋藤 光代	小野寺 真一	細野 高啓	Adina Paytan	AGU	日本海洋学会, 日本水文科学学会, 日本堆積学会, 日本地下水学会, 土壌物理学学会, 陸水物理研究会	日本陸水学会, 日本土壌肥料学会
A-HW21	A	EE	Human-Natural system interactions and solutions for environmental management	Yuei-An Liou				AGU		
A-HW22	A	EJ	水循環・水環境	長尾 誠也	町田 功	飯田 真一	林 武司	AGU	日本水文科学学会, 水文・水資源学会, 日本地下水学会, 日本地球化学学会	
A-HW23	A	EJ	流域の地下水・地表水における滞留時間と水・物質循環プロセス	辻村 真貴	水垣 滋	勝山 正則	Gusyev Maksym		日本水文科学学会, 水文・水資源学会	
A-HW24	A	JJ	熊本地震に伴う地表水と地下水の変化	嶋田 純	中川 啓	細野 高啓	林 武司		日本水文科学学会, 日本地下水学会	
A-HW25	A	JJ	同位体水文学 2018	安原 正也					日本水文科学学会	
A-HW26	A	JJ	都市域の水環境と地質	林 武司	西田 継	鈴木 弘明	浅田 素之		日本水文科学学会	
A-CC27	A	EE	Remote Sensing of Snow	Sheldon Dean Drobot						
A-CC28	A	JJ	雪氷学	縫村 崇行	石川 守	館山 一孝	永井 裕人		日本雪氷学会	
A-CC29	A	JJ	アイスコアと古環境モデリング	植村 立	川村 賢二	阿部 彩子	竹内 望		日本雪氷学会	
A-GE30	A	EE	エネルギー・環境・水ネクサスと持続的発展	張 銘	川本 健	薛 強	Jet-Chau Wen			
A-GE31	A	EE	地質媒体における物質移動, 物質循環と環境評価	小島 悠揮	濱本 昌一郎	斎藤 広隆	森 也寸志		土壌物理学学会	
A-TT32	A	JJ	GNSS-Rが拓く新しい地球観測	市川 香	日置 幸介				日本海洋学会	
A-CG33	A	EE	Harnessing Satellite Big Data for Societal Benefits	Allen A Huang						
A-CG34	A	EE	中緯度海洋と大気	西川 はつみ	佐々木 克徳	岡島 悟	Thomas Spengler		日本海洋学会, 日本気象学会	
A-CG35	A	EE	Global Carbon Cycle Observation and Analysis	市井 和仁	Patra Prabir	町田 敏暢	David Crisp	AGU, AOGS		
A-CG36	A	EE	衛星による地球環境観測	沖 理子	本多 嘉明	高藪 緑	松永 恒雄			
A-CG37	A	EE	Asian monsoon hydro-climate and water resources research for a next GEWEX RHP	鼎 信次郎						
A-CG38	A	EJ	北極域の科学	津滝 俊	漢那 直也	鄭 峻介	中村 哲		日本海洋学会, 日本雪氷学会	
A-CG39	A	EJ	熱帯インド洋・太平洋におけるマルチスケール大気海洋相互作用	今田 由紀子	東塚 知己	時長 宏樹	小坂 優		日本海洋学会	
A-CG40	A	JJ	陸域生態系の物質循環	加藤 知道	平野 高司	佐藤 永	平田 竜一			
A-CG41	A	JJ	植物プランクトン増殖に関わる海洋—大気間の生物地球化学	宮崎 雄三	西岡 純	鈴木 光次	岩本 洋子		日本海洋学会, 日本大気化学学会, 日本地球化学学会	
A-CG42	A	JJ	沿岸海洋生態系—1. 水循環と陸海相互作用	杉本 亮	小路 淳	山田 誠	藤井 賢彦		日本海洋学会, 日本水文科学学会	水産海洋学会
A-CG43	A	JJ	沿岸海洋生態系—2. サンゴ礁・藻場・マングローブ	宮島 利宏	梅澤 有	渡邊 敦	樋口 富彦		日本海洋学会	日本サンゴ礁学会, 日本マングローブ学会, 日本熱帯生態学会
A-CG44	A	JJ	地球惑星科学における航空機観測利用の推進	高橋 暢宏	小池 真	町田 敏暢	篠田 太郎			
A-CG45	A	JJ	気候変動への適応とその社会実装	石川 洋一	渡辺 真吾	大楽 浩司			水文・水資源学会	
H-GG01	H	JJ	自然資源・環境の利用・変化・管理: 社会科学と地球科学の接点	古市 剛久	佐々木 達	上田 元	大月 義徳			
H-GM02	H	EE	Geomorphology	八反地 剛	瀬戸 真之	島津 弘			日本地形学連合	
H-GM03	H	JJ	地形	八反地 剛	瀬戸 真之	島津 弘			日本地形学連合	
H-QR04	H	JJ	第四紀: ヒトと環境系の時系列ダイナミクス	小荒井 衛	須貝 俊彦	水野 清秀	米田 穰		日本第四紀学会	
H-SC05	H	JJ	地球温暖化防?と地学(CO2地中貯留・有効利?、地球?学)	徂徠 正夫	薛 自求	愛知 正温				
H-DS06	H	EE	Advanced remote sensing toward Mega-Disaster Response	Youngjoo Kwak	竹内 渉	Biswajet Pradhan				
H-DS07	H	EE	地すべりおよび関連現象	千木良 雅弘	王 功輝	今泉 文寿		AGU, EGU		
H-DS08	H	EE	Natural hazards impacts on the society, economics and technological systems	PETROVA ELENA	松島 肇	Vivek Shandas		AGU, EGU		
H-DS09	H	EJ	海底地すべりとその関連現象	北村 有迅						
H-DS10	H	JJ	津波とその予測	山本 直孝	今井 健太郎	対馬 弘晃			日本地震学会	
H-DS11	H	JJ	湿潤変動帯の地質災害とその前兆	千木良 雅弘	小嶋 智	八木 浩司	内田 太郎		日本応用地質学会, 日本地質学会	
H-DS12	H	JJ	人間環境と災害リスク	青木 賢人	松多 信尚	須貝 俊彦	小荒井 衛		日本活断層学会, 日本第四紀学会, 日本地理学会	

H-RE13	H	JJ	再生可能エネルギー分野での地球科学データの可能性	大竹 秀明	宇野 史睦	島田 照久	野原 大輔			
H-TT14	H	EE	Non-destructive techniques applied to stone cultural heritage	小口 千明	Celine Elise Thomachot-Schneider	Patricia vazquez		EGU	日本地形学連合	
H-TT15	H	EE	Geographic Information Systems and Cartography	小口 高	村山 祐司	若林 芳樹			地理情報システム学会, 日本地図学会, 日本地理学会	
H-TT16	H	EJ	環境リモートセンシング	島崎 彦人	近藤 昭彦	長谷川 均	石内 鉄平		日本リモートセンシング学会, 水文・水資源学会, 日本地理学会	
H-TT17	H	JJ	地理情報システムと地図・空間表現	小荒井 衛	田中 一成	中村 和彦			日本地図学会, 地理情報システム学会, 日本地理学会	
H-TT18	H	JJ	環境トレーサビリティ手法の開発と適用	陀安 一郎	中野 孝教	木庭 啓介				
H-TT19	H	JJ	浅部物理探査が目指す新しい展開	尾西 恭亮	青池 邦夫	井上 敬資	横田 俊之		物理探査学会	
H-CG20	H	EE	景観評価の国際比較	青木 陽二						
H-CG21	H	EE	気候-人間システムの相互作用	立入 郁	横島 徳太	田中 克政	高橋 潔	AGU, EGU		
H-CG22	H	EE	GLP(全球陸域研究計画)と持続可能社会の構築	氷見山 幸夫	春山 成子	王 勤学				
H-CG23	H	EE	混濁流:発生源から堆積物・地形形成まで	横川 美和	泉 典洋	中嶋 健	成瀬 元	AGU, EGU	日本堆積学会	
H-CG24	H	EJ	堆積・侵食・地形発達プロセスから読み取る地球表層環境変動	清家 弘治	山口 直文	成瀬 元	高柳 栄子		日本堆積学会, 日本地質学会	
H-CG25	H	EJ	デルタとエスチュアリー:複雑な河口システムの理解を目指して	斎藤 文紀	堀 和明	Guan-Hong Lee		AGU	日本第四紀学会	
H-CG26	H	EJ	福島第一原子力発電事故後の地域復興で科学者が今後取り組むこと	西村 拓	溝口 勝	Kosuke Noborio			土壌物理学学会	
H-CG27	H	JJ	原子力と地球惑星科学	笹尾 英嗣	佐藤 努	幡谷 竜太				
H-CG28	H	JJ	海岸低湿地における地形・生物・人為プロセス	藤本 潔						
H-CG29	H	JJ	高レベル放射性廃棄物処分: 理学・工学の両面から考える	末次 大輔	寿楽 浩太	金嶋 聰	鷺谷 威			
H-CG30	H	JJ	圏外環境における閉鎖生態系と生物システム	富田一横谷香織	木村 駿太				生態工学会	
S-GD01	S	EJ	重力・ジオイド	Takayuki Miyazaki	山本 圭香				日本測地学会	
S-GD02	S	EJ	測地学一般・GGOS	松尾 功二	横田 裕輔				日本測地学会	
S-SS03	S	EE	Induced and triggered seismicity: case-studies, monitoring and modeling techniques	Francesco Grigoli	青木 陽介	Enescu Bogdan	Luca Urpi			
S-SS04	S	EE	Nankai Trough Seismogenic Zone Experiment toward the final challenge	金川 久一	Gregory F Moore	木下 正高	Keir Becker	AOGS		
S-SS05	S	EE	Effective usage of PSHA	Matt Gerstenberger	Schorlemmer Danijel	はお 憲生	Ma Kuo-Fong	AGU		
S-SS06	S	EE	How to further develop the Collaboratory for the Study of Earthquake Predictability?	Schorlemmer Danijel	平田 直	Matt Gerstenberger	鶴岡 弘			
S-SS07	S	EE	The Role of Slow Slip Events in the Earthquake Cycle: Stressing, Triggering, and Hazard	Matt Gerstenberger	平田 直	Bill Fry	Laura M Wallace	AGU		
S-SS08	S	EJ	活断層と古地震	小荒井 衛	近藤 久雄	道家 涼介	松多 信尚		日本活断層学会, 日本地震学会, 日本第四紀学会, 日本地質学会	
S-SS09	S	EJ	地殻変動	落 唯史	大園 真子				日本地震学会, 日本測地学会	
S-SS10	S	EJ	地震波伝播:理論と応用	西田 究	白石 和也	新部 貴夫	澤崎 郁		日本地震学会, 物理探査学会	
S-SS11	S	JJ	地殻構造	青柳 恭平					日本地震学会	
S-SS12	S	JJ	地震活動	勝俣 啓					日本地震学会	
S-SS13	S	JJ	地震予知・予測	馬場 俊孝					日本地震学会	
S-SS14	S	JJ	強震動・地震災害	栗山 雅之					日本地震学会	
S-SS15	S	JJ	地震発生の物理・断層のレオロジー	向吉 秀樹	谷川 亘	松澤 孝紀	吉田 圭佑		日本地震学会	
S-EM16	S	JJ	電気伝導度・地殻活動電磁気学	山崎 健一	相澤 広記				地球電磁気・地球惑星圏学会	
S-EM17	S	JJ	地磁気・古地磁気・岩石磁気	望月 伸竜	清水 久芳				地球電磁気・地球惑星圏学会	
S-IT18	S	EE	Planetary cores: Structure, formation, and evolution	寺崎 英紀	大谷 栄治	William F McDonough	George Helffrich	AGU		
S-IT19	S	EE	Mineral-melt-fluid interaction and COHN volatile speciation in Earth and planetary	Mysen Bjorn	大谷 栄治	土屋 旬				
S-IT20	S	EE	Structure and Dynamics of Earth and Planetary Mantles	芳野 極	趙 大鵬	中川 貴司		AGU		
S-IT21	S	EE	マントルブルームは存在するか?	真島 英壽	Gillian R Foulger	趙 大鵬		AGU		
S-IT22	S	EE	核-マントルの相互作用と共進化	飯塚 毅	渋谷 秀敏	土屋 卓久	太田 健二	AGU	地球電磁気・地球惑星圏学会	
S-IT23	S	EE	New perspectives on the geodynamics of East Asia	Timothy B Byrne	山口 飛鳥	Jonny Wu	沖野 郷子			
S-IT24	S	EE	Probing the Earth's interior with geophysical observation on seafloor	末次 大輔	Guilhem BARRUOL	川勝 均	Douglas Wiens	AGU, EGU		
S-IT25	S	EE	Deep Carbon: Diamond formation and carbon speciation in Earth and planetary processes	大谷 栄治	Litasov Konstantin	鍵 裕之	Craig E Manning	AGU		
S-IT26	S	EE	地殻応力研究の最前線:観測・実験・モデリングの統合	呉 泓昱	林 為人	真田 佳典	Chan Chung-Han			
S-IT27	S	EE	地球内部での液体の特性とその役割	坂巻 竜也	中島 陽一					
S-IT28	S	EE	The lithosphere and the asthenosphere	Catherine Rychert	川勝 均			AGU, EGU		
S-GL29	S	EJ	泥火山と地球化学的・地質地形学的・生物学的関連現象	浅田 美穂	土岐 知弘	井尻 暁	辻 健			
S-GL30	S	JJ	地球年代学・同位体地球科学	田上 高広	佐野 有司					
S-GL31	S	JJ	地域地質と構造発達史	山縣 毅	大坪 誠				日本地質学会	

S-GL32	S	JJ	上総層群における下部-中部更新統境界GSSP	岡田 誠	菅沼 悠介	亀尾 浩司	久保田 好美		日本地質学会	
S-RD33	S	EJ	資源地質学	大竹 翼	荒岡 大輔	高橋 亮平	野崎 達生		資源地質学会	
S-MP34	S	EE	Oceanic and Continental Subduction Processes	Hafiz Ur REHMAN	辻森 樹	Chin Ho Tsai		AGU	日本地質学会	
S-MP35	S	EE	Antarctica and surrounds in Supercontinent Evolution	外田 智千	小山内 康人	Geoffrey Hugo Grantham	Satish-Kumar Madhusoodhan			
S-MP36	S	EE	Crust-Mantle Connections	田村 芳彦	石塚 治	Chris Conway			日本火山学会, 日本地質学会	
S-MP37	S	EJ	変形岩・変成岩とテクトニクス	中村 佳博	針金 由美子				日本地質学会	
S-MP38	S	JJ	鉱物の物理化学	大藤 弘明	鎌田 誠司				日本鉱物科学会	
S-VC39	S	EE	Pre-eruptive magmatic processes: petrologic analyses, experimental simulations and dynamics modeling	中村 美千彦	東宮 昭彦	Shanaka L de Silva	Costa Fidel	AGU, AOGS, EGU	日本火山学会	
S-VC40	S	JJ	火山防災の基礎と応用	吉本 充宏	宝田 晋治	石峯 康浩	久保 智弘		日本火山学会	
S-VC41	S	JJ	活動的火山	前田 裕太 大倉 敬宏	三輪 学史 奥村 聡	青木 陽介 小園 誠史	西村 太志		日本火山学会	
S-VC42	S	JJ	火山の熱水系	藤光 康宏	神田 径	大場 武			日本火山学会, 日本地球化学会, 日本地熱学会	
S-VC43	S	JJ	火山・火成活動および長期予測	及川 輝樹	長谷川 健	三浦 大助	下司 信夫		日本火山学会, 日本地質学会	
S-VC44	S	JJ	島弧の火成活動と火山ダイナミクス	鈴木 雄治郎	中村 仁美	入山 宙			日本火山学会	
S-GC45	S	EE	Volatile Cycles in the Deep Earth - from Subduction Zone to Hot Spot	佐野 有司	羽生 毅	角野 浩史				
S-GC46	S	JJ	固体地球化学・惑星化学	下田 玄	鈴木 勝彦	山下 勝行	石川 晃		日本地球化学会	
S-TT47	S	EE	Recent Advances in Exploration Geophysics (RAEG2018)	三ヶ田 均	飯尾 能久	島 伸和	武川 順一			
S-TT48	S	EJ	合成開口レーダー	森下 遊	小林 祥子	木下 陽平	阿部 隆博		日本測地学会, 日本リモートセンシング学会	
S-TT49	S	EJ	空中からの地球計測とモニタリング	楠本 成寿	大熊 茂雄	小山 崇夫	光畑 裕司		物理探査学会	
S-TT50	S	JJ	地震観測・処理システム	吉見 雅行					日本地震学会	
S-TT51	S	JJ	ハイパフォーマンスコンピューティングが拓く固体地球科学の未来	堀 高峰	八木 勇治	汐見 勝彦				
S-CG52	S	EE	Intraslab and intraplate earthquakes	北 佐枝子	大内 智博	Thomas Pascal Ferrand	岡崎 啓史	AGU, EGU		
S-CG53	S	EE	Science of slow earthquakes: Toward unified understandings of whole earthquake process	井出 哲	廣瀬 仁	氏家 恒太郎	波多野 恭弘	AGU, EGU		
S-CG54	S	EE	ハードロック掘削 オマーンから海洋リソスフェア, 島弧形成+	高澤 栄一	道林 克禎	Peter B Kelemen	Damon A H Teagle	AGU, EGU		
S-CG55	S	EE	Various interactions between solid Earth and climates	中川 貴司	横山 祐典	奥野 淳一	山崎 雅			
S-CG56	S	EE	アジア地域の地震・火山・テクトニクス	趙 大鵬	磯崎 行雄	Jianshe Lei				
S-CG57	S	EJ	変動帯ダイナミクス	深畑 幸俊	竹下 徹	岩森 光				
S-CG58	S	EJ	沈み込み帯へのインプットを探る: 海溝海側で生じる過程の影響	山野 誠	森下 知晃	藤江 剛				
S-CG59	S	EJ	日本列島の構造と進化: 島弧の形成から巨大地震サイクルまで	佐藤 比呂志	篠原 雅尚	石川 正弘	松原 誠			
S-CG60	S	JJ	岩石・鉱物・資源	門馬 綱一	野崎 達生	齊藤 哲	土谷 信高		日本鉱物科学会, 日本地質学会, 資源地質学会	
S-CG61	S	JJ	海洋底地球科学	沖野 郷子						
S-CG62	S	JJ	地殻?体と地殻変動	小泉 尚嗣	梅田 浩司	松本 則夫	田中 秀実			
S-CG63	S	JJ	地球惑星科学におけるレオロジーと破壊・摩擦の物理	桑野 修	清水 以知子	石橋 秀巳	田阪 美樹			
S-CG64	S	JJ	脆性延性境界と超臨界地殻流体: 島弧地殻エネルギー	土屋 範芳	浅沼 宏	小川 康雄			日本地熱学会	
S-CG65	S	JJ	地震動・地殻変動・津波データの即時把握・即時解析・即時予測	干場 充之	川元 智司	山本 直孝	小木 曾 仁			
S-CG66	S	JJ	3次元地質モデリングとシミュレーションの新展開	高野 修	木村 克己					
S-CG67	S	JJ	海底下の変動現象を捉えるための海域観測の現状と展望	平原 和朗	日野 亮太	堀 高峰				
B-A001	B	EE	アストロバイオロジー	藪田 ひかる	杉田 精司	深川 美里	藤島 皓介			
B-BG02	B	JJ	生命-水-鉱物-大気相互作用	高井 研	中村 謙太郎	上野 雄一郎	鈴木 庸平			
B-BG03	B	JJ	地球惑星科学と微生物生態学の接点	砂村 倫成	濱村 奈津子	木庭 啓介	諸野 祐樹			
B-PT04	B	EE	バイオミネラリゼーションと環境指標	豊福 高志	北里 洋	Bijma Jelle	廣瀬 孝太郎	EGU	日本古生物学会	
B-PT05	B	EJ	化学合成生態系の進化をめぐる	ジェンキンス ロバート	渡部 裕美	延原 尊美			日本古生物学会	
B-PT06	B	JJ	地球生命史	本山 功	生形 貴男	守屋 和佳			日本古生物学会	
B-CG07	B	EE	地球惑星科学 生命圏フロンティアセッション	高野 淑識	鈴木 庸平	福士 圭介	加藤 真悟	AGU	日本地球化学会	
B-CG08	B	EE	深宇宙と深海から挑む生命探査科学	矢野 創	Christophe Sotin	高井 研		AGU		
B-CG09	B	JJ	地球史解説: 冥王代から現代まで	小宮 剛	加藤 泰浩	鈴木 勝彦				
B-CG10	B	JJ	顕生代生物多様性の変遷: 絶滅と多様化	磯崎 行雄	澤木 佑介					
G-01	G	EE	Geoethics for Today's Geoscientists: Awareness, Responsibility and Challenges	Billy M Williams	Christine McEntee	Eric A Davidson	末広 潔	AGU		
G-02	G	EE	Communicating Hazard and Risk - Disaster Resilience, Community Involvement, Communication Strategies	Schorlemmer Danijel	平田 直	木村 玲欧	大友 章司			
G-03	G	JJ	災害を乗り越えるための「総合的防災教育」	中井 仁	小森 次郎	林 信太郎				

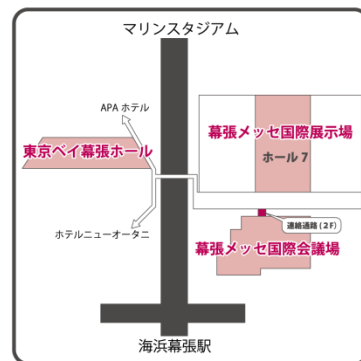
G-04	G	JJ	地球惑星科学のアウトリーチ	植木 岳雪	小森 次郎	長谷川 直子	大木 聖子			
G-05	G	JJ	小・中・高等学校、大学の地球惑星科学教育	畠山 正恒						
M-IS01	A	EE	アジア・モンスーンの進化と変動、新生代寒冷化との関連	山本 正伸	多田 隆治			AGU	地球環境史学会	
M-IS02	H	EE	ジオパーク、ジオサイトおよび石造文化財の保存修復：風化プロセスとダメージアセスメント	小口 千明	藁谷 哲也			EGU	日本地形学連合	
M-IS03	S	EE	Interdisciplinary studies on pre-earthquake processes	服部 克巳	劉 正彦	Ouzounov Dimitar	Qinghua Huang	AGU, AOGS, EGU		
M-IS04	P	EE	Thunderstorms and lightning as natural hazards in a changing climate	佐藤 光輝	久保田 尚之	山下 幸三	高橋 幸弘			
M-IS05	A	EE	Satellite Land Physical Processes Monitoring at Medium and High Resolution	Jean-Claude Roger	Shinichi Sobue	Eric Vermote				
M-IS06	A	EJ	南大洋・南極氷床が駆動する全球気候変動	関 宰	岡 顕	真壁 竜介	植村 立			
M-IS07	P	EJ	結晶成長、溶解における界面・ナノ現象	木村 勇気	三浦 均	塚本 勝男	佐藤 久夫			
M-IS08	S	EJ	地球掘削科学	山田 泰広	黒田 潤一郎	氏家 恒太郎	菅沼 悠介			
M-IS09	S	JJ	地震・火山等の地殻活動に伴う地圏・大気圏・電離圏電磁現象	児玉 哲哉	長尾 年恭	芳原 容英				
M-IS10	A	JJ	古気候・古海洋変動	岡崎 裕典 長谷川 精	磯辺 篤彦 岡 顕	北村 晃寿 加 三千宣	佐野 雅規		日本海洋学会、日本古生物学会、地球環境史学会	
M-IS11	H	JJ	津波堆積物	篠崎 鉄哉	千葉 崇	石村 大輔				
M-IS12	H	JJ	ジオパーク	尾方 隆幸	植木 岳雪	大野 希一	田所 敬一		日本火山学会、日本地震学会、日本第四紀学会、日本地形学連合、日本地質学会	
M-IS13	S	JJ	海底～海面を貫通する海域観測データの統合解析	有吉 慶介	木戸 元之	稲津 大祐	高橋 成実			
M-IS14	B	JJ	生物地球化学	木庭 啓介	柴田 英昭	大河内 直彦	山下 洋平			
M-IS15	A	JJ	地球流体力学：地球惑星現象への分野横断的アプローチ	伊賀 啓太	吉田 茂生	柳澤 孝寿	相木 秀則			
M-IS16	S	JJ	火山噴煙・積乱雲のモデリングとリモートセンシング	佐藤 英一	前野 深	前坂 剛			日本火山学会、日本気象学会	
M-IS17	S	JJ	ガスハイドレートと地球環境・資源科学	戸丸 仁	八久保 晶弘	谷 篤史	後藤 秀作			
M-IS18	P	JJ	水惑星学	関根 康人	臼井 寛裕	玄田 英典	渋谷 岳造			
M-IS19	A	JJ	大気電気学	芳原 容英	鴨川 仁					
M-IS20	B	JJ	遠洋域の進化	松岡 篤	栗原 敏之	尾上 哲治	木元 克典		形の科学会、日本古生物学会	
M-IS21	A	JJ	南北両極のサイエンスと?型研究	中村 卓司	杉本 敦子	杉山 慎	野木 義史			
M-GI22	A	EE	Data assimilation: A fundamental approach in geosciences	中野 慎也	藤井 陽介	宮崎 真一	三好 建正		日本海洋学会、日本気象学会、日本地震学会、地球電磁気・地球惑星圏学会	
M-GI23	A	EE	Open Science as a New Paradigm: Research Data Sharing, Infrastructure, Scientific Communications, and Beyond	村山 泰啓	近藤 康久	Cecconi Baptiste	Toczko Sean	AGU		
M-GI24	H	JJ	Building Disasters resilient societies through sustainable marine and coastal Governance.	Kalpana Chaudhari						
M-GI25	A	JJ	山岳地域の自然環境変動	鈴木 啓助	苅谷 愛彦	奈良間 千之	佐々木 明彦			
M-GI26	A	JJ	情報地球惑星科学と大量データ処理	村田 健史					日本情報地質学会	
M-GI27	S	JJ	データ駆動地球惑星科学	桑谷 立	長尾 大道	堀 高峰				
M-GI28	P	JJ	計算科学による惑星形成・進化・環境変動研究の新展開	林 祥介	小河 正基	井田 茂	草野 完也			
M-GI29	A	JJ	オープンデータ&サイエンスの近年の状況	樋口 篤志	近藤 康久					
M-GI30	S	JJ	ソーシャルメディアと地球惑星科学	天野 一男	小口 高	伊藤 昌毅	山本 佳世子			
M-AG31	S	EE	CTBTO – Four IMS Technologies for Detecting Nuclear Explosion on the Planet and Their Applications to Earth Science	Nurcan Meral ?zel	松本 浩幸	直井 洋介	Lassina Zerbo			
M-AG32	S	EJ	海洋地球インフォマティクス	坪井 誠司	高橋 桂子	金尾 政紀				
M-AG33	A	EJ	福島原発事故により放出された放射性核種の環境動態	北 和之	恩田 裕一	篠原 厚	津旨 大輔			
M-SD34	P	JJ	宇宙食と宇宙農業	片山 直美						
M-TT35	H	EE	高精細地形・地球物理データ解析	早川 裕弌	Gomez Christopher	楠本 成寿		AGU, EGU		
M-TT36	H	EE	Environmental Remote Sensing	Wei Yang	作野 裕司	近藤 昭彦				
M-TT37	A	JJ	地球化学の最前線：高度分析装置と地球惑星科学	角皆 潤	高橋 嘉夫	飯塚 毅			日本地球化学会	
M-TT38	S	JJ	インフラサウンド及び関連波動が繋ぐ多圏融合地球物理学の新描像	山本 真行	新井 伸夫	市原 美恵				
M-ZZ39	A	EE	Environmental, socio-economic and climatic changes in Northern Eurasia	Groisman Pavel	Erwan Monier	Shamil Maksyutov				
M-ZZ40	H	JJ	地球科学の科学史・科学哲学・科学技術社会論	矢島 道子	青木 滋之	山田 俊弘	吉田 茂生			
M-ZZ41	S	JJ	海底マンガン鉱床の科学：基礎から応用まで	臼井 朗	高橋 嘉夫	鈴木 勝彦	伊藤 孝			

### セッション数

	English		Japanese	Total
	EE	EJ	JJ	
2016年	63		131	194
2017年	107	45	101	253
2018年	91	32	112	235

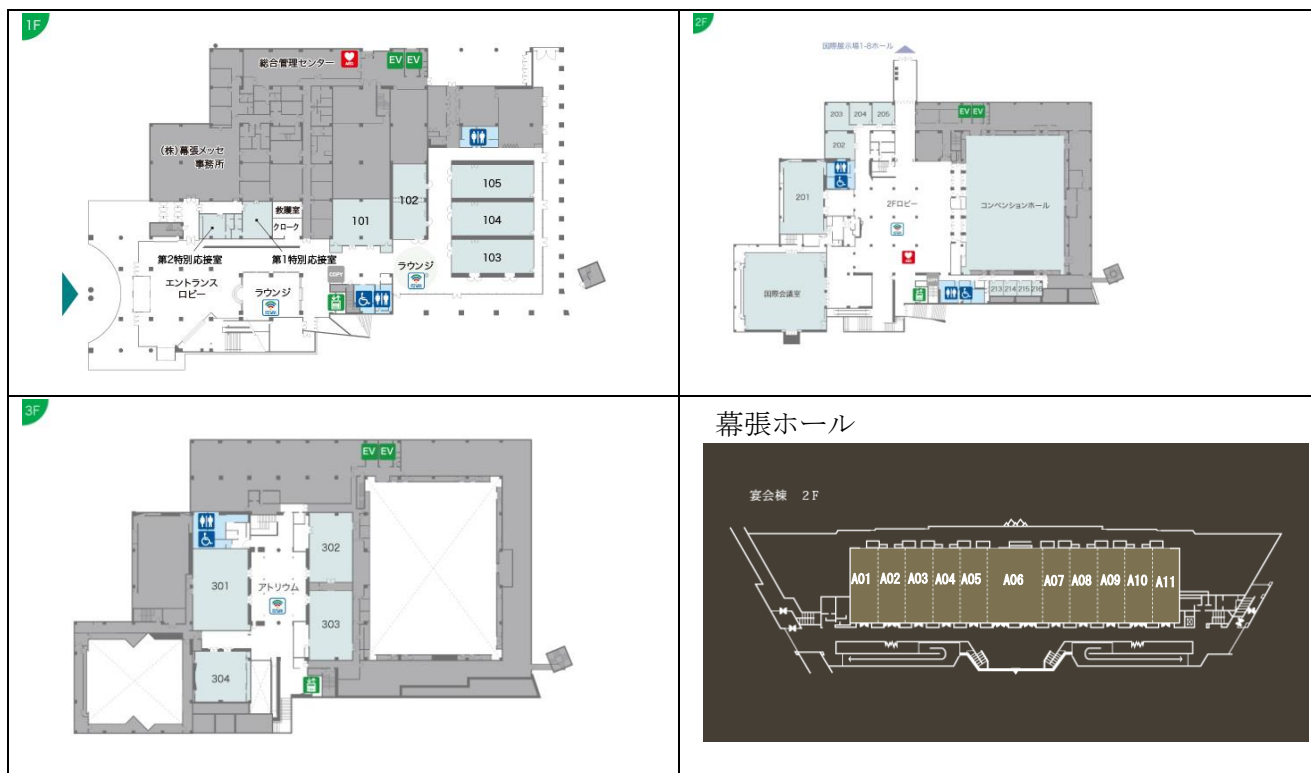
幕張メッセ会場 (2018年, 2019年, 2020年, 2022年(予定))

2018年	2018年5月20日(日)～24日(木) 5日間
2019年	2019年5月26日(日)～30日(木) 5日間
2020年 *Joint Meeting	2020年5月24日(日)～28日(木) 5日間
2022年	日程未定



◎会場：

- ・千葉県千葉市幕張メッセ国際会議場全館
- ・国際展示場 Hall 7 (または Hall 8)
- ・東京ベイ幕張ホール (※土日祝日は8講演会場+1休憩室, 平日は10講演会場+1休憩室)



◎部屋数 口頭会場 27 部屋

83 m <sup>2</sup>	1 部屋	202
100 m <sup>2</sup>	1 部屋	106(多目的室)
130 m <sup>2</sup>	1 部屋	301A,
139 m <sup>2</sup>	1 部屋	102
150 m <sup>2</sup>	1 部屋	301B
156 m <sup>2</sup>	3 部屋	103, 104, 105
160 m <sup>2</sup>	1 部屋	101
165 m <sup>2</sup>	2 部屋	201A, 201B
190 m <sup>2</sup>	1 部屋	304
194 m <sup>2</sup>	2 部屋	302, 303
635 m <sup>2</sup>	1 部屋	国際会議室
670 m <sup>2</sup>	2 部屋	コンベンションホール A, コンベンションホール B
172 m <sup>2</sup>	10 部屋	A01, 02, 03, 04, 05, 07, 08, 09, 10, 11

◎ポスター・展示エリア (国際展示場 1 ホール) 6750 m<sup>2</sup>

2021年5月30日(日)～6月3日(木) 使用予定  
 みなとみらいコンベンション施設 (仮称)

◎場所：パシフィコ横浜展示ホール北



◎部屋数 口頭会場 35 部屋

100 m <sup>2</sup>	2 部屋	G312, 412
104 m <sup>2</sup>	2 部屋	G313, 413
111 m <sup>2</sup>	12 部屋	G314, 315, 316, 317, 318, 319, 414, 415, 416, 417, 418, 419
123 m <sup>2</sup>	2 部屋	G320, 420
125 m <sup>2</sup>	2 部屋	G311, 411
126 m <sup>2</sup>	1 部屋	G221
132 m <sup>2</sup>	7 部屋	G213, 215, 216, 217, 218, 219, 220
140 m <sup>2</sup>	1 部屋	G214,
292 m <sup>2</sup>	2 部屋	G304, 404
295 m <sup>2</sup>	2 部屋	G303, 403
531 m <sup>2</sup>	2 部屋	G301+302, G401+402

◎ポスター・展示エリア (1F 多目的ホール) 6337 m<sup>2</sup>

## Global Strategy Com Meeting #16

Date: 2017 November 13, Monday 12:30-14:45

Room: The University of Tokyo, Faculty of Science Building 1, Rm 839,  
7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo

Attendee:

Global Strategy Committee (GSC) members: Gaku Kimura (Chair),  
Simon Wallis (Vice Chair), Toshitaka Gamo, Shigeko Haruyama, Toshiyuki Hibiya,  
Masataka Kinoshita, Hiroe Miyake, Yasuhiro Murayama, Hiroshi Nishi,  
Eiji Ohtani (ZOOM), Kiyoshi Suyehiro (International Program Coordinator), Fumiko  
Tajima, Yukihiro Takahashi (Working Group for Collaborations with Asian and  
Pacific Academic Societies Chair)

WG members: Jun Matsumoto, Naoyuki Kubota (ZOOM), Takuya Tsugawa

Observer: Takashi Nakagawa

President: Hodaka Kawahata

JpGU Office: Yozo Hamano (Secretary General), Kayoko Shirai, Sachiko Ide

Regrets:

Global Strategy Committee (GSC) members: Kazuyoshi Endo, Masaki Fujimoto,  
Hisashi Nakamura, Kanako Seki, Shogo Tachibana

Past President: Toshitaka Tsuda

Vice Presidents: Eiichi Tajika, Masato Nakamura, Takashi Furumura

Distribution:

1: Agenda book (pp. 36)

2: JpGU 2018 monthly planner

Meeting Summary: ACTION ITEMS

- 1: アジアにおける長期的な継続が可能なカウンターパートの情報収集を行う  
(全員)
- 2: 2018、2月開催の EGU-AOGS @フィリピンへの参加者確認をし、必要なら派遣を検討する (委員長・作業部会長・作業部会 WG)
- 3: アジアとの国際連携はボトムアップ型で、2020年を目標に進める (委員長・作業部会長・作業部会 WG)
- 4: グローバル戦略委員会の新メンバー招致について検討する (全員)
- 5: ジョイントセッションのルールについて協議する (委員長・国際コーディネーター・事務局)

木村委員長により 12:30 開会した。

川幡会長より挨拶があった。JpGU では大会とジャーナルを主軸に国際化を図る。  
本日の審議事項や報告事項は 11/28 理事会に上げる。

議題 1. JpGU-AGU Joint Meeting 2020 への展望と今後の国際活動

川幡会長から展望と目標が述べられた。

2020 年は AGU との共同開催、2021 年は横浜開催。2017 年は、ロイヤリティ方



式の共同開催であったが、今回は別のモデルで実施する。  
共同開催は PEPS のインパクトファクターを含め、国際化を推進する良い機会と捉える。

(資料 2-1) 中川オブザーバーより、中国地球科学連合学会年会参加報告があった。国際セッションは日本や台湾などと実施。約 2500 講演。中国語の web を読み取るサポートの必要性。

その後、earth science の派閥、Chinese NSF の関与の有無に関して分析が必要。Chinese Geoscience Union が中国と台湾にそれぞれ見受けられるため調査が必要。中国や台湾、香港などを対象に、長期的な継続が可能なカウンターパートの情報収集が必要、などの議論がなされた(Action Item 1)。

(資料 2-5) ミャンマー MAESA および MGS に関する報告が末廣国際コーディネータからあった。

2019 年にジョイントセッションを立ち上げる計画がある。複数の委員より、ミャンマーに関する話題提供や、現地での学会立ち上げの経験が紹介された。

(資料 2-2) IAG-IASPEI 2017 報告が、白井事務局員からあった。  
参加国は、人数の多い順に日本・米国・中国・ドイツ・台湾・ロシア・フランス・オーストラリア・ポーランド・インドなど。

(資料 2-3) AOGS 2017 報告が、白井事務局員からあった。

4 union meeting に AGU が欠席。

2018 年 2 月に開催予定の AOGS-EGU Joint Conference 開催の背景について、木下委員から質問があった。本 Conference に JpGU からの人員派遣が効果的である。早急に参加可能性を探り、必要なら理事会に追加予算申請をする(Action Item 2)。

(資料 2-7) 川幡会長から GSA 参加報告があった。学会の良い雰囲気づくりや、口頭発表が多いメリットについて議論した。

## 議題 2. アジア地域における国際連携の今後とアクション

高橋作業部会長より、学協会アンケートのとりまとめ結果が示された。

対話を始めるきっかけに活用し、今後広く会員にアンケートを依頼する。

日本地理学会や日本地質学会の回答について補足説明があった。

各学会に窓口を依頼するのではなく、コンタクトパーソンを探す。

木村委員長より、個人ベースあるいは学会ベースの草の根的な活動が実った事例が紹介された。

西委員より MoU に伴う予算確保の指摘があった。地質学会では渡航費は派遣国負担、滞在費は開催国負担という形で実施し、長続きしている。

高橋作業部会長より、ICT 技術・テレコンの積極的活用、口頭発表リモート化、ポスター電子化について問題提起があった。大会運営委員会等でシステムとルールを決める必要がある。ストーリーミングは旅費よりも安価だが、大会参加費を徴収する参加者に鑑み、平等の保障方策について議論した。

続いて、学会の大会参加の理念について全員で議論した。大会に参加するメリットは、ダイレクトなコミュニケーションをとれることである。大会に参加で

きない場合にコミュニケーションを最大化するツールとして ICT 技術を利用する方針を確認した。

大谷委員より台湾とのジョイントの進捗について質問があった。ボトムアップの接続を強める算段だったが、あまり進んでいない。大気・マントルリソスフェア WS・地質関係の接続を生かす方向性について議論された。木村委員長より、アジアとの国際連携はボトムアップ型で進める。個人接続までサーチを広げ、実績ベースで可能性のあるところから開始する方針が示された。

高橋作業部会長より、アジアとの国際連携は 2020 年を目標にし、技術は村山委員、運営は大会運営委員会のサポートを受けながら検討する方針が示された (Action Item 3)。

議題 3. 第 2 回アジア太平洋マントル・リソスフェアダイナミクスに関するワークショップについて (資料 1-4)

審議事項。中川オブザーバーより、ワークショップ開催趣旨と共催承認申請書の説明があった。グローバル戦略委員会として開催趣旨を承認した。予算面は理事会が判断。

議題 4. グローバル戦略委員会の今後の人事について

2018 年 5 月以降は新しい理事会体制で進めるが、それに先立ちグローバル戦略委員長代理を立てる案が諮られた。現委員長が現時点でステップダウンせざるを得ない事情を了解し、次期新体制に至るまでの間、委員長代理を立てて委員会活動を続けることにした。委員長代理については、本人の同意と委員会コンセンサスにより、高橋委員を推薦することとなった。さらに、斎藤文紀氏、中川貴司氏、安成哲平氏など、国際活動で実績のある方々をグローバル戦略委員会の新メンバーを招致するとともに、理事会からの協力体制が充実するよう依頼する (Action Item 4)。

議題 5. JpGU Meeting 2018 でのジョイントセッションについて (資料 2-4)

浜野大会運営委員長より、AGU, EGU, AOGS とのジョイントセッションの応募状況の説明があった。ジョイントセッション開催は、両学協会の regulation を満たす必要がある。EGU とのジョイントは、EGU と JpGU の開催時期に近いが、2019 年に向けて活発化を検討する。AOGS は第一コンビナーが AOGS 会員かつ二か国以上のコンビナーが必要。ジョイントセッションに関するルールについて今後協議する (Action Item 5)。

田島委員より、同じ内容を複数のジョイントセッションに応募している場合の outcome を明確にすべきとの発言があった。

議題 6. その他

ウォリス副委員長より 2019 年は AGU 創立 100 周年であるため、対応を考える必要性の指摘があった。

村山委員より AGU プレプリントサーバーの紹介があった（資料 2-6）。末廣国際コーディネータ・村山委員がアドバイザーを務めている。ポスターに doi を付与する方針を検討中。

今回のグローバル戦略会議は JpGU Meeting 2018 の投稿が終了した 2018 年 2 月末から 3 月上旬で日程調整をすることとなった。  
議事はこれからの世界動向把握とアクションの進行チェック 及び JpGU Meeting 2018 期間中の国際活動の方針の予定である。

14:45 閉会

<GSA 関連資料>

「GSA is pleased to offer presenters from this meeting the opportunity to upload presentations for viewing on the GSA Web site.」on 16th November, 2017

Title: 過去 Boost your GSA 2017 GSA Annual Meeting Abstract! +

Hello Hodaka Kawahata

We hope you enjoyed the 2017 GSA Annual Meeting in Seattle.

GSA is pleased to offer presenters from this meeting the opportunity to upload presentations for viewing on the GSA Web site. Posting your presentation is a great way to share your information to thousands of possible viewers. Uploaded presentations remain linked to your searchable abstract indefinitely.

If you would like to see how this works, click [here to view uploaded presentations](#) from the 2016 Annual Meeting in Denver.

Posting your presentation is easy. Accepted formats include Microsoft Word, PowerPoint, RTF, PDF (best option), and HTML. You can post and modify your presentation anytime between now and Friday, 22 December 2017. To take advantage of this feature, please go to:

- <http://gsa.confex.com>
- Enter your Abstract ID: 296817 and Password: 544747. Then click the “Login” button.
- In the small left frame, select the link titled “Speakers Corner” to access the upload page.
- Last day upload page will be open: Friday, 22 December 2017.

You may post up to 4 files related to your abstract. An uploaded file must not exceed 50 MB in size. And best of all, there is no charge for this feature.

*Another good feature!* If you misplaced your abstracts submission fee receipt, you can print out one from this same login information.

Thank you very much for your interest in participating at the GSA Annual Meeting!

Sincerely,

GSA Meetings Department

Here to view uploaded presentations のページ

The screenshot shows the GSA Annual Meeting website interface. At the top, there is a navigation bar with the GSA logo and the text "THE GEOLOGICAL SOCIETY OF AMERICA®" and "SCIENCE • STEWARDSHIP • SERVICE". Below the navigation bar, there are links for "Start | Author Index | View Uploaded Presentations | Meeting Information". The main content area displays a list of presentations and handouts for the "GSA Annual Meeting in Denver, Colorado, USA - 2016". The first presentation, titled "ORIGIN OF >3.65 GA QUARTZ-AMPHIBOLE-PYROXENE ROCKS FROM AKILIA, SW GREENLAND: AN INTEGRATED FIELD AND MINERAL COMPOSITION INVESTIGATION", is highlighted with a red box. Below it, there are sections for "Handouts" and "GSA-2016 mmh (pc).pptx (24.9 MB)". Other presentations listed include "QUANTIFYING THE EFFECTS OF SPATIAL UNCERTAINTY IN FRACTURE PERMEABILITY ON CO<sub>2</sub> LEAKAGE THROUGH CAP ROCKS DURING GEOLOGIC CO<sub>2</sub> STORAGE IN CONTINENTAL FLOOD BASALTS" and "HOW COULD THE GOLD KING MINE WATER BE PASSIVELY TREATED?". The list continues with "METHODS FOR BRINGING STUDENT BASED FIELD EXPERIENCES AND OBSERVATIONS INTO A PEER LEARNING COMMUNITY THAT IS DESIGNED FOR LARGE INTRODUCTORY GEOSCIENCES COURSES AND BEYOND" and "USING SCREEN-BASED VIRTUAL REALITY LANDSCAPES TO PREPARE STUDENTS FOR THE FIELD".

**GSA Annual Meeting in Denver, Colorado, USA - 2016**

[1-2 の内容が表示](#)

Paper No. 1-2

Presentation Time: 8:15 AM

### **ORIGIN OF >3.65 GA QUARTZ-AMPHIBOLE-PYROXENE ROCKS FROM AKILIA, SW GREENLAND: AN INTEGRATED FIELD AND MINERAL COMPOSITION INVESTIGATION**

**HAGE, Melissa M.**, Department of Geography-Geology, University of Wisconsin-Baraboo/Sauk County, 1006 Connie Rd., Baraboo, WI 53913, FEDO, Christopher M., Department of Earth & Planetary Sciences, University of Tennessee, 1412 Circle Drive, Knoxville, TN 37996, USUI, Tomohiro, Earth Life Science Institute, Tokyo Institute of Technology, Tokyo, 152-8550, Japan and WHITEHOUSE, Martin J., Department of Geosciences, Swedish Museum of Natural History, Stockholm, SE-104 05, Sweden, [melissa.hage@uwc.edu](mailto:melissa.hage@uwc.edu)

Some of Earth's oldest (>3.7 Ga) known supracrustal rocks are exposed in SW Greenland, and termed the Akilia Association (AA). This assemblage is composed dominantly of mafic igneous rocks, with less common sedimentary units, including BIF. On the island of Akilia, AA rocks, including an ~5 m thick unit composed of banded quartz+amphibole+pyroxene (QAP), have had primary characteristics overprinted during multiple high-grade metamorphic events. Correct protolith identification is important because it has been interpreted as BIF and reported to contain isotopic evidence for a biosphere. Because the lithology cannot be dated directly, cross-cutting relationships have been used to establish an older relative age against the tonalitic Amitsoq Gneiss (AG), which has been radiometrically dated at >3.65 Ga. In the field, the contact between the AG and AA is strongly foliated and lineated. Structural measurements, including orientation of foliations, mineral lineations, and fold axes in both units are identical in orientation, indicating the present relationship between the two units is tectonic; there is no field evidence for igneous intrusion of the AG protolith into AA. Furthermore, QAP is nowhere in contact with the AG, leaving its relative age and protolith uncertain. To investigate possible QAP protoliths, we analyzed its mafic mineral compositions, as well as those from the adjacent AA rocks. Outside QAP, mafic phases are dominated by enstatite, anthophyllite, and hornblende, and possess whole-rock trace-element signatures indicative of an igneous origin (i.e., Th/Sc and Cr/Th ratios and abundances of Cr, Y, TiO<sub>2</sub>, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>). Within QAP, amphibole consists dominantly of actinolite, hornblende and cummingtonite, and pyroxene is dominantly diopside, hedenbergite and augite, which point to an original Mg-rich protolith. We argue that such amphibole and pyroxene compositions are likely to be derived from an original protolith consisting of ultramafic rocks with disseminated carbonate combined with a Fe-rich carbonate band brought to granulite facies metamorphism, rendering a BIF protolith unnecessary. Minor amounts of magnetite found in the QAP would have formed through the decarbonation of siderite. Similar lithologies are common in the lower grade Isua Greenstone Belt.

#### Handouts

 [GSA-2016\\_mmh \(pc\).pptx](#) (24.9 MB)

[1-2 の PPT ファイル](#)

Session No. 1

[Precambrian Geology](#)

Sunday, 25 September 2016: 8:00 AM-12:00 PM

Room 302 (Colorado Convention Center)

Geological Society of America *Abstracts with Programs*. Vol. 48, No. 7  
doi: 10.1130/abs/2016AM-283134

GSA2017 Annual Meeting & Exposition  
22-25 October, Seattle

By the Numbers



(Excerpt from GSA 2017 Annual Meeting & Exposition News)

- **Attendees:** 7,100
- **Professionals:** 2,800
- **Early Career professionals:** 700
- **Students:** 2,600
- **K-12 teachers:** 100
- **On To the Future scholars:** 71
- **Members of the media:** 30
- **Countries represented:** 54
- **Sessions:** 393
- **Abstracts accepted:** 4,950 (2,000 poster, 2950 talks)
- **Field Trips:** 20 trips with 526 participants
- **Short Courses:** 18 courses with 440 participants
- **Exhibitors:** Companies: 211, Booths: 250
- **Amount donated by attendees toward the GSA Student Travel Fund:** \$7200
- **Local area field trip for high school students viewing GSA:** 150
- **Local geocaching community viewing GSA public lectures:** 100
- **Number of days until GSA 2018 in Indianapolis, Indiana:** 368

## 教育検討委員会からの報告

2017.11.28

### 1 教員免許更新講習

内容と反省点（報告文と収支決算は別紙）

- ①申し込みのポータルサイトが不具合であったため、情報の共有が上手くできなかった。  
（ネット環境に不具合がなければ、来年度は問題なし）
- ②「総合的防災教育」(7月28日:受講者8名)は受講者のレベルと講義内容にズレが見られた。  
また、講師の交通費を全く考慮しない企画だったため赤字を計上。  
（来年度は企画者の地元で開催の意向、理事会で開催不可にしてもよい）
- ③「学校区での自然災害とその対策を考える」(8月6日:受講者3名)は防災科学技術研究所のスタッフがボランティアで開催してくれる。そのため費用負担は無し。(宣伝が悪かったため参加者が少ない。案内分を改善し来年も継続。)
- ④「石碑や海岸の地形、露頭から学ぶ、関東地方を襲った大地震とプレートテクトニクスおよび地磁気逆転の証拠」(8月22-23日:受講者19名)は参加者も多く内容も充実していた。正に JpGU だからこそできるテーマ設定と講師選出であった。  
（バス代が当初の見込みより高騰したため黒字幅が減少、来年度は交通費の額を精査し実施。)
- ⑤「数値シミュレーションで学ぶ津波の基礎」(8月29日:受講者3名)は少人数であったが、参加者の満足度は高い。(来年度も実施)

まとめ

- ・来年度も今年度に準じる形式で実施したいが、「総合的防災教育」については実施計画を詳細に吟味する必要がある。
- ・基本的に収支バランスは取れる予定であるが、不測の事態に備え教育検討委員会で予備費を計上予定。

### 2 新地学基礎提言のその後

6月末文科省に提出した次期学習指導要領高等学校理科の「地学基礎」は、担当者よりかなり参考にさせてもらっているとのコメントをいただいている。  
必要があれば、具体的に協力できると回答してある。

3 地学教育学会神戸大会にて、埼玉県地学研究委員会発行の「地球惑星科学実習帳」を250冊無料配布し、好評を得た。

4 11/11,12に地震研で行われた地学教育に関する研究集会で、全国から9人の高校地学教員を人選・招待し、各地域の地学教育の実情について、情報交換を行った。  
(木村先生両日とも出席)

5 12月17日に行われる第11回日本地学オリンピック予選(国際タイ大会予選)の応募者は2211名(昨年1924名)であった。

以上

地球惑星科学に関する教員向けの知識普及活動の一環として、2017年度に初めて「教員免許状更新講習」を開催した。2017年度は、JpGU 会員および関連する専門家の協力を得て、以下の表1に示す4つの講習を行った。開催した講習はいずれも【選択領域】(受講者が任意に選択して受講する領域)である\*1)。初めての試みであったことからかいずれの講習も定員には満たず、受講者数はのべ30名(うち、聴講参加者3名)に留まったが、事後アンケート調査からみると、受講者の評価はいずれの講習でも高評価であり、質問項目への回答に1ないしは2を回答した受講者は皆無であった(表2)。

\*1) 他に、【必修領域】、【選択必修領域】がある。

表1 開催した講習の概要

開催月日	開催地	講習名	受講者数	定員
7月28日	大阪府高槻市 高槻市生涯学習センター	総合的防災教育	8名	30人
8月06日	つくば市 防災科学技術研究所	学校区での自然災害とその対策を考える	3名	20人
8月22 -23日	千葉県 館山市菜の花ホール他	石碑や海岸の地形、露頭から学ぶ、 関東地方を襲った大地震とプレートテクトニクスおよび地磁気逆転の証拠	16名 (うち聴講参加3名)	30人
8月29日	東京大学(本郷)	数値シミュレーションで学ぶ津波の基礎	3名	15人

表2 文部科学省指定の事後アンケート調査の結果

	項目Ⅰ	項目Ⅱ	項目Ⅲ
総合的防災教育	3.3	3.3	3.3
学校区での自然災害とその対策を考える	4.0	4.0	3.7
石碑や海岸の地形、露頭から学ぶ、関東地方を襲った大地震とプレートテクトニクスおよび地磁気逆転の証拠	4.0	3.9	3.8
数値シミュレーションで学ぶ津波の基礎	4.0	4.0	4.0
4講座の平均	3.8	3.7	3.7

いずれの項目も4択であり、

4：よい(十分満足した・十分成果を得られた)

3：だいたいよい(満足した・成果を得られた)

2：あまり十分でない(あまり満足しなかった・あまり成果を得られなかった)

1：不十分(満足しなかった・成果を得られなかった)

である。

また、各項目の質問文は次の通りである。

項目Ⅰ：本講習の内容・方法についての総合的な評価

項目Ⅱ：本講習を受講したあなたの最新の知識・技能の修得の成果についての総合的な評価



### 項目 III：本講習の運営面（受講者数、会場、連絡等）についての評価

今年度の反省点、今後改善すべき点として挙げられている事柄は次の通りである。

#### ・遅刻した受講者への厳格な対応

20分遅刻した受講者が1名存在した。この受講者のために昼休みを20分削減して対応したが、他の受講者へ迷惑を掛けることとなった。（遅刻者が発生した時点で全受講者へ了解を得たが、今後、本人の責めに期さない遅刻以外の遅刻者に対しては遅刻した時点で認定しないルールを設け、申込者へ申込時等に伝え、厳格にルールを守る必要があると認識した。）

#### ・修了試験実施方法のルール化

合格点に達しない受講者が1名存在した。追試、追々試で対応したが、追試実施の有無を含め、修了試験のあり方等を明確にし、申込者へ申込時等に伝える必要がある。

#### ・受付方法

受付事務を対応できる人数、時間に制約がある状況では、例えば、東京理科大学方式<sup>\*2)</sup>を真似るなど、JpGU 大会後の特定期間10日間に受付期間を限定するなどの対応が必要である。

\*2) 申込み受付期間を平成29年5月8日（月）～5月17日（水）と短期間に限定している。

#### ・開設申請時に、必要となる講師の交通費のチェック

遠方からの講師を採用した講習があった。開催地までの交通費を考え、開催地と講師の勤務先（居住地）との距離に制約を設ける必要がある。

#### ・広報の方法

複数選択可にて講座をどのように知ったかを尋ねた。JpGU の委員会メンバーを除いて集計を行うと、80%の方が文部科学省の全講習一覧から知ったと回答しており、JpGU のHPにて知った方は17%、地学教育MLから知った方は4%であった。

勤務先が（幼・）小・中・高であるJpGU 会員へ案内メールを送付するなど、お金を掛けずに周知することが可能な広報の方法をより多く採用する必要がある。

#### ・開催意義の理解

（公社）日本地震学会（SSJ）も教員免許状更新講習を開催しているが、本年度開催した4つの講習のうち、3つの講習はSSJにて開設できない内容の講習と考える。これら3つの講習は、地震の内容だけでなく、地質、火山、気象、海洋など、地震以外の内容も豊富に含まれた講習だからである。

JpGU が開催する意義、受講者からの評価を踏まえると、収支の問題を除けば、JpGU が教員免許状更新講習を開催することは、僅かではあろうが、地球惑星科学に関する教員向けの知識普及活動として有効であると、今年度の試行から判断できると考える。収支の問題も、遠方からの講師の旅費を制限することで解決可能と考える。次年度以降、改善できる点は改善し、広報を工夫することで、開設の目的を果たしていくことが臨まれるといえる。

以上

2017年JpGU 教員免許状講習会収支決算

2017/11/27現在

講習番号	01	02	03	04	
講習名【選択】	総合的防災教育	学校区での自然災害とその対策を考える	石碑や海岸の地形、露頭から学ぶ、関東地方を襲った大地震とプレートテクトニクスおよび地磁気逆転の証拠	数値シミュレーションで学ぶ津波の基礎	教育検討委員会 予算
<b>収 入</b>					
参加料(一般)	48,000	12,000	132,000	12,000	0
参加料(連合会員)	0	5,400	37,800	5,400	0
貸切バス代	0	0	58,500	0	0
委員会予算より	0	0	0	0	41,501
収入合計(A)	48,000	17,400	228,300	17,400	41,501
<b>支 出</b>					
会場費	21,470	0	1,520	0	0
講師交通費	43,580	0	22,361	0	0
講師謝金	20,000	0	20,000	5,000	0
講師宿泊費	0	0	33,650	0	0
引率者交通費					
引率者宿泊費					
貸切バス代	0	0	149,150	0	0
消耗品代	0	0	320	0	
アルバイト代	0	0	0	0	30,500
振込手数料					5,050
支出合計(B)	85,050	0	227,001	5,000	35,550
収支差額(A)-(B)	-37,050	17,400	1,299	12,400	5,951
収支差額合計		<b>-5,951</b>			<b>5,951</b>
教員免許講習 全体収支	<b>0</b>				

平成30年度教員免許状更新講習 役割分担及び進行手順			
	時期	講座責任者	
免許更新講習担当グループ		更新免許講習事務局(3職)	JpGU事務局(4職)
(根本(責任者)、浦上、黒山、西)		(浦上+アヲルバイト)	(杉村、渡辺)
郵送以外の全ての連絡先		<a href="mailto:edu_office@jogu.ac.jp">edu_office@jogu.ac.jp</a>	<a href="mailto:office@jogu.ac.jp">office@jogu.ac.jp</a>
講座を開始するかどうか問い合わせる。(講座は29年と向し講座とする。)ただし、講習01(総合的防災)の会場と講師には制限をつける。	12月～1月	講座を開講するかどうか返事をする。	
開講する講座の設定(名称、担当講師、講座責任者、開催地、時間数、期間、定員、申し込み受付期間(今年度は6月4日から18日。仮交付はなし))及び講師料を決定し(注1)、必要事項をすべて記入した免許状更新講習認定申請書を作成する。(記載する各講座の担当者は担当グループ責任者)	1月末まで	担当講師決定(注:担当講師の交通費には上限を付ける)。	
①	2月初旬	免許状更新講習認定申請書取りまとめ	文科省へ免許状更新講習認定申請書を提出する。講習開始日(2ヶ月前までに郵送及び電子メールにより提出。申請者はJpGU会長(理事長))
①'	2月末まで	①に基づき連合WEBページ掲載の原稿作成	①①'確認後
②	2月末まで	講座責任者より、講師依頼をした各講師から講師情報FORM(勤務先、勤務先住所、講師所属機関への提出書類の写本、必要事項は書類の交付先・宛先、講師料金受け取りの可否、受け取る場合は振込先(銀行名、支店名、口座名義、普通/当座別、口座番号)の受け取り、取りまとめ。	講師所属機関への提出書類(振り込み)通帳 受講申込書(郵送)受付+受講料(振り込み)通帳 確認
③	3月16日以降		文科省承認後、WEBページに掲載(問い合わせはedu-office@jogu.ac.jpへのメールのみ)
	4月15日以降		講師所属機関への提出書類(出張依頼等)を作成し、各機関へ送付
受講者募集開始日は、申請締切日の翌々月の16日以降になる。なお募集開始日及び受け付け期間は文科省提出の申請書及びWEBページに掲載されたものを変更せずに厳守する。	6月4日～18日	参加者の情報を集める	受講申込書(郵送)受け取り、浦上に渡す。
各講座毎にリストを作成し、メール問い合わせにすぐに対応(担当グループで要確認)。各講習の申込みが全員終了したところで、各講座責任者に申込書のPDFを送付。	各講座終了後	免許状更新講習受講者評価書(様式第8号)を受け取る。	
④	各講座終了後	各講座について終了後、講座責任者から報告と成績を付け取り、認定された講習(認定書号)毎に、受講者の評価結果を取りまとめる。	電話問い合わせについては、事務局で答えられないことは、質問内容をedu-office@jogu.ac.jpにメール送信
	各講座終了後	講座報告書と成績の提出	
	各講座終了後	各講師の必要経費(交通費、会場費、消耗品費等)について、領収書を受け取り、講座責任者およびJpGU事務局に送付	各講師から領収書等を提出取り浦上に渡す。必要な場合は、教育後援委員会委員等より職員免許講習口座への資金移動。文払い領書を作成し、各講師に送付。
	各講座終了後	講座毎の収支計算書を作成し、JpGU事務局に報告	決算書に記載
⑤	12月以前	連合理事会へ報告書を作成・提出し、次年度計画の可否について審議を受ける。	免許状更新講習評価結果報告書を送り、電子メールにより提出(講習終了後2ヶ月以内)。但し免許状更新講習受講者評価書(様式第8号)は提出しない。

(注1):講師料金は1単位(6時間)で3万円。複数の講師の場合は、講座責任者は時間数を割り振り担当グループに連絡する。事務局や事務局は1単位5000円で支払う標準とする。なお、2日以内の講習は22単位(12時間)の万円

国内外の専門家によるシンポジウム



楽しく学べる防災実験



災害に対する  
備えは万全ですか？



仙台  
で

学ぶ、体験する、考える

# 防災3イベント 同時開催!

乗って、見て、遊ぼう



会場

ご家族から専門家までみなさまの  
ご来場をお待ちしております。

## 仙台国際センター 東北大学川内萩ホール

防災の最新情報を発信



みなさん  
来てね~!



MAP



Check! 平時の備え

- 安否確認手段、避難場所等の確認
- 最低3日分(推奨1週間分)の水・食料・生活必需品の備蓄
- ご家庭での地震対策(家具の固定など)

なにが  
できるのかな?



温かい炊き出しも!



World  
BOSAI  
Forum

IDRC 2017 in SENDAI  
世界防災フォーラム/防災ダボス会議@仙台 2017  
**11/25(土)~28(火)**

主 催:世界防災フォーラム実行委員会  
共 催:東北大学、仙台市、GRF Davos、科学技術振興機構(JST)

世界防災フォーラム

検索

# ぼうさい こくたい

防災推進国民大会 2017

「大規模災害に備える ~みんなの連携が力になる防災~」

**11/26(日)~27(月)**

主 催:防災推進国民大会2017実行委員会  
(内閣府(防災担当)、防災推進国民会議、防災推進協議会)

ぼうさいこくたい

検索

# 2017

# 防災産業展

in 仙台

伝えよう、未来に教訓と備えを

**11/26(日)~27(月)**

主 催:日刊工業新聞社  
共 催:内閣府(防災担当)、宮城県、仙台市

防災産業展 仙台

検索



「炊き出し」を体験しよう!



みんなで作ろう!考えよう!  
ワークショップ



大規模な火事

(来場者サービス)  
温められる  
備蓄食の  
プレゼント  
※先着順



プレートを学ぼう!  
「プレートパズル」



津波避難場所



「いろいろな消防車大集合!」



「暴風雨を疑似体験!  
HERASEON」

おいしい  
模擬店も  
あるよ!



土震



避難場所



宝を見つけた  
君には  
プレゼントも!

防災×宝探しゲーム  
～ピクトグラムと大賢者の秘宝～



セッションで  
詳しく学ぼう!!

- 大規模災害 ●地区防災計画
- リスクガバナンス ●保険・共済
- センター ●ボランティア
- Build Back Better ●学術
- 避難所 ●防災教育



「自衛隊車両をみよう!」

楽しみながら  
防災を学べる  
防災科学ショー※



親子で冒険!  
防災ラビリンス※

ゲームで学ぼう!  
防災カルタ・  
減災クイズ※



※「国際センター駅」せんだい防災  
パビリオン(11/26日のみ)

防災を「学ぶ、体験する、考える」みんなのイベント

# ぼうさいこくたい

## 防災推進国民大会 2017

「大規模災害に備える ～みんなの連携が力になる防災～」

平成29年

日時: **11月26日(日)～27日(月)**  
両日とも10:00～17:00

会場: 仙台国際センター  
せんだい青葉山交流広場  
国際センター駅

参加・入場  
無料

主催: 防災推進国民大会 2017  
実行委員会[内閣府(防災担当)/  
防災推進協議会/ 防災推進国民会議]



お問い合わせ

防災推進国民大会 2017 運営事務局  
(株式会社フォンテック内)  
TEL:03-5545-9191 (平日9:30～18:30)

<http://bosai-kokutai.jp/>  
ぼうさいこくたい

検索



## セッション

### 【会議棟 大ホール】

- 11/26(日) 10:00~10:30 オープニング
- 11/26(日) 10:30~12:00 ハイレバ/パネルディスカッション「大規模災害に備える連携」
- 11/27(月) 14:30~16:00 クロージングセッション「防災推進国民大会2017の振り返りと今後の展望」

### 【会議棟2F 橘】

- 11/26(日)12:30~ 内閣府(防災担当)「あの時地区防災計画があれば…」
- 11/26(日)14:15~ 内閣府(防災担当)「リスクガバナンス ~大規模災害を乗り切る～」
- 11/26(日)16:00~ JVOAD/NPO・ボランティアセッション  
~地域における連携を進め、災害支援の裾野を広げる～
- 11/27(月)10:15~ MS&ADインシュアランス グループ  
「会社が安心で地域も安心(中小企業向け、BCPの基本を学ぶ)」
- 11/27(月)12:00~ 日本防災産業会議「日本防災産業会議の活動」

### 【会議棟2F 萩】

- 11/26(日)14:15~ 東北大学(災害科学国際研究所)  
「東北スペシャルセッション～Build Back Better よりよい復興～」

### 【会議棟2F 桜1】

- 11/26(日)11:30~ 日本学術会議 防災減災・災害復興に関する学術連携委員会、防災学術連携体「衛星情報・地理情報と防災イノベーション」
- 11/26(日)13:00~ 日本学術会議 防災減災・災害復興に関する学術連携委員会、防災学術連携体「衛星情報・地理情報を防災に生かそう」
- 11/26(日)15:15~ 日本消防協会「大規模災害にどう備えるか」

### 【会議棟1F 桜2】

- 11/26(日)12:30~ 内閣府(防災担当)「保険・共済をはじめとした個人・企業の備え」
- 11/26(日)14:15~ (一社)日本損害保険協会  
「防災教育これまでとこれから～防災教育と地域防災の融合、好取組みと課題～」
- 11/26(日)16:00~ 防災科学技術研究所、人と防災未来センター、防災教育普及協会、文部科学省  
「防災教育の過去、現在、未来」

### 【展示棟 会議室3】

- 11/26(日)12:40~ TEAM防災ジャパン(内閣府)「リレポート「どう備える? 備蓄」」
- 11/26(日)14:15~ 内閣府(防災担当)「災害時のトイレの確保・管理」
- 11/26(日)16:00~ 内閣府(防災担当)「地域はもっと強くなれる～多様な主体による防災の現場～」
- 11/27(月)10:30~ 仙台市(危機管理室 減災推進課)「仙台市地域防災リーダー(SBL)の活動について」
- 11/27(月)12:10~ (公社)日本地震学会  
「地震研究最前線 いま何が分かって何を伝えられるか、まだ何が分かっていないのか」

### 【展示棟 会議室4】

- 11/26(日)10:30~ みやぎ生協・日本生協連「食料備蓄で「みんなで減災」」
- 11/26(日)12:00~ 東北大学 課外・ボランティア活動支援センター  
「震災の記憶を伝え、災害を防ぐための大学生と地域の連携」
- 11/26(日)13:40~ 東日本大震災支援全国ネットワーク(JCN)  
「東日本大震災・市民セクターの果たした役割とこれからの展開」
- 11/26(日)15:10~ 特定非営利活動法人事業継続推進機構「事業継続普及セミナー」
- 11/27(月)10:05~ 一般社団法人福祉防災コミュニティ協会  
「すべての福祉施設が「福祉防災計画」作成を」
- 11/27(月)12:05~ 国立大学法人福島大学つくしまふくしま未来支援センター  
「東日本大震災・原子力災害からの教訓 ~大規模複合災害を通して防災を考える～」

### 【展示棟 小会議室4】

- 11/26(日)13:20~ 一般財団法人危機管理教育&演習センター  
「この原理を活用した救出活動方法の実演と体験トレーニング(なでしこ危機管理SAT)」

## ブース展示

### 【展示棟】

- 仙台白百合学園高等学校「外国人への支援体制」
- みやぎ生協・日本生協連「Fucco(手作り商品で復興支援)」
- 一般社団法人全国建設業協会「つくろなのおすまじ!まなも地域建設業の取り組み」
- 一般社団法人宮城県建設業協会「一般社団法人 宮城県建設業協会の活動」
- 東北大学グローバル安全学トップリーダー育成プログラム(G-Safety)  
「地域の防災・減災を考える学生自主企画の活動報告」
- 宮城県(総務部危機対策課)「みやぎの地域防災力」
- 環境省 動物愛護管理室「ペットも守ろう!防災対策。」
- 国立国会図書館「東日本大震災アーカイブ(ひなぎく)」
- (公社)全国子ども会連合会「ぼうさいこくたい 会場たんけん」
- 仙台市(危機管理室 減災推進課)「自助の仕組みと、共助の取組み」
- 日本労働組合総連合会(連合)「連合の防災・減災への取り組み紹介」
- リアルタイム地震・防災情報利用協議会(REIC)  
「「ハザード・リスク実験コンソーシアム」と「緊急津波避難情報システム」の紹介」
- 一般社団法人福祉防災コミュニティ協会「すべての福祉施設が「福祉防災計画」作成を」
- 尚絅学院大学 ボランティアチームTASKI(たすき)「名取市内の被災地での活動」
- 東北学院大学災害ボランティアステーション「災害時の社会資源としての学生ボランティアと大学ボランティアセンターの取り組み」
- 三陸&東海防災教育フェスティバル ~伝~ 実行委員会「防災を通しての地域連携・教育活動」
- 国立研究開発法人情報通信研究機構 耐災害ICT研究会「耐災害ICT研究と地域連携」
- 農林水産省「災害時の食料はどうする?」
- 一般社団法人日本建設業連合会「建設会社の防災活動」
- 石油連盟「万が一の災害時に命を支える石油機器の紹介」
- 東北福祉大学防災士協議会 Team Bousaisai「防災を次世代へ繋ぐ!学生防災士の活動」
- 東北大学 災害科学国際研究所 地震津波リスク評価(東京海上日動) 寄附研究部門  
「地震津波リスク評価および総合的な防災・減災に向けて ~産学の連携を通じて~」
- 仙台管区気象台「あなたの命を守る 防災気象情報の改善」
- 一般社団法人日本集団災害医学会・日本DMAT「一般社団法人日本集団災害医学会・日本DMAT・日本の災害医療体制」
- 一般社団法人日本リモートセンシング学会「防災分野における活動」
- 特定非営利活動法人日本火山学会「火山とその災害について学ぼう」
- 宮城県多賀城高等学校「防災減災の取り組み」
- 仙台市(まちづくり政策局 震災復興室)「東日本大震災からの仙台的復興」
- 国立研究開発法人防災科学技術研究所「陸海統合地震津波火山観測網」
- 文部科学省・政府地震本部 × 国立研究開発法人海洋研究開発機構「真相を追え! 海底地震の謎に迫る!」
- 防災ジオラマ推進ネットワーク「段階ボールジオラマ防災授業」

### 【会議棟】

- 総務省 東北総合通信局「災害時における通信確保のための支援」
- 復興庁 男女共同参画班「多様な視点で考えよう復興における男女共同参画」
- 国連国際防災戦略事務局(UNISDR)「Global Efforts on Disaster Risk Reduction - 防災に関するグローバルな取り組み -」International Recovery Platform 国際復興支援プラットフォーム(IRP)「Build Back Better(より良い復興)」に関する経験と教訓を発信
- マンションライフ継続支援協会(MALCA)/AGC旭硝子(ガラスパワーキャンペーン)「マンション防災の普及啓発」
- 日本ジオパークネットワーク「ジオパークは、自らの命を守る防災教育」
- アールシーソリューション株式会社「緊急地震速報アプリ「ゆれるコール」」
- NPO法人防災士会みやぎ「防災士会みやぎの活動」
- 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター  
「阪神・淡路大震災の経験と教訓を伝える災害ミュージアム」
- 認定NPO法人防災・減災サポートセンター「地域防災マップ(マイマップ)づくり」
- (一財)ペット災害対策推進協会「ペットの災害対策」
- 日本気象協会「3分間の豪雨・暴風体験アトラクション」
- (一社)日本損害保険協会「損害業界の防災・減災に関する取組み」
- 仙台市(太白区 家庭健康課)「子育て家庭の防災講座」
- 仙台市(市民局 男女共同参画課)「防災と男女共同参画」
- 仙台八木山防災連絡会「ライフラインがもたせても、いつものように!」
- 雨水ネットワーク東北「仙台天水桶の紹介」
- (独)国際協力機構 JICA東北支部「持続可能な開発に向けた防災国際協力」

## 【ポスターセッション】

### 【展示棟】

- 仙台市社会福祉協議会「「災害時のボランティア活動」と「支えあいセンター」の被災者支援活動」
- 一般社団法人宮城県建設業協会「一般社団法人 宮城県建設業協会の活動」
- 仙台市(文化観光局 文化振興課)「音楽の力による心の復興」
- 仙台市(文化観光局 東北連携推進室)「東北連携による復興ツーリズムの推進」
- 仙台市(教育局 生涯学習課)「3がつ11にちをわすれないためにセンター」

### 【会議棟】

- 東北大学 課外・ボランティア活動支援センター  
「震災の記憶を伝え、災害を防ぐための大学生と地域の連携」
- 災害看護グローバルリーダー養成プログラム(DNGL)「地域で育む防災力 ~産官学民連携を中心とした災害看護の取り組み～」
- 日本医師会・宮城県医師会「「地域包括ケア」と災害」
- 国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所「森林の放射性物質はどうなったか」
- 林野庁「海岸防災林の復旧・再生に向けて(東日本大震災からの復興)」
- 和歌山県「和歌山県の防災対策と「福むらの火」」
- 宮城県(土木部復興まちづくり推進室)「宮城県沿岸15市町の復興まちづくり事業について」
- 日本学術会議 防災減災・災害復興に関する学術連携委員会、防災学術連携体「衛星情報・地理情報と防災イノベーション」
- 東北大学災害科学国際研究所・東北大学リーディング大学院グローバル安全学トップリーダー育成プログラム 福島県いわき市津波避難プロジェクト「津波災害時における自動車の避難をどう考える?」
- 国土交通省 東北地方整備局「公共施設の早期復旧、自治体支援と災害伝承」
- 熊本県・熊本大学「平成28年熊本地震の経験、教訓」
- 東京都「東京都における防災普及啓発の取組」
- 関西広域連合広域防災局「関西広域連合広域防災局の取り組み」
- 一般社団法人防災教育普及協会「地域における防災教育の実践」
- アジア防災センター「アジア地域の防災協力の推進」
- 防災推進協議会「第32回防災ポスターコンクール入賞作品」
- 日本赤十字社「日本赤十字社の活動紹介」

## 【屋外】(せんだい青葉山交流広場)

- 総務省 東北総合通信局「災害時における通信確保のための支援」
- 東北大学災害科学国際研究所・日産自動車株式会社・オートモーティブエナジーサプライ株式会社  
「災害時対応型電気自動車(EV)」
- 陸上自衛隊 第6師団 第22普通科連隊「自衛隊車両(展示)」
- 日本防火・防災協会「婦人防火クラブによる炊き出し」
- 全国消防長会・仙台市消防局「いろいろな消防車大集合 ~乗って・見て・楽しんで きみも消防士だ!~」
- 飛鳥特装株式会社「地震体験」
- 仙台市・NTTドコモ・一般社団法人ドローンテックラボ仙台「防災・減災ドローンに関する屋外展示」
- 防災×謎解き宝探しゲーム~ピクトグラムと大賢者の秘密~

## 【ワークショップ】

- 【テントA】 ■11/26(日)10:00~ 仙台管区気象台  
「大雨防災ワークショップ ~経験したことのない大雨 その時どうする?~」
- 11/27(月)10:00~ 日本赤十字社「日本赤十字による救急体験」
- 【テントB】 ■11/26(日)13:00~ 損害保険ジャパン日本興亜株式会社  
「防災ジャパンプロジェクト 防災ワークショップ」
- 【テントC】 ■11/26(日)10:00~ わしん倶楽部「PUSHプロジェクト『胸骨圧迫&AEDの使い方を学ぶ』」
- 11/26(日)13:00~ 防災ジオラマ推進ネットワーク  
「みんなで作ろう!段階ボールジオラマ ワークショップ」
- 【テントD】 ■11/26(日)10:00~ 認定特定非営利活動法人アフタースクールばるけ  
「地域における自助・共助の活動 障害児者の家族からのメッセージ」

## 【せんだい防災パビリオン】 ※仙台市主催

- 東北福祉大学「防災レンジャーショー」減災カルタ・クイズ」
- 宮城教育大学幼児教育講座「紙芝居「じしんのときのおやくそく」」
- 東日本放送「防災×リリ〜ず劇場」
- NPO法人 防災士会みやぎ「減災絵本「リオン」」
- 八木山防災パフォーマンスチーム「ぼうさいダンス」
- ミヤテレ震災復興プロジェクト「ミヤテレおまもり教室」
- サイエンスインストラクター・防災士 阿部清人「実験教室 防災エンスショー」
- わしん倶楽部「災害対応カードゲーム「クロスロード」」
- 仙台市地域防災リーダー(SBL)有志「カラフル防災ラタンと防災スイーツを作ろう!」
- 埼玉県防災学習センター「段階ボール迷路 BOUSAI QUIZ☆ラビリンス」
- 仙台市(都市整備局建築指導課・青葉区街並み形成課)  
「ペーパーフラット「紙ぶるる」で地震に強いおうちを作ろう!」

## オープンサイエンス関連動向の紹介 – AGU「プレプリントサーバ」の議論へ向けて –

AGU プレスリリース「Earth and Space Science Open preprint server to be powered by AGU and Atypion」  
(21-SEP-2017)

AGU から Web メディア Eureka Alert を通じて、地球惑星科学分野のプレプリントサーバ「ESSOAr (Earth and Space Science Open Archive)」を立ち上げた記事リリースがあった。

プレプリント (投稿前・査読前の論文原稿) , また会議資料 (主にポスター論文資料) をサーバ上で共有。誰でもアクセス可能。Wiley 社も支援。

地球惑星科学の研究者にとって、より迅速なコミュニティからの反応・意見が聞けて、自分の研究活動の素早くオープンな周知・広報も可能になる。

アップロードされた原稿・資料には DOI (Digital Object Identifier) が付与される

プレプリントサーバ ESSOAr は、従来の論文原稿アーカイブにくわえて、プレゼンテーション資料、ポスター論文資料、関連するマルチメディア (音声、映像など) の資料を引用可能とする、研究者にとっての新しい選択肢となる。

AGU CEO Chris McEntee 談「AGU はこれまでずっとオープンサイエンスを推進・啓蒙してきた。プレプリントサーバはその上でさらに我々の活動を強化し、オープンアクセスジャーナルとケ休データマネジメントを発展させるものになるだろう」

原稿・資料のアップロードは 2018 年から可能になる予定。

### 第 2 回 SPARC Japan セミナー 2017

「プレプリントとオープンアクセス」参加報告書

10 月 30 日 11:00~16:40 @ 国立情報学研究所

#### 講演者

「arXiv.org の次世代システムの公開と戦略」

引原 隆士 (京都大学図書館機構長/arXiv.org 会員コンソーシアム代表)

「学術情報共有とオープンアクセスの未来」

Gregg Gordon (Managing Director, SSRN)

プレプリント各論(1) 「化学分野におけるプレプリントの位置付け・課題等について」

生長 幸之助 (東京大学大学院薬学系研究科/化学ポータルサイト Chem-Station 副代表)

プレプリント各論(2) 「生命科学分野におけるプレプリントの位置付けや経験について、統合 TV について」

小野 浩雅 (情報・システム研究機構ライフサイエンス統合データベースセンター)

全体議論：モデレータ 坊農 秀雅

(情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター)

JpGU 出席者：村山泰啓, 篠崎美典

■ 村山先生による各分野ごとの状況のまとめ：

Physics (インターネット利用前の 1991 年に開始)
<ul style="list-style-type: none"><li>・プレプリント文化がかなり浸透している。</li><li>・学問部分野とプレプリントの親和性が高い。</li><li>・高温超電導を期にプレプリントが急速に普及した。</li></ul> <p>※現在同じような現象が例えばディープラーニング研究分野で起きている。共通しているのは研究の進展が速すぎて、査読を待ってられない状況による先取権の確保のために登録している。</p>

Biology
<ul style="list-style-type: none"><li>・Physics 同様に普及してきている。しかし分野による認識の差は依然ある。</li></ul>

Chemistry
<ul style="list-style-type: none"><li>・Physics, Bio と比べると距離がある。</li><li>・多くの研究者が、プレプリント文化を進める立場からは心理的に遠いと感じている。</li><li>・Bio-chemistry などの境界領域研究が増えたことから、bio の文化として化学研究者が投稿前論文原稿をプレプリントサーバへ入れるようになってきた。</li></ul> <p>※日本化学会や米国化学会のトップジャーナルはプレプリントサーバへアップロードされた原稿は受理しない。 ⇒コミュニティ全体あるいは中枢として合意はまだされていない。</p>

全体意見
<p>※講演者の実体験として、査読中の論文と同じ実験結果図面が何度も他の研究グループの論文（先行して出版された）の中で、結果として出てきた経験があるとのこと。</p> <p>これは、実験パラメータなどが盗まれたのでは？という疑惑を払しょくするためにも、先行者の実験結果をタイムスタンプ付きで公表しておくのは重要か。</p> <p>※分野内で学会、ジャーナル、機関などステークホルダー間でプレプリントの利用・投稿・業績認知などが同期して進んでいるわけではない。</p> <p>各研究者・グループ自身のモチベーションが主な原動力か。</p>

■ 地球惑星科学でのプレプリント浸透の見通し

化学会での浸透の仕方を見ると、生物地球科学や素粒子物理に関わる宇宙惑星科学など、従来プレプリントサーバを利用していた分野との横断的・複合的分野の研究者がプレプリントサーバを持ち込むならば、浸透していく可能性があるのではないか。（村山）

プレプリントが普及している分野は、研究活動→論文発表の一連の流れの中に、プレプリントサーバでの公開がすでに組



み込まれている。地惑分野でのそもそもの必要性については、研究活動の文化・慣習とプレプリントサーバとの親和性を検討・確認する必要がある、また、普及については、ジャーナルがプレプリントサーバ公開後原稿を受け入れるポリシー確立（物理学のように）と、国際的なルールの統一が確保されていないと難しいのではないかと思う。（存在するインフラは「使わなくてもよい」が、使ったことで「損をする」（ジャーナルに投稿できなくなる等）ことは避けなければいけない）研究者個人の利益のみで考えると、地惑分野とプレプリントサーバについては多少ネガティブな印象を持ったが、同時期に参加したオープンサイエンスのシンポジウムで議論されていた国内外動向も同時に考慮すると、研究結果を正しい権利の元で正しく公開・シェアする観点においてプレプリントサーバは有効であり、プレプリントサーバの文化を普及させ、研究者に限らず、だれでも最新の研究結果にアクセスできるインフラの提供はJpGUの活動の一つとして有り得ると思う。また、そのように、自分のデータが正しい権利の元でアーカイブされるということ、そのデータが実際に他者に活用されるまでに行けば、公開する研究者のモチベーションにもつながるのではないかと考える。（篠崎）

【AGUがEureka Alertから公表したプレプリントサーバに関する記事】

**PUBLIC RELEASE: 21-SEP-2017**

## Earth and Space Science Open preprint server to be powered by AGU and Atypon

AMERICAN GEOPHYSICAL UNION

WASHINGTON, DC, AND SANTA CLARA, CA -- The American Geophysical Union (AGU) and Atypon announced today a joint initiative to develop [Earth and Space Science Open Archive \(ESSOAr\)](#), a community server for the open dissemination of Earth and space science preprints and rich conference presentations. Development of the server, community engagement, and policies and practices will be a community effort guided by an international advisory board that will include representatives from societies across the Earth and space sciences. Its initial development will be supported by Wiley, AGU's publishing partner.

Preprint servers allow researchers to receive peer feedback that improves the final published output, and facilitates faster, open dissemination of research. Research outputs posted on preprint servers are also fully citable via digital object identifier (DOI) and freely accessible.

Atypon is building the new open access Earth and space science preprint server on top of its online publishing platform, Literatum, which will provide stability and regular feature enhancements, as well as content format interoperability.

ESSOAr will extend the traditional role of archiving manuscripts by also allowing researchers the option to preserve and to make citable presentations, posters, and related multimedia content from scientific conferences. More than 50,000 posters are presented across Earth and space science conferences, including about 17,000 at the AGU Fall Meeting. These are rich presentations of original research that can add to the understanding of the scientific process, but unless a follow-up article is published on the topic, that science is no longer discoverable. Their preservation will greatly increase scientific transparency.

"AGU has long been an advocate for open science and proper attribution of research, in collaboration with other organizations in the Earth and space science community," said Chris McEntee, AGU Executive Director and CEO. "The introduction of a preprint server for the Earth and space sciences builds on our previous efforts and public statements in open science, which include the expansion of AGU's open access journals and development of data management programs, and advances this work even further."

"Our interest and involvement in the ESSOAr initiative reflects our corporate commitment to open science", said Georgios Papadopoulos, Atypon's founder and CEO. "Offering preprint capabilities to support researchers' editorial needs is a natural extension of our core platform."

An advisory board will help guide ESSOAr, and currently includes participation from the Association for the Sciences of Limnology and Oceanography, Earth Science Information Partners, European Geosciences Union, Geochemical Society, Geological Society of America (GSA), Japan Geoscience Union (JpGU), and Society of Exploration Geophysicists. "GSA is pleased to participate in this advisory group to explore all the options for preprint publications," said Vicki McConnell, Executive Director, GSA.

"We appreciate the opportunity to learn about and guide a larger effort around developing preprint options for our community," added Kiyoshi Suyehiro, International Program Coordinator, JpGU.

Participation on the board does not constitute endorsement by the societies, though it is anticipated that each organization, through its own governance process, will endorse the effort. AGU hopes that other Earth and space science societies and scholarly publishers will join this effort.

###

[ESSOAr](#) will begin accepting content in 2018.

The [American Geophysical Union](#) is dedicated to advancing the Earth and space sciences for the benefit of humanity through its scholarly publications, conferences, and outreach programs. AGU is a not-for-profit, professional, scientific organization representing nearly 60,000 members in 139 countries. Join the conversation on Facebook, Twitter, YouTube, and AGU's other social media channels.

### **About Atypon**

[Atypon](#) was founded in 1996 with headquarters in Santa Clara, CA, and offices worldwide. The company's publishing platform, Literatum, provides easy-to-use tools and automated technologies that free publishers to focus on content--not technology--giving them as much control of the presentation, marketing, and sale of their online publications as they choose, as well as full support for any content type. Continual investment in innovation and development talent has helped create world-class software that allows publishers to quickly and cost-effectively build and revise content sites with their branding front and center, analyze and respond to usage patterns, manage user access, enhance content discovery and support marketing and digital commerce.

**Disclaimer:** AAAS and EurekAlert! are not responsible for the accuracy of news releases posted to EurekAlert! by contributing institutions or for the use of any information through the EurekAlert system.

## 第2回 SPARC JAPAN セミナー2017

# プレプリントとオープンアクセス



"Open in Order to ..."

日時：平成29年10月30日（月）11:00-16:40  
場所：国立情報学研究所 12階 1208,1210会議室

### 登壇者

- ・ 引原 隆士（京都大学図書館機構長/arXiv.org会員コンソーシアム代表）
- ・ Gregg Gordon（Managing Director, SSRN）※逐次通訳付き
- ・ 生長 幸之助（東京大学大学院薬学系研究科/化学ポータルサイトChem-Station副代表）
- ・ 小野 浩雅（情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター）

### 本セミナーの目的

オープンアクセスは、主にリポジトリを活用するグリーンOAと、ジャーナルを無料化するゴールドOAと呼ばれる方法のいずれかによって実現されると考えられている。arXivを嚆矢とする分野別プレプリントサーバはこれまでリポジトリの一種別として位置付けられ、かつ、査読の前の草稿であることが原則であるため、研究成果の商業的流通への影響が少ない存在として理解されてきた。しかし、なかなかプレプリント流通が普及しなかった化学、生命科学の分野でも近年急速にプレプリント掲載数が増加する傾向が顕著となり、有力な学会誌をもつ国際学会（ChemRxivのACS他）や商業出版者（BioRNのElsevier）がプレプリントサービスの

提供に参入してきている。さらに、これらのプラットフォームはデータ公開を含めて設計されており、オープンアクセスの展開におけるプレプリントサーバの位置づけは大きく変化しつつあるといつてよい。

今年度の第2回目のSPARC Japanセミナーでは、プレプリントサーバの機能、運営の約30年の変遷を振り返りつつ、この変化の渦中にある研究者からの提言、さらに研究者ネットワークの商業出版者にとっての意義を論じ、研究推進への寄与、持続性のあるビジネスモデルの構築、質の確保などの将来の課題を含めてこれからのオープンアクセスを展望する。

主催：SPARC Japan（国立情報学研究所）



## プログラムおよび講演者

11:00- 11:10	開会／概要説明	坊農 秀雅 (情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター)
11:10- 11:55	arXiv.org の次世代システムの 公開と戦略	引原 隆士 (京都大学図書館機構長 /arXiv.org会員コンソーシアム代表)
11:55 - 13:00 休 憩		
13:00- 14:00	学術情報共有と オープンアクセスの未来	Gregg Gordon (Managing Director, SSRN)
14:00 - 14:10 休 憩		
14:10- 14:55	プレプリント各論(1) 化学分野におけるプレプリント の位置付け・課題等について	生長 幸之助 (東京大学大学院薬学系研究科 /化学ポータルサイトChem-Station副代表)
14:55- 15:40	プレプリント各論(2) 生命科学分野におけるプレプリ ントの位置付けや経験について、 統合TVについて	小野 浩雅 (情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター)
15:40 - 16:00 休 憩		
16:00- 16:30	全体議論	モデレーター 坊農 秀雅 (情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター)
16:30- 16:40	閉会挨拶	

参加費：無料

参加申込：下記URLよりお申し込みください。

<https://www.nii.ac.jp/sparc/event/>

申込期限：平成29年10月26日（木）



お問い合わせ先：国立情報学研究所 学術基盤推進部  
学術コンテンツ課支援チーム SPARC担当  
E-mail [co\\_sparc\\_all@nii.ac.jp](mailto:co_sparc_all@nii.ac.jp) FAX 03-4212-2375

# 「デジタルアーカイブ」と「研究データ」 の出会いシンポジウム

## “Digital Archive” meets “Research Data” ～データの保存と活用へ、ライブラリアンとアーキビストの挑戦

日時: 2017年11月6日(月) 13:30~17:45 (13:00開場)  
会場: 国立国会図書館 東京本館 新館講堂



Twitter ハッシュタグ:  
#JaLC\_RDUF2017

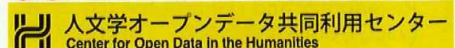
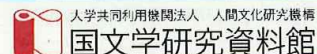
### 本日のプログラム

- 13:30~13:35 >>開会にあたって 国立国会図書館電子情報部長 小寺 正一
- <第一部：国際会議報告>
- 13:35~13:55 >>5年目のRDAと次のステップへむけて～RDAモントリオール総会から  
情報通信研究機構 戦略的プログラムオフィス研究統括、RDUF副会長 村山 泰啓
- 13:55~14:10 >>RDAに参加して～デジタルアーカイブとの接点  
文部科学省科学技術・学術政策研究所 科学技術予測センター 上席研究官 林 和弘
- 14:10~14:30 >>デジタルデータの長期保存～iPRES2017  
筑波大学図書館情報メディア系教授 杉本 重雄
- 14:30~14:45 >>iPRESに参加して～JPCOARの取組みから研究データの保存を考える  
国立極地研究所情報図書室 南山 泰之
- 14:45~14:55 >> 休憩
- <第二部：国内事例報告>
- 14:55~15:15 >>デジタルアーカイブと研究データ：人文学における利活用の展望  
人文学オープンデータ共同利用センター長、国立情報学研究所准教授 北本 朝展
- 15:15~15:30 >>研究データとしての古典籍：その必要と活用  
国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター 副センター長 山本 和明
- 15:30~15:45 >>自然史標本データのアーカイブと研究  
国立科学博物館動物研究部 研究主幹 神保 宇嗣
- 15:45~16:00 >>アジア歴史資料センターの利活用  
国立公文書館アジア歴史資料センター 次長 佐野 豪俊
- 16:00~16:15 >>国立国会図書館におけるデジタルアーカイブと研究データ～保存と活用の可能性  
国立国会図書館電子情報部 副部長 川鍋 道子
- 16:15~16:30 >> 休憩・質問票提出
- 16:30~16:40 >> 研究データ活用協議会案内 国立情報学研究所教授、RDUF会長 武田 英明
- <第三部：討論>
- 16:40~17:40 >> フロアも交えたディスカッション  
「デジタルアーカイブと研究データの出会い：保存と活用における課題と知見の共有に向けて」  
司会：人文学オープンデータ共同利用センター長、国立情報学研究所准教授 北本 朝展
- 17:40~17:45 >> 閉会挨拶 国立情報学研究所教授、RDUF会長 武田 英明

主  
催



後  
援



## ◆ 講師ご紹介（発表順）

### 村山 泰啓（情報通信研究機構戦略的プログラムオフィス研究統括）

ICSU-WDS (World Data System)国際科学委員会ex officio委員、日本学術会議連携委員、国立極地研究所南極観測審議委員会委員、公益社団法人日本地球惑星科学連合理事。1999-2006年は北極域アラスカにおける上層大気観測日米共同研究計画の日本側リーダーを務める。京都大学生存圏研究所客員教授、内閣府「国際動向を踏まえたオープンサイエンスの推進に関する検討会」委員、国立国会図書館科学技術情報整備審議会専門委員などを歴任。文部科学大臣表彰科学技術賞受賞（2007年）。京都大学工学博士（1993年）。

### 林 和弘（文部科学省科学技術・学術政策研究所科学技術予測センター上席研究官）

東京大学大学院で有機化学を専攻しながら、1995年頃に行った日本化学会ジャーナルの電子化をきっかけに、学術情報流通の変革（デジタル化、Web化、オープン化）に対して、多様なステークホルダーと協働して包括的に取り組む。日本化学会学術情報部課長を経て、2012年より現職。学術情報流通と研究者社会の将来に関する調査研究活動を行う。研究データ活用協議会やSPARC Japan等の実践の場からのボトムアップと、内閣府やG7科学技術大臣会合オープンサイエンス作業部会メンバー等、トップダウンからの政策作りの双方を通じてオープンサイエンスを推進。

### 杉本 重雄（筑波大学図書館情報メディア系教授）

1982年京都大学大学院工学研究科情報工学専攻単位取得退学。京都大学工学博士（1985年）。1990年代よりデジタルライブラリ、メタデータの研究に従事。現在、Dublin Core Metadata Initiative Governing Board、International Conference on Asia-Pacific Digital Libraries (ICADL)、Joint Conference on Digital Libraries (JCDL)、International Conference on Preservation of Digital Objects (IPRES)のSteering Committee等のメンバーを務める。

### 南山 泰之（国立極地研究所情報図書室）

2005年より国立極地研究所情報図書室に勤務。2007年～2008年、第49次日本南極地域観測隊に参加。その後、東京大学駒場図書館（2011年～2014年）を経て現職。オープンアクセスリポジトリ推進協作業部会、ジャパンリンクセンター運営委員会サービス企画分科会委員。研究データを中心とした電子リソースの保存、利活用促進に関心を持つ。

### 北本 朝展（人文学オープンデータ共同利用センター長、国立情報学研究所コンテンツ科学研究系 准教授）

1997年東京大学工学系研究科電子工学専攻修了。博士（工学）。現在、情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設 人文学オープンデータ共同利用センター センター長、国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系 准教授、総合研究大学院大学 情報学専攻 准教授。画像データの分析を中心に、データ駆動型サイエンスを人文科学や地球科学、防災等などの分野で幅広く展開する。文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員会推薦作品、山下記念研究賞などを受賞。オープンサイエンスの展開に向けた超学際的研究コラボレーションにも興味を持つ。

### 山本 和明（国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター 副センター長）

神戸大学大学院文化科学研究科（博士課程）修了。博士（文学）。19世紀日本文学の研究者。相愛女子短期大学、相愛大学教授を経て、2013年10月より現職。2014年4月からスタートした大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」では、その当初から計画立案に携わり、事業を推進している。異分野融合研究や研究開発系共同研究などにも従事。

### 神保 宇嗣（国立科学博物館動物研究部 研究主幹）

2005年、東京都立大学大学院理学研究科博士課程修了、博士（理学）。東京大学総合文化研究科勤務を経て、2012年より国立科学博物館動物研究部研究員、2016年より現職。専門は、昆虫分類学および生物多様性情報学。蛾類の分類学的研究、昆虫類標本資料の収蔵管理、展示・普及事業等に従事する一方、サイエンスミュージアムネット、地球規模生物多様性情報機構（GBIF）の活動にも関わる。GBIF日本ノードワーキンググループメンバー。

### 佐野 豪俊（国立公文書館アジア歴史資料センター次長）

1986年東京大学教養学部卒。同年外務省入省。大臣官房総務課情報公開室長、在ウィーン国際機関日本政府代表部参事官、在アルゼンチン日本国大使館公使を務めた他、内閣官房、経済産業省、国際協力銀行（JBIC）にも在籍。昨年10月より現職。

### 川鍋 道子（国立国会図書館電子情報部副部長）

1987年、国立国会図書館入館。資料保存課長、科学技術・経済課長、収集・書誌調整課長を経て、2016年4月から現職。デジタルアーカイブジャパン実務者検討委員会構成員。

### 武田 英明（国立情報学研究所情報学プリンシプル研究系教授）

1991年東京大学 工系研究科修了。工学博士。ノルウェー工科大学、奈良先端技術院を経て、2006年より現職。総合研究大学院複科情報専攻教授兼任。2005-2008年東京大学客員教授、2006-2010年国立情報学研究所 学術コンテンツサービス研究センター長。2011-2015年ORCID (Open Researcher and Contributor ID) Open Researcher and Contributor ID) 理事。専門は Web情報学、人工知能、設計。ジャパンリンクセンター (JaLC)共同運営委員会会長、NPO 法人リンクト・オープン・データ・イニシアティブ理事長も務める。

公益社団法人日本地球惑星科学連合  
平成 29 年度第 1 回ユニオンサイエンスボード会議

1. 開催日時 平成 29 年 11 月 20 日 (月)  
10 時 00 分から 11 時 30 分
2. 開催場所 学会センタービル地下会議室  
(〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル)

3. 出席者

日本学術会議 地球惑星科学委員会

委員長 藤井 良一  
副委員長 田近 英一  
幹事 木村 学  
幹事 春山 成子

日本地球惑星科学連合

会長 川幡 穂高  
副会長 田近 英一  
副会長 中村 正人  
副会長 古村 孝志

(セクションプレジデント)

宇宙惑星科学 高橋 幸弘  
大気水圏科学 蒲生 俊敬  
地球人間圏科学 春山 成子  
固体地球科学 大谷 栄治  
地球生命科学 遠藤 一佳

4. 議長

地球惑星科学委員会委員長 藤井 良一  
会長 川幡 穂高

5. 議事

議長川幡会長より、会議招集の経緯について、日本学術会議地球惑星科学委員会藤井良一委員長より、連合大会のユニオンセッション「地球惑星科学の進むべき道 8: 地球惑星科学分野における将来計画とロードマップ」に関してユニオンサイエンスボードにおいて検討してほしいとの依頼があった旨説明があった。

1. 自己紹介

2. 議事

ユニオンセッションおよびそれに関わる夢ロードマップ、大型研究計画について藤井委員長より

説明があり、ユニオンセッションの準備の進め方について議論した。

議論の結果、夢ロードマップの構想として、中期的な計画として上記のような調査を通じて実現可能な計画を立てること、長期的な計画として目標となるような「夢」を織り込むこと、5セッションのロードマップとは別に分野横断的、更には他分野との連携を見据えた学際的なロードマップも新たに作成すること、前回の項目の内情報として古くなったものは改訂すること、等が合意された。

具体的な準備として、以下の調査を連合が進めることが合意された。

1. セクションプレジデントから代議員やボードメンバーへ調査を依頼し、国立法人や大学の中期の計画を把握しつつ必要な項目をまとめる
2. 学協会長幹事会を通じて学協会へ調査を依頼し、セクションプレジデントへ回答してもらう。  
(なお、複数のセッションにまたがる場合は明記してもらう。)

予定としては12月以降に調査を開始、5月のセッションにはセクションプレジデントによるまとめを発表する。

なおセッションにおいて参加者からの意見を吸い上げる仕組みの必要性が提案され、藤井委員長によりシステムの準備を進めるとの回答があった。

またこのユニオンセッションとその準備を通じて、日本学術会議地球惑星委員会より提言ないし報告を発出することを目指す。

議長は以上をもってすべての議事を終了した旨を述べ、閉会を宣した。



依頼文に含まれる項目

1. 前回の夢ロードマップ資料
2. 改訂の依頼項目
  - \* 長期的観点 - 「夢」の記述
  - \* 中期的観点 - 「実現可能な実施すべき研究項目」の抽出
  - \* 各々のサイエンスセッションごとにポンチ絵と, 1000 字程度の書類 2 ページ
  - \* 前回の夢ロードマップの更新
  - \* Top down, Middle, Bottom up など, どちらも含む
  - \* 省庁に縛られずに俯瞰して網羅願います.
  - \* 複数のセッションにまたがる事項については, 関連セッションに通知するよう要請する.

意見の集約

- \* Inter-Disciplinary な分野 (地球惑星科学内部, 外部) については, ユニオンセッションボードで議論して, 取りまとめを行う.

スケジュール

1. 2019 年 2 月に公募
2. 2018 年冬にヒアリング
3. 2018 年 5 月に JpGU 連合大会でユニオンセッション開催 (案 180 分=20 分\*5+20 分+60 分)
4. 2017 年 12 月に発注依頼.

「夢ロードマップ」とりまとめ模式図

